

高槻市文化財調査報告書 第10冊

# 安満遺跡発掘調査報告書

— 9 地区の調査 —

1977年3月

高槻市教育委員会

高槻市文化財調査報告書 第10冊

# 安満遺跡発掘調査報告書

— 9 地区の調査 —

1977年3月

高槻市教育委員会

## 序 文

本市は古くから文化の栄えた地として有名であり、史跡山上郡衙跡や今城塚古墳など、数多くの遺跡があります。そのなかでも、安満遺跡は高槻市民に古くから親しまれてきた遺跡であり、また三島地方を代表する遺跡でもあります。

この安満遺跡からは、近年の発掘調査により、私たちの祖先の生活を知る手がかりとなる土器や木棺をはじめ、貴重な資料が多数発見されています。さらに、弥生時代の集落や墓地なども発見されており、古代の村落を復原することも不可能ではないように思われます。このような、貴重な資料や遺構を残し、子供たちに伝えていくことは、私たちに課せられた重大な使命でありますが、最近の開発によって遺跡の少なからぬ部分がやむなく消滅をしております。今後とも安満遺跡をはじめとして、文化財保護により一層の努力をしていく所存ですので、御理解、御協力をねがいいたします。

ここにまとめました報告書は、本市教育委員会が昭和47年に調査をおこなった、安満遺跡の調査報告であります。この報告書が弥生時代研究や私たちの祖先の生活を知るうえで、少しでも役にたつならば幸せに存じます。

さいごに、調査および本書の作成にご協力をいただきました関係各位に感謝の意を表します。

1977年3月

高槻市教育委員会

教育長 平井 正吾

## 例　　言

1. 本書は、昭和47年に高槻市教育委員会がおこなった、安満遺跡9地区の調査報告書である。
2. 調査は、高槻市文化財保護審議会委員原口正三氏を調査担当者とし、高槻市教育委員会嘱託橋本久和が従事した。
3. 本書の作成は、森田克行・橋本が担当した。報告書作成全般にわたって、原口正三氏の指導・助言を得た。記して謝意を表したい。
4. 本書の構成および編集は森田がおこなった。
5. 遺構の実測に際しては、関西大学学生西口陽一、近畿大学学生清水重幸両氏の援助を得た。遺物の実測は、森田・橋本がおこなった。製図は、森田がおこない、立命館大学学生鐘ヶ江一朗氏の援助を得た。なお、須恵器・瓦器等の古代・中世の雑器は橋本が担当した。
6. 写真撮影は、遺構を橋本が担当し、遺物は、主として富成哲也が担当した。また、壇棺等の一部の写真は、高槻市史（第6巻）より転載した。
7. 遺物の記載番号は、図版・図面とも同一番号を付した。
8. 着筆は、第Ⅰ章・第Ⅵ章を森田が、第Ⅱ章～第Ⅴ章・第Ⅷ章を橋本が担当した。
9. 本書の作成および出土品の整理にあたって、下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表す。

田代克己・藤井泰雄・恵谷英俊・西口陽一・清水重幸・鐘ヶ江一朗・吉田房子

## 目 次

第Ⅰ章	安満遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章	遺跡の地区割	4
第Ⅲ章	これまでの調査	4
第Ⅳ章	調査経過	9
第Ⅴ章	遺構	
第1節	層序	11
第2節	周溝墓群	11
第3節	土壙	22
第4節	井戸	23
第5節	溝	23
第Ⅵ章	遺物およびその考察	
第1節	弥生式土器（第Ⅱ様式）	
1	周溝墓出土の供獻土器	27
2	土壙6出土の土器	30
第2節	弥生式土器（第Ⅴ様式）	
1	周溝墓A5-2土器群出土の土器	30
2	土壙3出土の土器	49
3	第V様式土器の型式細分について	50
4	受口状口縁土器とS字状口縁土器について	55

第3節 庄内式土器	
1 井戸 1 出土の土器	59
2 井戸 2 出土の土器	60
3 土壙 1 出土の土器	61
4 まとめ	61
第4節 布留式土器	
1 井戸 3 出土の土器	65
2 井戸 4 出土の土器	66
3 土壙 2 出土の土器	66
4 まとめ	67
第5節 包含層出土の土器	72
第6節 その他	75
第VII章 まとめにかえて	
集落の変遷と墓地のあり方	76

## 図版目次

- 図版第1 安満遺跡航空写真
- 図版第2 a. 遺跡遠景(北から・昭和44年撮影)  
b. 遺跡遠景(北東から・昭和44年撮影)
- 図版第3 a. 遺跡近景(東・桧尾川堤防から・昭和42年撮影)  
b. 遺跡近景(西から・昭和42年撮影)
- 図版第4 a. 調査区近景(南・阪急京都線から・昭和48年撮影)  
b. 調査区周辺
- 図版第5 a. 調査区全域  
b. 調査位置
- 図版第6 a. 方形周溝墓A群(北から)  
b. 方形周溝墓B群(北から)
- 図版第7 a. 方形周溝墓A 5 西北部供献土器出土状態(蓋下半部)  
b. 方形周溝墓A 5 北東部供献土器出土状態(蓋上半部)
- 図版第8 a. 方形周溝墓B 1 東側周溝、方形周溝墓B 2(西から)  
b. 方形周溝墓B 1 東側周溝内土器出土状態(西から)
- 図版第9 a. 方形周溝墓B 2 北側周溝内土器出土状態(北から)  
b. 方形周溝墓B 3-2(西から)
- 図版第10 a. 方形周溝墓B 4-2(北から)  
b. 方形周溝墓B 4-2 東側周溝内土器出土状態(西から)
- 図版第11 a. 方形周溝墓A 5-2 土器群出土状態(南から)  
b. 方形周溝墓A 5-2 土器群除去後(南から)
- 図版第12 a. 方形周溝墓A 5-2 土器群出土状態(南半分)  
b. 方形周溝墓A 5-2 土器群出土状態(北半分)
- 図版第13 a. 井戸1(東から)  
b. 井戸2(南から)
- 図版第14 a. 方形周溝墓A 3-3と井戸4(東から)  
b. 井戸4(北東から)
- 図版第15 a. 井戸5(南から)  
b. 土壌1土器出土状態
- 図版第16 周溝墓A 1、小形壺A(1) 周溝墓A 3、壺C(2)・D(3) 周溝墓A 4、甕(6・7)
- 図版第17 周溝墓A 5、甕A(8)・甕A(9) 周溝墓A 5-2、壺A(10) 周溝墓B 1、台付深鉢(11) 周溝墓B 2、壺A(12)
- 図版第18 周溝墓B 3-2、壺A(13)・甕A(14)・B(15) 周溝墓B 4-2、壺A(16) 包含層、壺底部(17)
- 図版第19 周溝墓B 4-2、壺B(17)・甕A(18) 包含層、甕D(8) 打製石錐・銅錐・磨製石錐
- 図版第20 周溝墓A 5-2 土器群、壺A<sub>1</sub>(1~3)・A<sub>2</sub>(4)・B<sub>1</sub>(8)・B<sub>2</sub>(9)
- 図版第21 周溝墓A 5-2 土器群、壺B<sub>1</sub>(5・6)・B<sub>2</sub>(12・14・15)・B<sub>3</sub>(16・17)・D(20)

E (21)

- 図版第22 周溝墓A 5-2 土器群、壺G (23)・H (24)・I (25)・K (27)  
図版第23 周溝墓A 5-2 土器群、壺N<sub>1</sub> (30・31)・N<sub>2</sub> (36・37)・壺底部 (41・45)  
図版第24 周溝墓A 5-2 土器群、壺P (46・50・52)・鉢A<sub>1</sub> (56)・A<sub>2</sub> (57・58)・B<sub>1</sub> (59)・B<sub>2</sub> (63)  
図版第25 周溝墓A 5-2 土器群、鉢C<sub>1</sub> (66)・C<sub>2</sub> (67)・D (68・69)・高坏A<sub>1</sub> (77-79・83・84)  
図版第26 周溝墓A 5-2 土器群、高坏A<sub>1</sub> (82)・A<sub>2</sub> (85・87-92・99)  
図版第27 周溝墓A 5-2 土器群、器台A (103-106)・B (109・110)  
図版第28 周溝墓A 5-2 土器群、有孔鉢A (112・113)・B (115-119)・壺A<sub>1</sub> (127)  
図版第29 周溝墓A 5-2 土器群、壺A<sub>1</sub> (128-131・133-136)  
図版第30 周溝墓A 5-2 土器群、壺A<sub>1</sub> (137-140・142-144)  
図版第31 周溝墓A 5-2 土器群、壺A<sub>1</sub> (141・145)・A<sub>2</sub> (149-151)  
図版第32 周溝墓A 5-2 土器群、壺A<sub>2</sub> (152・153・155・156)  
図版第33 周溝墓A 5-2 土器群、壺B<sub>1</sub> (158・160-164)・B<sub>2</sub> (165)  
図版第34 周溝墓A 5-2 土器群、壺B<sub>2</sub> (166)・C (167)・D (168)・E (173-174・177-179)  
図版第35 周溝墓A 5-2 土器群、壺E (180)・壺底部 (194・195・201-203) 包含層出土の土器、壺B<sub>2</sub> (26)・鉢E (27)  
図版第36 土壞 3、壺A (204)・E (205)・壺B<sub>2</sub> (206) 井戸 1、壺R (1)・T (3)・高坏 A (7)  
図版第37 井戸 1、鉢C<sub>1</sub> (4・5)・C<sub>2</sub> (6)・壺A<sub>2</sub> (9)・A<sub>4</sub> (11)・F<sub>1</sub> (16)・G (17)  
図版第38 井戸 1、壺A<sub>4</sub> (12)・F<sub>1</sub> (14-15) 井戸 2、壺Q (19)  
図版第39 井戸 2、高坏 (22)・壺F<sub>1</sub> (24)・F<sub>2</sub> (25・26) 土壞 1、高坏 (28)・壺F<sub>2</sub> (31)  
図版第40 土壞 1、鉢C (27)・壺A<sub>3</sub> (29)・F<sub>1</sub> (30) 井戸 3、壺A (1)・D (2)・E (3)・高坏 B (4)・高坏脚部 (5)  
図版第41 井戸 3、壺A<sub>2</sub> (6・7)・C (8) 井戸 4、壺A<sub>2</sub> (9)・小形丸底壺 (13)・手づくね土器 (16・17) 包含層出土の手づくね土器 (52)  
図版第42 井戸 4、小形丸底壺 (10・12)・小形粗製土器 (14・15)・壺A<sub>3</sub> (20)  
図版第43 井戸 4、壺A<sub>2</sub> (18・19) 土壞 2、壺A (21・22) 包含層出土の土器、壺 (31・35)・鉢 (38)  
図版第44 包含層出土の土器、鉢 (36・37・39・40)・高坏脚部 (42-45)  
図版第45 包含層出土の土器、高坏B (41)・壺A (48・49)・F (47)・片口土器 (46)  
図版第46 a. 包含層出土の土器、高坏B (50)・壺 (51)  
b. 北9地区出土の壺B<sub>2</sub>  
c. 13-M-8-9地区出土の壺棺  
d. 15-F-3-1地区出土の壺棺  
図版第47 包含層出土の土器  
図版第48 包含層出土の土器、土師器皿 (77・79・81・83・87・88・91・92)・壺 (93) 瓦器皿 (103)・壺 (98・99・101)  
図版第49 a. 土壞 6、壺A  
b. 土壞 6、壺A・繩文土器 (5) 包含層出土の土器、壺底  
図版第50 a. 包含層出土の土器、壺A・壺A

- b. 包含層出土の土器、壺A・甕A
- 図版第51 a. 周溝墓A 3, 甕A(4・5) 包含層出土の土器、壺A・甕A
- b. 包含層出土の土器、壺A
- 図版第52 a. 周溝墓A 5—2 土器群、壺B<sub>1</sub>(7)・B<sub>2</sub>(10・11・13)・C(18・19)・甕A<sub>1</sub>(120~125・132)・A<sub>2</sub>(146~148・154)・B<sub>1</sub>(157・159)
- b. 周溝墓A 5—2 土器群、壺L(28)・M(29)・N<sub>1</sub>(32~35)・P(47~49)・同脚台部(51・53~55)
- 図版第53 a. 周溝墓A 5—2 土器群、鉢B<sub>1</sub>(60~62)・C<sub>1</sub>(64・65)・器台B(107・108・111)
- b. 周溝墓A 5—2 土器群、高坏A<sub>1</sub>(70~76)・A<sub>2</sub>(86・89)・小形高坏(101・102)
- 図版第54 a. 高坏A<sub>1</sub>(80・81)・A<sub>2</sub>(94・96~98・100)
- b. 周溝墓A 5—2 土器群、[上]壺B<sub>2</sub>(15)[下]壺G(23)
  - c. 土壞3、壺A(204)
- 図版第55 a. 周溝墓A 5—2 土器群、壺底部
- b. 周溝墓A 5—2 土器群、有孔鉢A(114)・その他甕底部
- 図版第56 a. 周溝墓A 5—2 土器群、壺F(22)・その他甕E
- b. 井戸1、壺S(2)・有孔鉢A(8)・甕A<sub>2</sub>(10)・F<sub>1</sub>(13)・甕底部(18)・その他
- 図版第57 a. 井戸2、壺底部(20)・高坏(21・23) 包含層出土の土器
- b. 包含層出土の土器、壺・甕・手培形土器
- 図版第58 a. 包含層出土の土器、壺
- b. 包含層出土の土器、壺・甕・器台
- 図版第59 a. 包含層出土の土器、須恵器蓋坏(54・60・65)・高坏(62・63)・壺・甕(68・72・73)・土師器把手付鍋(96)
- b. 包含層出土の土器、土師器皿(76・82・86・89)・蓋(95)・鉢(94)・把手(97)・瓦器碗(100・102)・磁器碗(104)

## 図 面 目 次

- 第1図 周溝墓A 1、小形壺A (1) 周溝墓A 3、壺C (2)・D (3)・壺A (4・5) 周溝墓A 4、壺A (6・7) 周溝墓A 5、壺A (8)
- 第2図 周溝墓A 5、壺A (9) 周溝墓B 1、台付深鉢(11) 周溝墓B 2、壺(12) 周溝墓B 3・2、壺A (13)・壺A (14)・B (15)
- 第3図 周溝墓B 4・2、壺A (16)・B (17)・壺A (18) 包含層出土の土器、壺A (1・2)・壺A (3~5)
- 第4図 上壠 6、壺A (1~4)・鉢(5) 包含層出土の土器、壺A (6・7・9~12)・D (8)・壺底部(13~17)・壺A (18)・壺底部(19~21)
- 第5図 周溝墓A 5~2 土器群、壺A<sub>1</sub> (1~3)・A<sub>2</sub> (4)・B<sub>1</sub> (5~8)・B<sub>2</sub> (9)
- 第6図 周溝墓A 5~2 土器群、壺B<sub>2</sub> (10~15)・B<sub>3</sub> (16~17)・C (18~19)・D (20)・E (21)・F (22)・J (26)・K (27)・L (28)
- 第7図 周溝墓A 5~2 土器群、壺G (23)・H (24)・I (25)・M (29)・N<sub>1</sub> (30~35)・N<sub>2</sub> (36~37)・壺底部(38~45)
- 第8図 周溝墓A 5~2 土器群、壺P (46~55)・鉢A<sub>2</sub> (58)・C<sub>1</sub> (64~66)・C<sub>2</sub> (67)・D (68~69)
- 第9図 周溝墓A 5~2 土器群、鉢A<sub>1</sub> (56)・A<sub>2</sub> (57)・B<sub>1</sub> (59~62)・B<sub>2</sub> (63)・高环A<sub>1</sub> (70~84)
- 第10図 周溝墓A 5~2 土器群、高环A<sub>2</sub> (85~100)・小形高环(101~102)
- 第11図 周溝墓A 5~2 土器群、器台A (103~106)・B (107~111)・有孔鉢A (112~114)・B (115~119)
- 第12図 周溝墓A 5~2 土器群、壺A<sub>1</sub> (120~136)
- 第13図 周溝墓A 5~2 土器群、壺A<sub>1</sub> (137~145)
- 第14図 周溝墓A 5~2 土器群、壺A<sub>2</sub> (146~153)
- 第15図 周溝墓A 5~2 土器群、壺A<sub>2</sub> (154・156)・B<sub>1</sub> (157~164)・B<sub>2</sub> (165~166)
- 第16図 周溝墓A 5~2 土器群、壺C (167)・D (168)・E (169~180)
- 第17図 周溝墓A 5~2 土器群、壺E (181~186)・壺底部(187~203)
- 第18図 土壙 3、壺A (204)・E (205)・壺B<sub>3</sub> (206) 包含層出土の土器、壺B<sub>2</sub> (26)・鉢E (27)・壺F (23~25)・壺底部(28~29)
- 第19図 井戸 1、壺R (1)・S (2)・T (3)・鉢C<sub>1</sub> (4~5)・C<sub>2</sub> (6)・高环(7)・有孔鉢A (8)・壺A<sub>2</sub> (9~10)・A<sub>4</sub> (11~12)
- 第20図 井戸 1、壺F<sub>1</sub> (13~16)・G (17)・壺底部(18) 井戸 2、壺Q (19)・壺底部(20)・高环(21~23)
- 第21図 井戸 2、壺F<sub>1</sub> (24)・F<sub>2</sub> (25~26) 土壙 1、鉢C (27)・高环(28)・壺A<sub>3</sub> (29)・F<sub>1</sub> (30)・F<sub>2</sub> (31)
- 第22図 井戸 3、壺A (1)・D (2)・E (3)・高环B (4)・脚部(5)・壺A<sub>2</sub> (6~7)・C (8)
- 第23図 井戸 4、壺A<sub>2</sub> (9)・小形丸底壺D<sub>2</sub> (10~13)・小形粗製土器(14~15)・手づくね七唇(16~17)・壺A<sub>2</sub> (18~19)・A<sub>3</sub> (20) 包含層出土の土器(52)
- 第24図 包含層出土の土器、壺(30~35)・鉢(36~40)・高环(41~45)

- 第25図 土壙 2、甕A 底部(21・22) 包含層出土の土器、甕A (48・49)・F (47)・片口土器 (46)・高坏B (50)・甕A (51)
- 第26図 包含層出土の土器、須恵器、蓋坏(53~60・65・66)・高坏(61~64)・甕(67)・蓋・甕(68~75)
- 第27図 包含層出土の土器、土師器・皿(76~92)・鉢(93・94)・蓋(95)・把手付鍋(96・97)・瓦器・甕(98~102)・皿(103)・磁器・甕(104)

## 挿 図 目 次

- 第1 安満遺跡とその周辺
- 第2 安満遺跡の立地
- 第3 安満遺跡地区割図
- 第4 安満遺跡年次別調査位置図
- 第5 方形周溝墓群および西壁断面図
- 第6 周溝墓A 5~2 土器群実測図
- 第7 周溝断面一覧
- 第8 供獻土器出土状態
- 第9 上塙実測図および上器出土状態
- 第10 井戸実測図
- 第11 周溝墓A 5~2 出土の供獻土器 甕A (10)
- 第12 上塙 3 出土甕A (204) の範描文
- 第13 北-9 地区井戸 3 出土の甕B<sub>2</sub>
- 第14 東-1 地区井戸 7 出土の庄内式甕F (左)と布留式甕A (右)
- 第15 石鐵・銅鐵

## 表 目 次

- 表1 周溝墓A 5~2 土器群出土土器集計表
- 表2 周溝墓A 5~2 土器群出土の縁痕付土器一覧表
- 表3 周溝墓出土の供獻土器觀察表
- 表4 周溝墓A 5~2 土器群出土土器觀察表
- 表5 上塙 3 出土土器觀察表
- 表6 井戸 1 出土土器觀察表
- 表7 井戸 2 出土土器觀察表
- 表8 上塙 1 出土土器觀察表
- 表9 井戸 3 出土土器觀察表
- 表10 井戸 4 出土土器觀察表



# 第Ⅰ章 安満遺跡の位置と環境

高槻市は大阪府の北東部、京都市と大阪市のほぼ中間に位置し、東西約10km、南北約22kmの細長い菱形の行政区域である。その北半部は、丹波山地につらなる山々およびそれから派生する丘陵部からなり、南半部は淀川に面した平野部からなっている。北の山間から流れ出た検尾川・芥川・女瀬川の3河川は平野部を縦断し、やがて淀川にそそぐ。

中でも東の検尾川・西の芥川は市域を3分し、高槻の歴史発展にとって重要な位置をしめている。

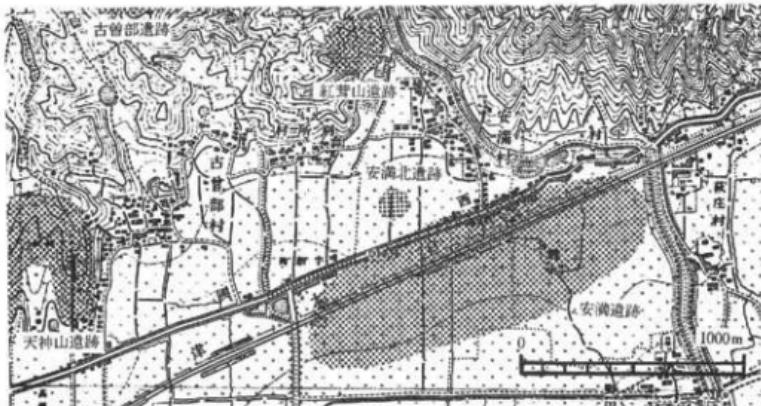
安満遺跡の所在する高槻市東部（芥川以東）は、標高50m～100mの比較的起伏の少ない丘陵部と標高10m前後の平野部に大別できる。とくに、丘陵部は数多くの遺跡がみうけられ、古くは、慈願寺山遺跡・伊勢寺遺跡（以上旧石器時代）などがあげられる。また、弥生時代の遺跡も相当数あり、著名なものだけでも、天神山遺跡・古曾部遺跡・芝谷遺跡（以上中期）・萩ノ庄遺跡・紅葉山遺跡（以上後期）などがみとめられる。これらの遺跡は、平地における安満遺



擇図第1 安満遺跡とその周辺

跡とかかわりあって、一小地域内における集落変遷のあり方をミクロ的視野のなかで、検証できる恰好の材料になっている。また、古墳時代になると、萩ノ庄古墳（前期）・紅葉山古墳群（中～後期）・豊神車塚古墳（後期）・安満山古墳群（後期）などがあげられる。しかし、高槻西部に所在する弁天山古墳群や、史跡今城塚古墳に匹敵するほどの古墳はない。なお、今次、豊神車塚古墳から検出された、動物埴輪群は、大阪府下の古墳から出土した埴輪のなかでも、すぐれたもので、版築による埴丘築成技術とともに、注目されるところである。一方平野部に目を転じると、遺跡の検出例は格段に少なくなり、数ヶ所を数えるにすぎない。安満遺跡の北辺の高みでは、绳文時代晚期（船橋式）に属する溝が検出されており、安満遺跡の成立を考える上で、みのがせない重要な事実を呈供している。弥生時代から古墳時代にかけての集落跡としては、安満遺跡のほか、桧尾川をこえた市域東辺に位置する上牧遺跡があげられる。時代が下ると、「天平七年」と記載された木簡が出土した上田部遺跡や、瓦器塊の出土した天川遺跡などがある。さらに北東約1kmのところには、梶原寺跡（飛鳥～奈良）、北約2kmのところには、懸壇寺跡（平安）などが知られている。また、安満遺跡北辺を東西にはしる西国街道は、その前身である山陽道も含めて安満を中心とした地域史を考察する上に欠くことのできないものである。（挿図第1）

なお、高槻市西部（芥川右岸）には、安満遺跡に対峙する郡家川西遺跡がある。（その中心部は、嶋上郡衙跡として史跡指定されている。）いまのところ、畿内第Ⅱ様式から発展していった遺跡として、位置づけられるが、現在も発掘調査が継続中であり、具体像の解明は、将来に期したい。この西部地域の弥生時代の遺跡は、津ノ江南遺跡・宮田遺跡・富田遺跡などがあるが、現在市立第二中学校のある郡家本町の丘陵端や塚原古墳群のある丘陵上にも弥生時代の遺跡がかつて検出された。しかし、東部地域でみるような遺跡群の展開状況を西部地域ではみるとこと



挿図第2 安満遺跡の立地

ができない。このような小地域間の差異が何に基因するかは今後究明すべき重要な課題である。

安満遺跡は、市街地の東方、高槻市大字安満にあり、国鉄高槻駅の東方約1kmに位置する。標高は、8m～12mである。これまでの調査によれば、東西約1.5km・南北約0.5kmの広大な範囲におよんでいて、その主要な部分は現在も京都大学摂津農場およびその北辺にひろがる水田下に埋もれている。ところが、遺跡の周辺部分については、近年の宅地開発に伴う発掘調査が、ひんぱんにおこなわれ、新知見が続出するとともに、安満遺跡の生成についても、再検討がせまられている。

現在の桧尾川は、成合の谷間を南流して、安満山と紅葉山の狭い谷間をぬけてから、南東方向に向きを変え安満山山麓に沿って、約1km程東流し、再び流路を南に転じて、淀川へそいでいる。ところが、これまでの調査によれば、地山面上に厚く堆積した南北方向の砂礫層が遺跡内の各所に認められる。それらは往時の桧尾川が北の谷間からまっすぐ南流し、しばしば流路を変えた結果生じた旧河道であろう。また、安満遺跡の南1kmのところには「天川」という地名がいまものこっている。この「天川」は「安満川」に通じ、(旧)桧尾川の流路を知る手がかりとなっている。そして、この(旧)桧尾川は、谷口を頂点として、小規模な扇状地を形成している。このことは、安満遺跡を含めた周辺の等高線のあり方からも、明瞭に看取できる。また、現桧尾川は、この安満遺跡東辺を南流しているのであるが、この桧尾川を境にした東側と西側とでは、水田の比高差が2m近くもあり、安満地区の扇状地がこの川の付近までひろがり、



挿図第3 安満遺跡地区割図

それより東は、南東方向へ強く傾斜していることがうかがえる。そこから、弥生時代の安満の人々は、もっぱら、この扇状地の外辺部分を生活の場としていたと考えられる。(挿図第2)

## 第Ⅱ章 遺跡の地区割

東海道本線と京大農場にはさまれた地域は、条里制遺構としての地割が畔壁によって良好に残されているので、安満遺跡全域の地区割はこの条里遺構を生かして行なうこととし、108mをその基本単位長とした。この地区割は、昭和42年の範囲確認調査に際して設定されたものである。

なお、地区割の南北軸線は、磁北に対して6°東へ偏れている。(挿図第3)

## 第Ⅲ章 これまでの調査

安満遺跡は昭和3年に発見された。この年の5月京都帝国大学農学部付属攝津農場が旧三島郡磐手村大字安満(現高槻市八丁畠町)に設置され、灌漑用の溝を掘さくしたところ土器や石器類が出土した。この報告をうけた京都帝国大学文学部考古学教室の島田貞彦・水野清一氏らによって、発掘が実施され弥生時代遺跡の存在が確認された。この時の調査地区は現在の事務所南側ということで、附近には「弥生式文化安満遺跡」と記された石碑がたっている。

この時の調査報告は、翌昭和4年7月人類学雑誌に発表された。<sup>3)</sup>この報告のなかで、まず淀川の形成した低地に存在する遺跡として注目され、淀川の氾濫が遺跡に与える影響などが考慮されている。遺物のうち石器類には石庖丁や石鎌の他に石剣の報告がある。土器類はA. B. Cの3類に分類されている。

当時、弥生時代研究は黎明期であり、日本における農耕発祥が追求されていた。森本六爾氏を主幹とする東京考古学会は機関誌「考古学」に弥生時代研究の基礎的作業として、弥生式土器の資料を毎号に発表し弥生式土器の集成をすすめていた。

『考古学』第3巻第2号には九州第2系弥生式土器、今日でいう遠賀川式土器の発見を報ずる画期的論文が発表された。<sup>2)</sup>この報告をうけて、昭和7年小林行雄氏は安満B類土器と九州第2系弥生式土器との関連を論じ、安満B類土器が北九州までたどりうるとして両者の類似を指摘し、西から東への文化的波及を推定した。さらに、畿内における安満B類土器→櫛目文土器→無文土器という編年が確立されるにいたり、安満遺跡は学史上記念すべき役割を果したので

あった。<sup>⑤</sup>

その後昭和30年代まで安満遺跡は京大農場を中心とする田園地帯として訪れる人達の憩いの場とされてきたが、遺跡そのものは研究者や市民の間ではほとんど話題にならなかった。一方、安満遺跡西方の天神山遺跡が戦後関西ではじめて集落跡として調査され、竪穴式住居跡や周溝墓が発掘された。<sup>⑥</sup>そこで前期の低地に立地する安満遺跡と中期の丘陵上に立地する天神山遺跡との関連がしばしば論じられるようになった。

昭和30年代後半から40年代にかけての経済高度成長の波は田園都市としての高槻市にも例外なくおよせた。その結果大阪の衛生都市としてベッドタウン化が進行し、水田地帯を埋めたて、団地や分譲住宅が軒を連ねるようになった。この現象は安満遺跡にも波及し、すでに昭和30年代中頃には阪急京都線の南側一帯は住宅街となっていた。

昭和41年2月、京大農場の北側で、地元の安満実行組合が農道を幅約2mに拡張する工事を行なった際には大阪府立島上高等学校地歴部を中心に緊急調査が実施され、幅2m、長さ28mのトレンチが設定された。このトレンチ内からは弥生時代各期の遺物が出土し、その中には特異なスコップ形鋏、平鉢などの木製品が含まれていた。また前期や中期の遺構も発見された。そしてそれらの遺構が京大農場北方の水田に広くおよんでいることがわかったのである。<sup>⑦</sup>この調査は工事に制約された緊急の調査であったため局部的な調査に終ったが、昭和3年に安満遺跡が学界に知られるようになって以来の本格的な調査であった。またこの調査時に持ち帰った各包含層の土塊について、花粉分析を行ない弥生時代の環境復元を試みることも行われた。<sup>⑧</sup>

翌昭和42年1月、今度は前回の調査地区より西北方約250mの地区で、宅地造成工事が進行中という事態が発生した。造成の行われていない部分約800m<sup>2</sup>については、大阪府・高槻市教育委員会によって調査され、庄内式土器の埋没した溝や弥生時代後期の貯蔵穴の他に木棺3基を主体部とする方形周溝墓一基が発掘された。この2回の調査で、京大農場の北部に遺跡がかなり拡がっていることがわかり、さらに集落の墓地についても資料を得ることになった。<sup>⑨</sup>

このような新知見を得て大阪府教育委員会では、今後も進行すると予想される宅地造成工事に対応するため、国庫補助金の交付をうけて遺跡の範囲確認調査を実施した。

調査は昭和42年6月と11月から12月にかけての2度に分かれて実施されたが、従来は漠然と京大農場を中心に考えられてきた遺跡の範囲は、予想より東へのびることが明らかとなり弥生時代前期から後期にわたる集落のあり方についても、その様子を推測しうる資料を得ることができた。即ち前期にはまず京大農場付近に最初の集落が形成され、中期にはこれを中心に東西に拡がり、大きく二つの集落が営まれたらしく、後期にはさらに東西に拡がり、中心が東に移動したと推測された。さらに古墳時代以後には東の検尾川付近にまで集落が拡がることが明らかになった。

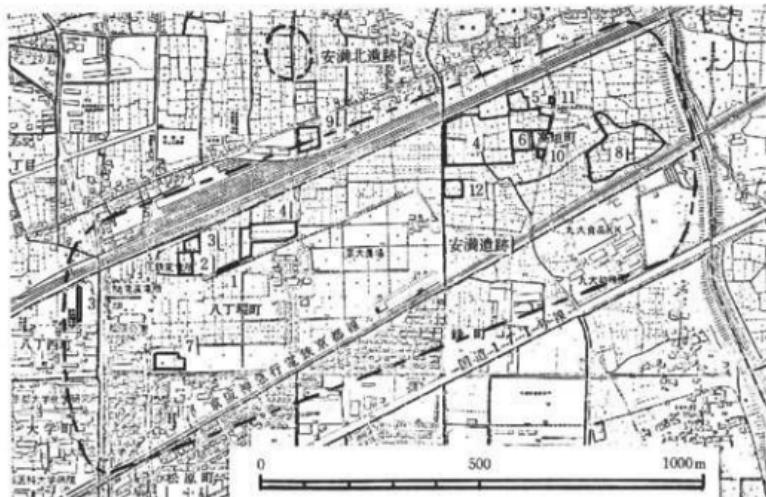
翌昭和43年には京大農場北側および農場東北方で大規模な宅地造成工事が計画されたために、大阪府教育委員会は国庫補助金の交付をうけ、5月から10月にかけて発掘調査を実施した。

農場北側の地区とは、昭和41年に府立島上高校地歴部が調査を実施した場所のすぐ北側にあって、この一画は中心部と推定されていた。調査の結果、弥生時代中期の住居跡や溝などが検出されただけでなく、前期の集落跡を周ると推定される二条の溝が検出され、この溝内からは未製品を含む多数の木器類が検出された。<sup>⑨</sup>

この結果、安溝遺跡の保存を要望する運動が市民の間からおこり、文化庁においてもその重要性にたって、史跡指定することに強い意向を示した。文化庁・大阪府・高槻市で協議の結果、とりあえず高槻市開発協会が先行取得することになり、大阪府教育委員会は昭和44年3月22日この地区的史跡仮指定を行なった。しかし東北方の地区については、すでに宅地造成工事が進行していて、高垣町という新しい町名をもつ住宅地が出来あがった。

翌昭和44年8月から10月にかけても高垣町の北部で調査が行なわれたが、この時は明確な遺構は検出されなかった。

大阪府教育委員会は国庫補助金の交付をうけて再度、遺跡の範囲確認調査を実施することになり、昭和45年2月から3月にかけて、前回実施されなかった京大農場内の範囲確認調査を実施し



挿図第4 安溝遺跡年次別調査位置図

た。この調査で農場全体が遺跡に含まれることが改めて確認されただけでなく、弥生時代中期に属する木棺墓は検出された。<sup>10</sup> 木棺墓は昭和40年代初頭から尼崎市田能遺跡をはじめ、東大阪市木虎川遺跡・同瓜生堂遺跡や豊中市勝部遺跡などで発見があつたが、いずれも、遺存状態は良好とはいえない。

この確認調査で検出されたものは、底板・木枕板・側板・蓋板ともに保存状態は極めて良好なものであり、安満遺跡の墓地について、新資料を得ただけでなく、弥生時代墓制を解明するうえでも貴重な資料となつた。

以上のべてきた昭和41年から45年にかけての時期は安満遺跡の重要性が改めて認識され、具体的に安満遺跡のあり方が解明されはじめた時期といえる。

すでに、昭和43年に調査のすんだ地区には、分譲住宅が建ちならんでおり、桧尾川堤防沿いの約42,000m<sup>2</sup>についても宅地造成が計画された。この地区について、昭和46年10月～11月にかけて、高槻市教育委員会が範囲確認調査を実施したところ、古墳時代から歴史時代にかけての遺構・遺物が発見された。遺構・遺物の発見された約12,000m<sup>2</sup>について、翌昭和47年7月から48年1月にかけて調査が実施された結果、古墳時代の遺構の他に鎌倉時代の建物群・井戸群からなる集落跡が発掘された。安満遺跡における従来の研究では、まったく話題にのぼらなかった中世の遺構の発見は、ほぼ同時期に調査された市内の上牧・宮田遺跡とともに、中世集落の研究をすすめるうえに、貴重な資料を提供した。<sup>11</sup>

中世集落跡の調査と同時期に、すぐ西側の住宅地の一隅では、本報告にまとめた方形周溝墓群の調査が行われた。調査は昭和47年7月から8月にかけて実施され、弥生時代の墓地が新たに判明したのである。

この周溝墓群が発見された頃は、「方形周溝墓研究」のブームとでもいうべき時期であった。

そして、昭和46年秋の日本考古学協会の大会は、各地の発掘成果をもとに「弥生時代の墓制」というテーマでおこなわれ、戦後の弥生時代の研究は、新段階をむかえたのである。

周溝墓群の調査と併行して、京大農場西南隅で職員住宅の建設に先立つ発掘調査が京都大学考古学教室によって実施された。この調査では条里遺構が発見されている。<sup>12</sup>

さて、昭和47年以後、現在まで10件数の発掘調査が行われているが、ほとんどが遺跡東部の高塙町に集中している。個人住宅や小規模な分譲住宅の建設が主で調査面積もあまり広くはないが、遺跡東部の様子を知る手がかりが得られている。

また、安満遺跡北辺の調査において、縄文式土器（船橋式）を検出したことは、農耕集落としての安満遺跡の成立に関する興味がもてる。

以上、簡単に安満遺跡の発見から現在にまで至る調査を記述してみたが、安満遺跡は弥生文化とその社会構造を知るうえで貴重な資料を提供しただけではなく、弥生時代から中世にまで至

る集落の変遷を具体的に知ることのできる遺跡でもある。

なかでも、弥生時代の墓制の研究において、方形周溝墓は、看過できないものであり、いまこれを公表するのは、益するところ少なくないと考えるものである。

- 注① 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦「摂津国高槻摂津農場石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号 昭和4年
- ② 中山平次郎「速賀川遺跡の土器と銅鐸及び細線縦彫紋鏡」『考古学』第3巻第2号 昭和7年
- ③ 小林行雄「安満B類土器考」『考古学』第3巻第4号 昭和7年
- ④ 藤沢長治「高槻天神山弥生時代遺跡発掘調査報告」『郷土高槻叢書』8 高槻市教育委員会 昭和30年
- ⑤ 原口正三・田代克己「安満遺跡」『月刊文化財』66 昭和44年
- ⑥ 徳丸始朗「考古学と花粉分析ーとくに高槻周辺の遺跡に関して」『考古学と自然科学』3 昭和45年
- ⑦ ⑤と同じ
- ⑧ 藤沢一夫・田代克己・堀江門也「高槻市安満弥生遺跡発掘調査概報」 大阪府教育委員会 昭和43年
- ⑨ 藤沢一夫他「高槻市安満弥生遺跡調査概報」 大阪府教育委員会 昭和45年
- ⑩ ⑨と同じ
- ⑪ 横本久和「安満遺跡発掘調査報告書—中世集落跡の調査」『高槻市文化財調査報告書』第5冊 高槻市教育委員会 昭和49年
- ⑫ 京都大学安満遺跡調査団「高槻市安満遺跡の条里遺構」京都大学 昭和48年

## 第 IV 章 調査経過

安満遺跡東方の桧尾川沿いの地域は見渡す限りの水田地帯がつづいていたが、昭和43年頃から宅地開発が活発になってきた。安満遺跡の地区割で8・9地区にあたる約20,000m<sup>2</sup>については、昭和43年度に大阪府教育委員会が調査を実施し、畿内第V様式期の竪穴式住居跡1棟と桧尾川の氾濫の痕跡が確認されている。

昭和47年に入り、高垣町272他の水田1,519m<sup>2</sup>を造成し、分譲住宅の建設が計画された。安満遺跡の地区割では9-C・D・G・H地区にあたる。従来の調査結果からみて、桧尾川の氾濫によって遺構が削られ、部分的に島状にとりのこされた地区に、弥生時代後期ないし古墳時代の遺構が残存するであろうと考えられていた。このため、高槻市教育委員会は大阪府教育委員会、宅地造成業者と協議をおこなった結果、まず造成予定地内の遺構確認調査をおこない、その結果をもって取り扱いを検討することになった。

遺構確認調査を昭和47年5月に高槻市教育委員会が実施したところ、溝状の遺構と弥生式土器、須恵器破片を検出した。この確認調査の結果をうけて再度協議をおこない、造成予定地全域の発掘調査を実施することに決定した。

調査は高槻市教育委員会が担当し、調査経費は全額宅地造成業者が負担することになった。調査は昭和47年7月4日から開始した。調査方法としては耕土、床土をユンボで除去し、耕土はブルドーザーで隣接地に移動した。さらに、遺物包含層（整地層）もできるかぎりユンボで除去し、ベルトコンベアを使用して遺構検出作業をおこなった。

7月4日	機材運搬。機材置場設置。試掘調査時のトレーナーの排水作業。	7月18日	表土・包含層除去。調査地区西南部で溝状遺構を検出。
7月5日	調査地区西南部からユンボで表土・包含層（整地層）の除去を開始する。午後から雨のため作業中止。	7月19日	表土・包含層除去。
7月6日	雨のため休み。	7月20日	表土・包含層除去。周溝墓A2を検出。周溝墓A3の南側周溝、東側周溝を検出。調査地区中央部に砂礫層の堆積する溝を検出。
7月7日	表土・包含層除去。	7月21日	表土・包含層除去。本日でユンボの作業を終わる。周溝墓A3の周溝東北隅に第II様式の小型壺を検出。周溝墓B1を検出。調査地区西北部で第V様式の土器群を検出。
7月8日	表土・包含層除去。	7月22日	周溝墓A3の東北隅に溝を接して周溝墓A4を検出。A3の北側周溝に接して小規模な周溝墓を検出。（A3-2）
7月9日	雨のため休み		
7月13日			
7月14日	排水作業。		
7月15日	排水作業。表土・包含層除去。		
7月16日	休み。		
7月17日	表土・包含層除去。		

7月23日	休み。	8月7日	各周溝墓周溝断面図作成。井戸2実測。
7月24日	周溝墓A 4の西側周溝内に第II様式壺を検出。周溝墓B 1の東に溝を接して周溝墓D 2を検出。同北側周溝内に第II様式土器を検出。また第V様式土器を含む土壺2を検出。	8月8日	周溝墓A 5-2土器群の清掃。
7月25日	周溝墓B 2の調査。	8月9日	周溝墓A 5-2土器群の清掃。溝2の砂礫層除去。
7月26日	調査地区西北部の第V様式土器群の調査。周溝墓A 4の北に溝を接して周溝墓A 5を検出。周溝墓B 1の東側溝底に第II様式土器(台付深鉢)を検出。	8月10日	周溝墓A 5-2土器群の実測をはじめ。調査地区南壁断面実測図作成。溝2の砂礫層除去。
7月27日	周溝墓A 5の調査。A 4と接する南側溝内の断面を観察するとA 4とA 5の前後関係が判断できる。調査地区西北部の第V様式土器群の調査。	8月11日	雨のため休み。
7月28日	周溝墓A 4・A 5の調査。	8月12日	排水作業。周溝墓A 5-2土器群実測。周溝墓A 3北側のピット(井戸4)内地土器実測。溝2砂礫層除去。午後から雨のため作業中止。
7月29日	調査地区東南部に周溝墓B 3-2の一部を検出。周溝墓A 3・A 4の東側に周溝墓B 3・B 4を検出。	8月13日	現地説明会
7月30日	休み。	8月14日	周溝墓A 5-2土器群実測。周溝墓B 2の周溝内土器実測。井戸5写真撮影。溝2の砂礫層除去。
7月31日	調査地区西北部の第V様式の土器群を追求するために北壁を部分的に崩し、調査地区を拡張する。周溝墓B 3・B 4の調査。周溝墓B 2の北側周溝内に直径1m程の落ちこみを検出。内部から庄内式併行期の土器が出土。	8月15日	周溝墓A 5-2土器群実測。溝2の砂礫層除去。周溝墓B 4-2写真撮影。
8月1日	周溝墓B 4の東に周溝墓B 4-2を検出。B 4-2の南に土壙墓を検出。西北部の土器群は周溝墓の周溝内に遭棄されたものであることを確認する。調査地区中央部南壁ぎわに井戸枠の残る井戸5を検出。周溝墓B 4に不整形の土壙を検出。	8月16日	周溝墓A 5-2土器群実測。調査地区西壁断面実測図作成。
8月2日	周溝墓B 4の北東に周溝墓B 5を検出。周溝墓A 4・A 5の土壤調査。	8月17日	航空写真撮影。周溝墓A 5-2、B 1、B 2写真撮影。各周溝墓の土器とりあげ。
8月3日	井戸5の調査。井戸内から土師器・須恵器を検出。周溝墓B 4-2の南にも井戸らしき円形ピットを検出。内部から庄内式併行期の土器を検出。	8月18日	調査地区全景撮影。周溝墓A 5-2土器群とりあげ。
8月4日	井戸2・井戸5の調査。周溝墓A 5-2土器群の清掃。	8月19日	周溝墓A 5-2土器群とりあげ。
8月5日	井戸2の調査。周溝墓A 5-2土器群の清掃。	8月20日	休み。
8月6日	周溝墓A 5-2土器群の清掃。遺構実測。	8月21日	午前中雨のため休み。午後から周溝墓A 5-2土器群とりあげ。
		8月22日	排水作業。周溝墓A 5-2土器群とりあげ。第V様式の土器群中から第II様式壺破片を検出。
		8月23日	周溝墓A 5-2から検出された第II様式壺破片の検出作業。実測後、写真撮影。
		8月24日	遺構実測補足。西壁際に直径1m程の井戸1を検出。内部から庄内式併行期の土器出土。
		8月25日	井戸1の土器とりあげ。すべての調査を終了する。

## 第 V 章 遺構

検出された遺構としては弥生時代中期（第Ⅱ様式期）の方形周溝墓が主であるが、土壙塗、井戸、周溝内に設けられた土壙などがある。

### 第 1 節 遺跡の層序

調査地区は、地表面が標高10m前後を測る水田であった。調査地区的西壁で断面を観察すると、上から順次、耕土（0.2m）、床土（0.1m）、黄灰色土層（0.4m）、茶褐色土層（0.4m）、暗灰色粘土層（0.3m）となっていて、遺構が検出される地山面は、砂質ぎみの暗灰色粘質土層である。地山面は、調査地区西北部で標高8.7m前後を測り、南東部にむけてゆるやかに下降していく、南東部では標高8.2mを測る。この黄灰色粘質土層は、南西部では0.5m程度堆積しているが、調査地区的東側では、ほとんどみられず、遺構は黄灰色粘質土層下の砂礫を含む灰色粘土上で検出される。この調査地区を含め、付近での遺構検出面が、黄灰色あるいは黄緑色の砂質土や、砂礫まじりの粘土と一定しないのは、松尾川西岸部の特徴である。これは松尾川の流路変更や氾濫によるものと思われるが、堤防などの施設が完備されたようになった近年まで、松尾川沿岸は極めて不安な状態にあったことが、遺跡の層序からも推測される。（挿図第5）

各層から遺物が検出されているが、床土下の黄灰色、茶褐色土層中には弥生時代から中世にかけての遺物が包含されているので、中世以後に整地されたものとおもわれる。

暗灰色粘土層からは少量であるが、弥生式土器あるいは古式土師器の破片を検出した。また、このほかに古代末の土師器もわずかにみられる。

### 第 2 節 周溝墓群

調査地区内から弥生時代中期の周溝墓が16基検出された。（挿図第5、図版第5）

周溝墓は、ほとんどのものが溝を共有あるいは接するもので、溝の共有状態・周溝墓の群在状態から、A・Bの2群に大別できる。A群は、調査地区南西部から同北壁中央部にかけて溝を共有しない連絡しながら、直線的にならぶもので、6基を数える（図版第6a）。周溝墓A1から周溝墓A3までは、同一方向であるが、周溝墓A4からA6までは向きをやや北にふっている。周溝墓A3には2基の小規模な周溝墓A3-2・A3-3が隣接している。また、周溝墓

A 5 にもあまり遺存状態のよくない周溝墓 A 5-2 が隣接している。

B 群は A 群の南側に併行して営まれている(図版第 6 b)。周溝墓 B 1・B 2 は周溝墓 A 1・A 2・A 3 と並行して検出された。周溝墓 B 2 の東側は溝 2 によって破壊されているが、周溝墓 B 3 が北東隅に、周溝墓 B 3-2 が南東隅に接しているようである。周溝墓 B 3 に連接して周溝墓 B 4 が、周溝墓 B 4 と離れた北側に周溝墓 B 5 が営まれており、それらは周溝墓 A 4・A 5・A 6 と並行している。

周溝墓 B 4 の東側には周溝墓 B 4-2 が、いずれの周溝とも接せずに検出された。各周溝墓の周溝内には、青灰色あるいは暗灰色の粘土が堆積していた。

周溝墓の盛土は、確認することができなかつたが、4 基の周溝墓から埋葬主体を検出した。周溝墓 B 2 を除いて、他は複数埋葬である。いずれも不整形・長方形の土壙墓で、内部からは木棺の痕跡や遺物は検出されなかつた。

周溝墓の時期は各周溝内から検出された供献土器を指標とすると、畿内第Ⅱ様式の時期に含まれるものである。以下各周溝墓ごとに概要を記してみる。

#### 方形周溝墓 A 1

調査地区西南端で検出されたもので、幅 1.2m・深さ 0.5m の溝に囲まれているものである。東北隅しか調査できなかつたので規模は不明である。南側の周溝内から畿内第Ⅱ様式の小形壺(1)を 1 点検出した。この壺は、周溝の底から遊離した状態で出土したもので、ほかに遺物は検出されなかつた。

#### 方形周溝墓 A 2

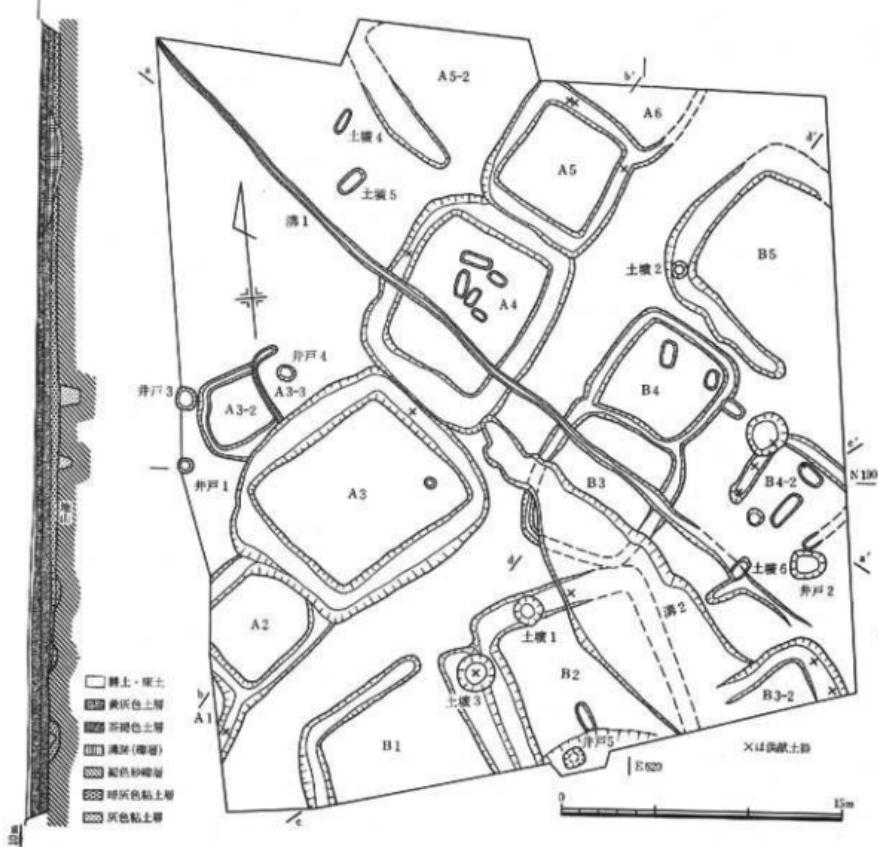
周溝墓 A 1 に隣接するもので、西側の周溝は A 1 と共有している。幅 0.8~1.2m・深さ 0.2~0.5m の周溝に囲まれていて、台状部は長辺 5m・短辺 4.4m を測る。

#### 方形周溝墓 A 3

周溝墓 A 2 に隣接するもので、規模は 16 基中最大である。周溝は幅 1.5~2m・深さ 0.5m を測る。溝の底部は平坦で、レンズ状に土層が堆積していた。台状部の規模は長辺 8.8m・短辺 7.2m を測る。周溝内の東南部で、直径 0.5m 程度の円形ピット 1 個が検出されていて、内部から畿内第Ⅴ様式土器の底部破片が出土したが、周溝墓とは直接関係しないものである。周溝の東北部から畿内第Ⅱ様式の小形壺(2)が溝底から遊離した状態で出土した。主体部は検出されなかつた。

#### 方形周溝墓 A 3-2

周溝墓 A 3 の北側周溝に接しているため、幅 0.3~0.5m・深さ 0.35m の周溝でコの字形に画かれているものである。台状部はほぼ 3m 四方である。周溝内は、黒色の砂質粘土が堆積するのみで、遺物はみられなかつた。台状部に墓壙などは検出されなかつた。



挿図第5 方形周溝墓群および西壁断面図

### 方形周溝墓A 3-3

周溝墓A 3-2の東に隣接するもので、L字状に幅0.2~0.4m・深さ0.15mの周溝が掘られていて、規模的にも、先のA 3-2より小さく、台状部に、土壙は検出されなかった。

### 方形周溝墓A 4

周溝墓A 1・A 2・A 3の方向とはやや北に角度を偏り、A 3の周溝北端と周溝を接するものである。周溝は幅1.3~2m・深さ約0.2mを測り、台状部は長辺7.8m・短辺6.8mを測る。供獻土器は2点検出している。うち1点は、第Ⅱ様式のほぼ完形の壺(6)で、西側の周溝の底に接して出土した（挿図第8-1）。

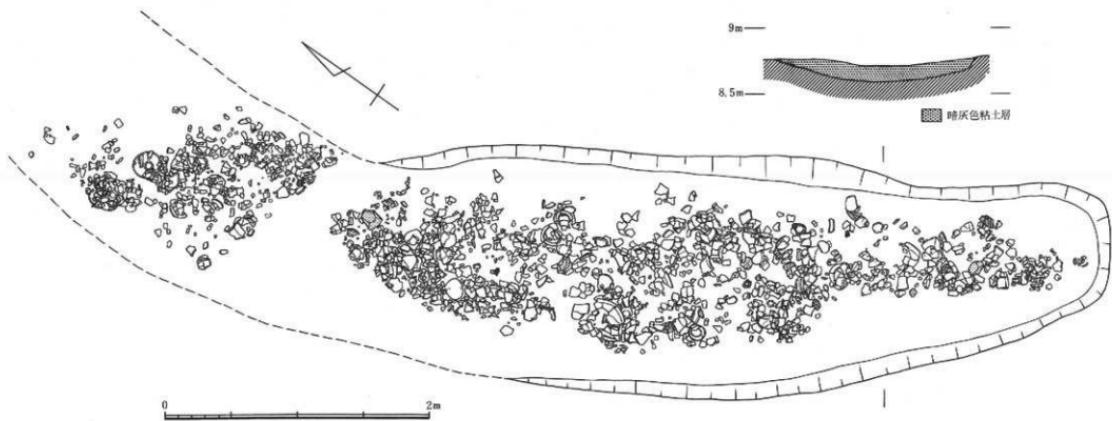
この周溝墓からは5基の土壙が検出された。5基とも中央からやや北よりに位置するもので、砂礫層の地山を方形あるいは隅丸方形に掘りこんで、形成されている。方向は、おむね、東西方向のものと、南北方向のものとに分けられるが、正確には、統一されていない。5基のうち、4基までは、小規模なもので、小児用の墓壙と考えられないこともない。壙底はいずれもほぼ平坦である。ちなみに土壙1は長さ1.9m・幅0.5m・深さ0.1mを測り方形を呈する。土壙2は長さ1.2m・幅0.6m・深さ0.1mを測り隅丸方形を呈する。土壙3は長さ1.4m・幅0.6m・深さ0.2mを測り方形を呈する。土壙4は長さ1m・幅0.6m・深さ0.16mを測り方形を呈する。土壙5は長さ0.8m・幅0.4m・深さ0.2mの隅丸方形のものである。主軸は1・2・5が東西方向で、3・4が南北方向である。いずれの土壙からも遺物は検出されなかった。また、周溝の土層断面観察によればA 4の南溝がA 5の北溝を切っていることがわかる（挿図第7）。

### 方形周溝墓A 5

周溝墓A 4の北に溝を接するもので、幅1m・深さ0.5mの溝に囲まれ、台状部は長辺5.3m・短辺5.1mを測る。北東部の周溝内から下半部を欠失した畿内第Ⅱ様式の壺(8)壺(9)を検出した（挿図第8-2、図版第7a）。ところがこの壺の下半部は、同じ周溝墓の西北隅の周溝内から壺の破片とともに、検出された。そして、いずれも溝底から遊離した状態で検出したものである（挿図第8-2、図版第7b）。主体部は検出されなかった。また、周溝墓A 4とA 5の溝の連接関係を、断面観察すると、これらの周溝墓の前後関係がわかる。すなわち、A 4の北側周溝とA 5の南側周溝は接しているが、部分的に中洲状に掘り残された青灰色の砂礫の地山が残り、A 4とA 5との周溝の区別がつく。さらに、A 4の北側周溝の暗灰色粘土層・黒色砂層がA 5の南側周溝によって掘りこまれていて、A 5の砂質気味の暗灰色粘土層が堆積している。これは、A 4の周溝がある程度埋まった段階でA 5の周溝が掘さくされたものと考えられる（挿図第7）。

### 方形周溝墓A 5-2

周溝墓A 5の西隣に位置するもので、1辺8mを測る。幅1.8m・深さ0.15mの周溝内から



插图第6 周满基A 5-2土器群实测图

多量の畿内第V様式土器が検出された（挿図第6、図版第11・12）。なお、この第V様式の土器群の中から、畿内第II様式の壺口頸部破片が検出され、本来第II様式期に築かれた周溝墓であることを確認した。主体部については、台状部がほとんど削半されていたため不明である。また、周溝内から石鐵が1点出土している。（挿図第15）

#### 方形周溝墓A 6

周溝墓A 5と溝を共有するもので、大半が調査地区外に出るために詳細は不明である。

東側の周溝は幅1m・深さ0.35mを測り、台状部は6m四方と考えられる。このA 5・A 6付近は黄灰色の砂質粘土はほとんど堆積せず、暗青灰色あるいは暗灰色の砂礫層が地山となっている。

#### 方形周溝墓B 1

調査地区南西隅に位置するもので、南側半分は調査地区外にあるため未調査である。周溝は幅1m・深さ0.6mを測る。台状部の規模は、北側で7mを測り、東北部に幅約1mの陸橋部が設けである。東側の周溝は周溝墓B 2の周溝と接している。北東部溝底から畿内第II様式の鉢（11）を検出した（挿図第8-4、図版第8）。主体部は検出できなかった。

#### 方形周溝墓B 2

周溝墓B 1に隣接したもので、幅1.5m・深さ0.3mの周溝に囲まれていた。東側は溝2によって削られているが、台状部は一辺7~8mとおもわれる。南側は井戸5によって掘さくされていて、主体部と思われる。土壌も南端が削られている。土壌は長さ1.6m以上・幅0.7m・深さ約0.05mを測るものである。

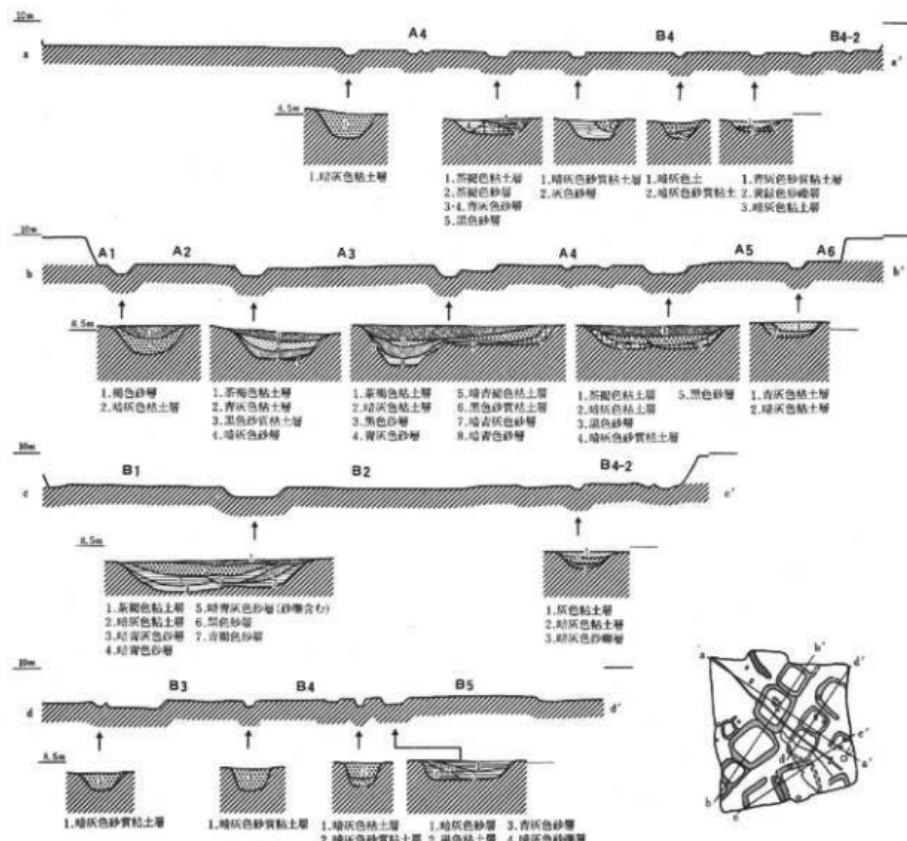
北側周溝の中央よりやや東の地点で、溝底から約0.1m遊離して、畿内第II様式壺（12）の底部破片が検出された。また、北側周溝のほぼ中央部には、後述の円形掘り方の土壌が設けられていた。西側周溝は、B 1東溝と接しているが、土層の切り合ひ関係から、B 1の周溝がある程度埋まってから、B 2の周溝が掘られていることがわかる（挿図第7）。

#### 方形周溝墓B 3

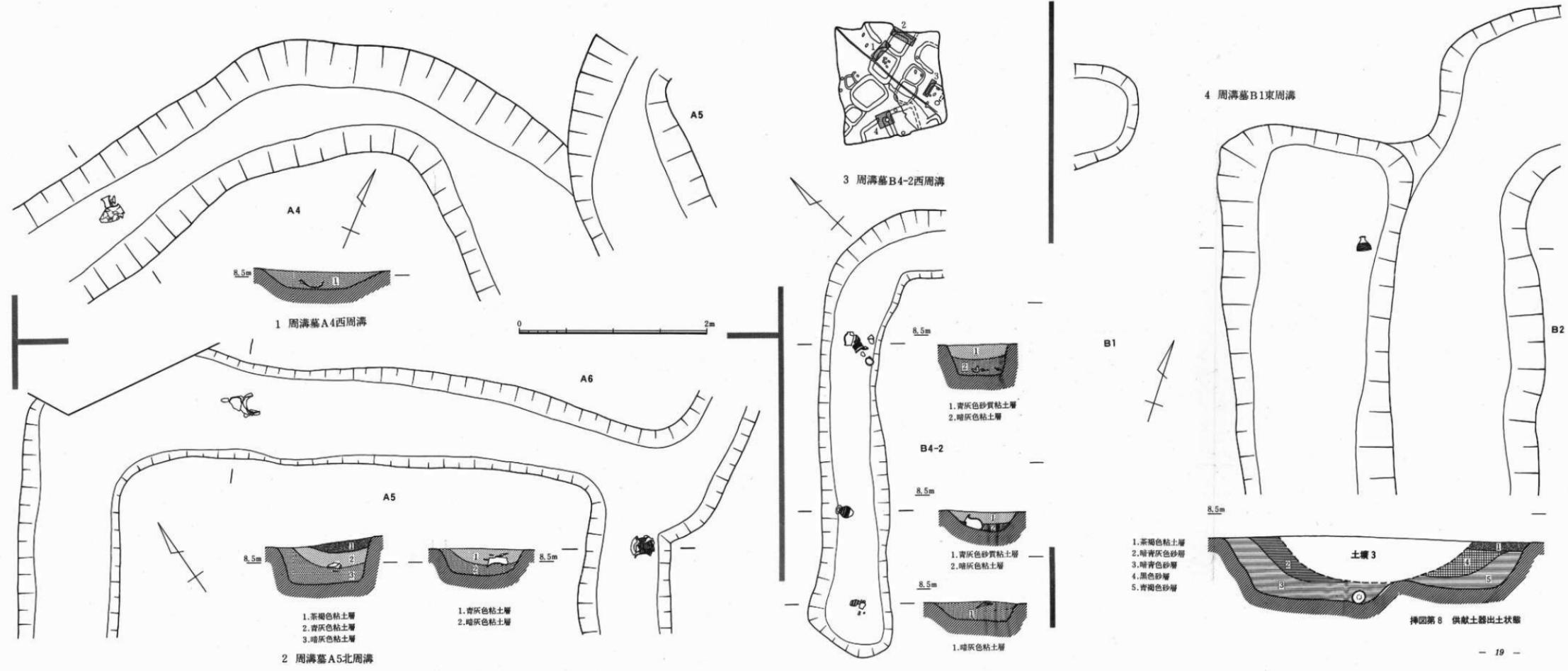
溝2によって南半分が削られているが、西南隅部は確認することができた。幅1m・深さ0.25mの周溝に囲まれ、台状部は長辺7m・短辺5.8mを測る。主体部は認められず、周溝内からの遺物も検出されなかった。

#### 方形周溝墓B 3-2

周溝墓B 2の南東隅に接したものとおもわれるが、溝2によって削られているため、確認できなかった。また、調査地区的南東隅に位置するため、台状部の東北隅部しか調査することができなかった。周溝は幅1m・深さ0.25mを測り、台状部は一辺6m程度とおもわれる。東側周溝の底部に接して、畿内第II様式の壺（13）雙（14・15）が検出された（図版第9b）。この



插图第7 周溝断面一览



周溝墓B 3-2の方向は、B 1・B 2と同じである。

#### 方形周溝墓B 4

周溝墓B 3の北溝と溝を共有するもので、その幅0.9m・深さ0.4mを測る。台状部は長辺5.5m・短辺5.2mのはば正方形を呈し、2基の土壙墓が検出された。土壙墓1は、中央よりやや北側に位置し、長さ1.5m・幅0.8m・深さ0.03mを測る。長方形で方向はB 4の対角線の方向に沿う。土壙墓2は長さ1m・幅0.7m・深さ0.14mの不整形である。東北隅部に位置するものである。土壙の底はいずれも平坦であるが、木棺の痕跡は認められなかった。また、供獻土器等の類は、検出されなかった。

#### 方形周溝墓B 4-2

周溝墓B 4の南東に位置するもので、B 3・B 4と同一方向である。周溝は幅0.9m・深さ0.3mを測る。台状部は長辺4.3m・短辺4.2mを測る。西側周溝内の底に接して畿内第II様式の壺(16・17)甕(18)が検出された(插図第8-3)。また、主体部と考えられる2基の土壙を確認した。土壙1は、台状部北縁に北側周溝と平行に設けられたもので、長さ1.6m・幅0.8m・深さ0.1mを測る。土壙2は、台状部のはば中央に長辺と平行に設けられ、長さ2.1m・幅0.6m・深さ0.1mを測る。いずれも隅丸の方形プランの土壙で内部から遺物は検出されなかった。土壙2の西側に直径1m・深さ0.2mの円形ピットを検出したが、遺物はみられなかった。この周溝墓に関連するものかどうかは、明らかでない。

#### 方形周溝墓B 5

周溝墓B 4の北隣に約1m距てて位置するもので、溝の共有関係はないが、B 3・B 4と同一方向である。調査地区の北東隅があるので完掘できなかった。周溝は幅1~2m・深さ0.3~0.4mを測る。周溝は、完周せずに南東部に陸橋部を有する。台状部は長辺7.5m・短辺6.5mを測る。主体部は検出されなかった。

ここで、周溝墓群の築成の前後についてみてみたい。周溝墓A 1から出土した小形の第II様式壺は後の第VI章でのべるように、その形態・手法からみて、第I様式に近い。それにくらべて、周溝墓A 5から出土した第II様式壺はより新しい傾向がみられる。また、溝の接続状況からA 4→A 5という築成順序が認められるのでA群は南から順次北へ築成されていったと判断できる。

B群についても南から東北方へ順次築成されていったと考えられる。このB群は周溝墓B 2の次の時期にB 3とB 3-2の2基に分解し、以後B 3→B 4というふうに築成される。この結果A群の周溝墓A 1・A 2・A 3とB群の周溝墓B 1・B 2が並行して築成されていたものが、B 3の築成によって、周溝墓A 4は方向を北にむけなければならなくなつたと解される。

以後A群とB群はまた同一方向をとるようになる。周溝墓B 2から南東部に分かれたB 3—2にも順次東方に周溝墓が築成されていったと推定される。

### 第3節 土壙

全部で6ヶ所検出されている。平面形が円形を呈するもの(1~3)と、ほぼ長方形を呈するもの(4~6)がある。前者は、周溝内に検出され、いずれも土器を出土している。

#### 土壙1 (挿図第9、図版第15b)

周溝墓B 2の北側周溝のはば中央部を掘さくしたもので、台状部の一部を切っている。直径約1.4m・深さ約0.4mを測る円形土壙で、底はほぼ平坦である。底部からは庄内式併行期の土器を検出した。

#### 土壙2 (挿図第9)

周溝墓B 5の周溝南西隅に掘さくされた円形土壙で、直径1.1mを測る。周溝底を0.2m掘り下げていた。底に接して布留式の甕破片を検出した。

#### 土壙3 (挿図第9)

周溝墓B 2の北西隅に位置するもので、第V様式土器3点を検出した。調査当初、周溝墓の供獻土器と考えて、作業を進めたため、その形狀は不明である。なお、土層断面の観察によれば、深さ0.45m・径2.07mである。

#### 土壙4

周溝墓A 5—2の南側に位置するもので、長さ1.4m・幅0.45m・深さ0.15mを測る。隅丸方形で底は平坦である。内部から遺物を検出しなかった。

#### 土壙5

土壙4の南東部に位置するもので、長さ1.6m・幅0.8m・深さ0.14mを測る。方形で底はほぼ平坦である。土壙4と同じく遺物を検出しなかった。

#### 土壙6

周溝墓B 4—2の西南部に位置し、溝1によって部分的に壊されている。長さ約1.3m・幅0.6m・深さ0.2mを測る。方形を呈し、内部から畿内第II様式の壺片を検出している(第4図1~5、図版第49a・b)。

なお、土壙5・6は、その形狀・掘方から土壙墓の可能性もある。

## 第4節 井戸

全部で5基の井戸を検出した。5基のうち4基は、井戸枠らしきものはみられず、素掘りのままである。井戸枠の残存するのは1基である。

### 井戸1 (挿図第10、図版第13a)

円形・素掘りの井戸で、周溝墓A 3-2の南西部に位置する。直径約0.8m・深さ約0.8m・底径約0.6mを測り、底はほぼ平坦である。内部には灰色の粘土が堆積し、庄内式併行期の土器が多數埋没していたが、それらは層位的に区別できなかった。

### 井戸2 (挿図第10、図版第13b)

調査地区の東南部・周溝墓B 4-2の南側に位置し、直径約1.7m・深さ1.3m・底径約1mを測る円形井戸である。井戸1同様素掘りのままで、井戸枠らしきものはみられない。内部には青色あるいは暗灰色の粘土が堆積し、井戸の上端から約0.5m下方の暗青灰色砂質粘土層付近で、庄内式併行期の土器を検出した。

### 井戸3 (挿図第10)

井戸1の北側約3mに位置する。円形で直径1.1m・深さ約0.8m、底は平坦で直径約0.8mを測る。内部には灰色粘土が堆積していた。井戸枠らしきものはみられず、素掘りのままである。底部近くで布留式土器の一括資料を検出した。

### 井戸4 (挿図第10、図版第14a・b)

周溝墓A 3-3のほぼ中央部に位置する。円形で直径約0.9m・深さ約0.4mを測る素掘りの井戸である。内部から良好な、布留式土器の一括資料を検出した。

### 井戸5 (挿図第10、図版第15a)

調査地区の南壁際に位置し、井戸枠の残る唯一のものである。上端の直径1.3m、底部の直径0.5mを測る円形の井戸である。掘り方は二段掘りである。枠材は大木の内側をくり抜いたもので、東側で高さ約60cm・厚さ10cm・外周の径約50cmを、西側で高さ20cm・厚さ5cm・外周の径約40cmを測る。元来、外周の径50cm程度の枠材を3ないし4枚組み合わせて井戸枠としたものであろう。内部には暗灰色粘土、暗灰色砂礫が堆積し、底部から須恵器の破片が出土している。奈良時代に属する。

## 第5節 溝

調査地区を斜めに横ぎる溝を二本検出している。

## 溝1

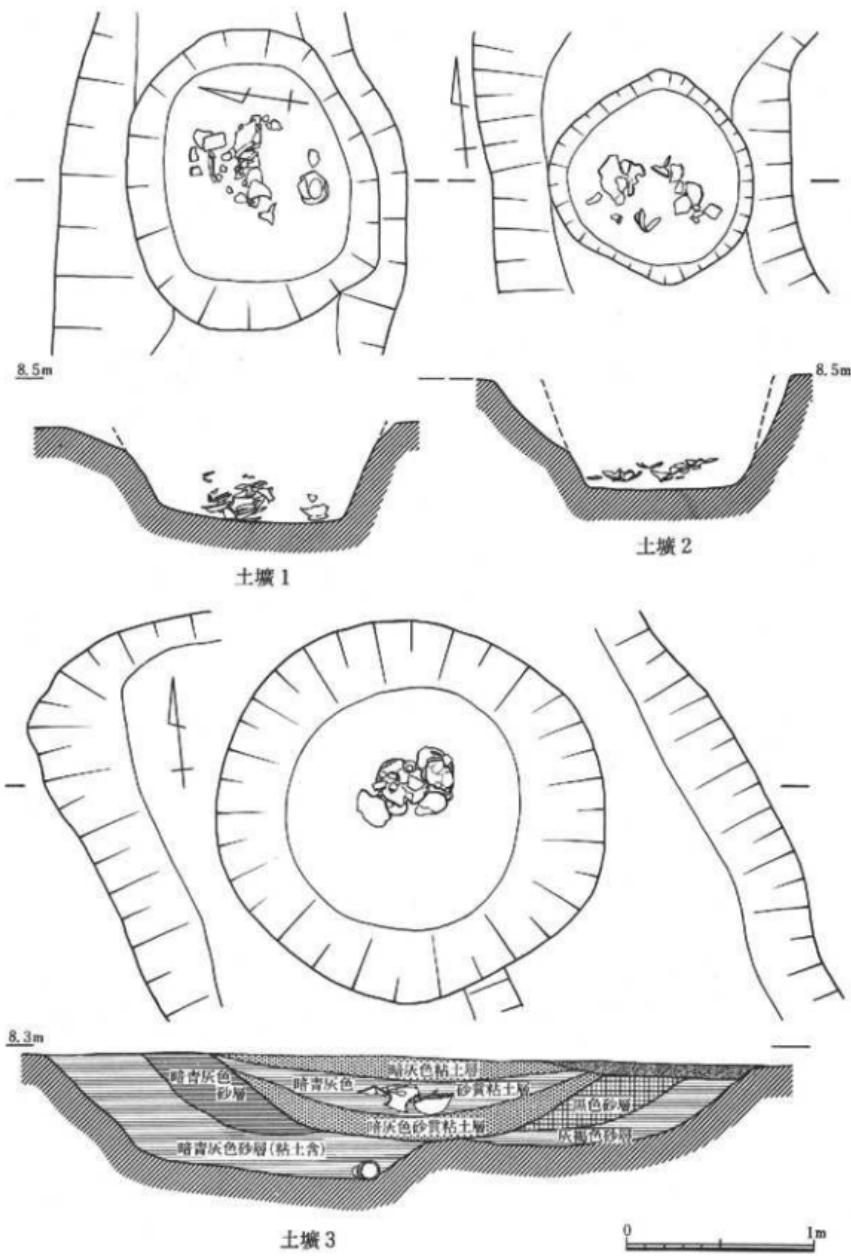
調査地区を北西から南東部にかけて斜めに横切る小溝で、幅0.4~0.6m・深さ約0.2mを測る。

ほぼ直線的に掘さくされており、調査地区外へつづいている。溝の側壁はほぼまっすぐに掘さくされていて、鋭利な工具が使用されたことを物語る。内部から遺物が検出されなかったので所属時期は不明であるが、土壌墓3を切って掘さくしているので弥生時代中期以後のものである。

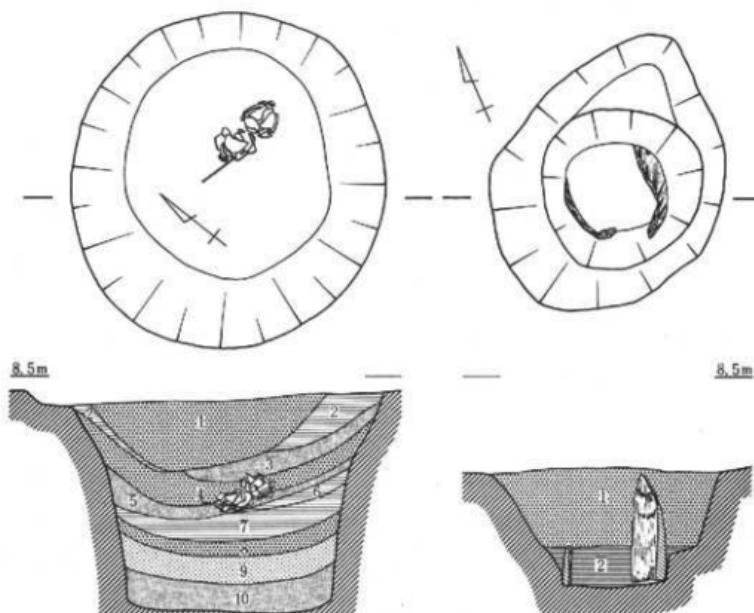
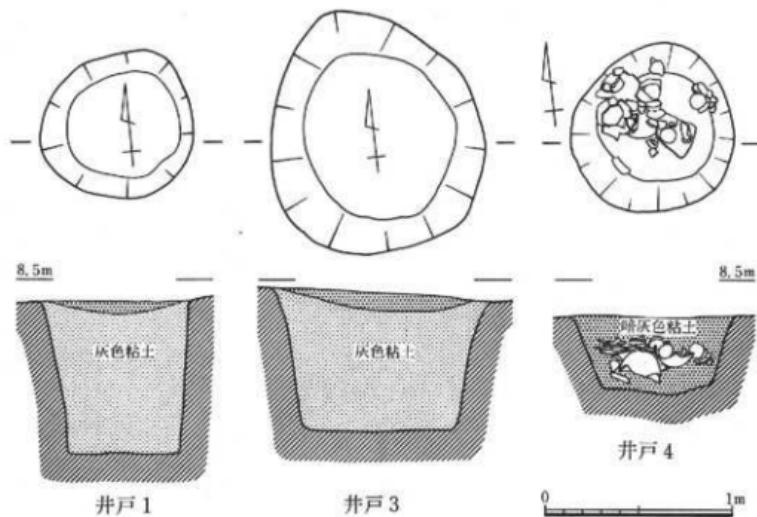
## 溝2

調査地区西壁の北部から南壁中央部にかけて溝1と同じ方向に幅6mの溝を検出した。この溝は西壁の断面でみると耕土のすぐ下から地山である黄灰色土（砂質氣味）まで達するもので、茶褐色あるいは暗灰色の砂礫層が堆積している。砂礫層の堆積状態からみて、かなりの流水量があつたらしい。また、調査地区中央部から南壁にかけては地山面を0.3~0.5mも削っている。このため一部の周溝墓を部分的に切っている。砂礫層の中から量は少ないが弥生時代から中世までの各時期の土器を検出した。

本調査地区の東南部(10-E・10-I地区)で、昭和48年12月に調査を実施したところ、この溝のつづきが奈良時代の遺構面を削っていることを確認している。また耕土直下から砂礫層が堆積し、砂礫層の堆積状態や遺構の破壊状態からみて、人為的に掘さくしたものではなく、中世以後の自然流路と考えられる。



挿図第9 土壌実測図および土器出土状態



1. 暗灰色砂質粘土層 2. 青色砂層 3. 黑色粘土層 4. 暗青灰色砂質粘土層  
5. 黑灰色砂質粘土層 6. 青色砂層 7. 青色砂層  
8. 暗灰色粘土層 9. 青色粘土層 10. 黑色砂質粘土層

1. 暗灰色粘土  
2. 暗灰色砂層(粘土含)

井戸 2

井戸 5

摺図第10 井戸実測図

## 第 VI 章 遺物およびその考察

### 第 1 節 弥生式土器（第Ⅱ様式）

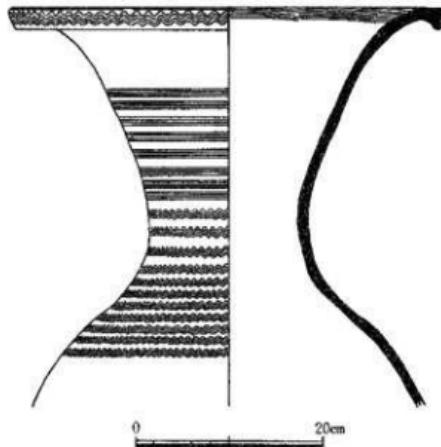
#### 1. 周溝墓出土の供獻土器（第1～3図、図版第16～19・51a、表3）

9基の周溝墓から、検出されていて、すべて第Ⅱ様式に属する。器種としては、小形壺、壺（A・B・C・D）、台付深鉢、甕（A・B）があり、18個体分を数える。個々の土器については、観察表を参照されたい。

小形壺A（1）は第Ⅰ様式の系譜をひくと考えられるもので、下腹部の張った体部と、分厚い底部を有している。肩部に櫛描直線文を2帯ほどこしている。胎土は、砂粒を多く含んでいる。

壺A（8・10・12・13・15・16）は、球形の体部に、やや斜め上方へたち上る頸部と、大きく開く口縁部を有し、体部から口縁部にかけて、なめらかに移行するものである。ただ（8）は、体部と頸部の境が明確で、壺Aの中では新相を呈する。そして、体部上半から頸部にかけて、櫛描文をほどこすのを通例とする。また、口縁端部を下方に拡張して櫛描文（10）、刻目文（16）をほどこすものがある。特に刻目文については、包含層出土の壺形土器を含めてみたとき、半数以上の土器にみとめられる。このことは、安溝遺跡の第Ⅱ様式壺形土器全般についてもいえることであり、郡家川西遺跡でも同様のことがいえる。将来、資料の増加をまって検討したい。なお、（10）は、下半を欠失しているが復元高80cmを測る大形品で、壺棺であった可能性が高い。

壺B（17）は、球形の体部に、短い頸部と、大きく外反する口縁部を有するものである。口縁部上面に1



挿図第11 周溝墓A 5-2出土の供獻土器 壺A (10)

対の突起を有し、端部に刻目文をほどこしている。また体部の櫛描文は、範磨き仕上げの後、ほどこされているのが看取できた。

壺C (2) は、胴長の体部に、短く外反する口縁部を有する。施文は(17)と同様、範磨き仕上げ後、おこなわれている。

壺D (3) は、無縁壺の一例と考えられるが、口縁部が斜めに傾いており、水差形土器と類似の機能を考えられるものである。安満遺跡では、これまでの調査においても、少なからず検出されており、今回の調査でも、(3)以外の包含層から、1点出土している。<sup>⑤</sup> その祖形と考えられる第Ⅰ様式の瓶形土器も出土している。この壺Dは、摂津以外の地域であまり検出されず、分布は地域的に限定される器形である。

なお、壺の底裏に木葉痕を有するものが2例(13・18)検出されているが、他の壺では、底裏をナデ調整したものが散見でき、本来大部分の壺は、木葉を敷いて、製作したものと考えられる。

台付深鉢(11)は、倒鐘形の体部に、直口口縁のとりつくものである。体部上半に櫛原体による6帯の直線文と1帯の波状文によって、疊かに飾られている。脚台部は、いったん成形・調整をおえてから、内側の粘土を削りとっている。器形的には、あまり類例をみないものであるが、体部の形態は、豊中市勝部遺跡の鉢に似たものがある。<sup>⑥</sup>

壺A (4・6・7・9・15・18)は、体部外面にタテ方向の、口縁部内面に横方向の刷毛調整をほどこしたものである。ただ口縁部の形態・調整に関しては、(7)のように調整が充分でないものや、(18)のように上端部に刻目をほどこしたものなどがあり、画一的にとらえられない。また、底裏の木葉痕を有するものが多数をしめている。

壺B (14)は、倒鐘形の体部に、短く外反する口縁部を有するものである。形態的には、第Ⅰ様式の様相を呈するが、口縁部内面の刷毛調整や、端部が舟形であることなど、第Ⅱ様式の特徴を示している。

第Ⅱ様式土器の地域性については、佐原真氏の見解がある。<sup>⑦</sup> 具体的には壺の形態・手法の差異を基軸にしたもので、摂津の壺は「大和型」を主流とし、これに「播磨型」が少量伴うものとしている。今回の調査およびこれまでの安満遺跡の調査によって、検出された第Ⅱ様式の壺は、おむねこの「大和型」に属するものであり、「播磨型」は検出されなかった。この「播磨型」は、田能遺跡・勝部遺跡など、猪名川流域西摂の遺跡からの出土がみられるが、北摂地域ではいまのところ、検出例をきかない。その反面、口縁部に突起や押捺をほどこした壺は、しばしば検出されている。<sup>⑧</sup> この壺は、いわば「近江型」の影響をうけた「大和型」壺としてとらえられるもので、近江・山城・北摂の各地域に分布している。このことは、壺Bやその他一

部の壺においても、指摘することができる。また、山城・北摂の両地域の土器底部についている木葉痕は、その製作技法においても、共通性をみいだせるものである。このように、北摂地域の第Ⅱ様式土器は、近江・山城地域との結びつきが極めて強いことが看取されるとともに、千里丘陵を境にした西摂地域とはその在り方に一線を画すことができる。

さて、これらの供獻土器は、溝底に接して、あるいは溝底から遊離したかたちで出土しているが、溝中に正立して検出された例はない。おそらく、墳丘上ないしは、墳丘端部におかれてあったものが、後世の周溝墓削平以前に転落したものと考えられる。なかでも、周溝墓A 5 の壺(8)は、特異な出土状態を示している。というのは、壺の下半部が周溝墓の北隅から検出され、上半部が、東隅から検出されたものである。しかも上半部と下半部をみると、人為的に欠いたものとは考えられない。当初、墳丘上に立っていたものが、まず上半部がこわれて東方向へ転落し、その後、盛土の流失とともに、下半部が北方向へ転落したものと推定される。個々の土器については、観察表に譲るとして、これら一連の供獻土器について、少しみでみよう。

周溝墓A 4 から検出されたほぼ完形の壺(7)は、内外面に煤の付着や、有機物の焦げつきがなく、火にかけられた痕跡もない。それは煮沸用器として、未だ機能していないことを示すものと考えられる。しかし、これは例外的な存在で、他の壺は、全て煤の付着がみとめられ、日常的に機能していたものを、供獻土器に用いている。貯蔵形態の壺、供膳形態の鉢については、その形態観察から、日常的に使用されていたものかどうかを判断するのは難しい。ただ、焼成前に底部をえぐるように穿孔したものは検出されず、当初から明らかに供獻土器として、製作されたものは、みとめられない。このことは、畿内の弥生時代に属する他遺跡の周溝墓の供獻土器についてもいえることである。また壺(16)は、体部下方に焼成後の穿孔を有するものであるが、器高19.2cmの小形品(ちなみに頸部内径4.5cm)で、とうてい壺棺として使用されたとは考えがたいものである。おそらくこれは、穿孔することによって土器本来の機能を否定し、却って供獻用の「仮器」化をはかる機能の一次の変容の行なわれたことをしめすものと考えられる。この種の土器を他遺跡に求めるとすれば、川西市加茂遺跡の周溝墓から検出された台付長頸壺などが該当する。しかし、一般的に畿内における弥生時代の周溝墓の大部分の供獻土器は、日常使用可能な土器を穿孔せず、そのままを供獻用器として転用している。しかもそれは、壺・甕・鉢だけでなく、高环や水差し形土器も含まれており、一部の器種に限定されたものではない。ただし、統計的には、壺が圧倒的に多く認められ、供獻土器として、装飾的な土器が最もふさわしいと考えられていた可能性がある。

つぎに、各周溝墓に、いくつの供獻土器が検出されたかをみてみると、周溝墓A 3、B 3-2、B 4-2 がそれぞれ3個体、他は1~2個体である。なかには供獻土器の検出されな

かった周溝墓がいくつかある。これらのなかには、後世の整地によって、供獻土器が消失したこととも充分考えられ、必ずしも実数を示すものではない。

## 2. 土壤 6 出土の土器 (第4図、図版第49)

周溝墓B 4-2 の西南部にあり、第II様式壺A の破片および、甕片が検出された。(1)と(2)および(3)と(4)は、それぞれ同一個体と考えられるものであるが、破片数が少いうえ、遺存状態も悪く、流れ込んだ可能性が高い。(1・2)の壺は、4条の櫛描直線文を、頸部から体部上半にかけて、数帯ほどこし、最下帯に波状文1帯を配している。また口縁端部下端に刻目文をめぐらしている。なお、口縁部内面が若干煤けている。(3・4)の壺は、球形の体部を有するもので、体部上半を7条の櫛描直線文で飾っている。体部下半に煤の付着がみられる。鉢・片(5)は、暗茶褐色を呈し、砂粒を多く含むものである。外面に刷毛目はみられず、軽く距削りした痕がみられるところから、縄文土器(晚期)と考えられる。

注① 原口正三「安溝遺跡」『高槻市史』 高槻市役所 昭和48年

② 藤井直正他「勝部遺跡」 豊中市教育委員会 昭和47年

③ 佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2 昭和43年

2. 佐原真・井藤徹「弥生式土器」「池上・四ツ池」 I 池上遺跡、7 遺物 第2版和国道内遺跡調査会 昭和45年

④ 村川行弘他「田能遺跡概報」『尼崎市文化財調査報告第8集』 尼崎市教育委員会 昭和42年

⑤ ②に同じ

⑥ ①に同じ

⑦ ③-1に同じ

⑧ ①に同じ。その他の壺としては、口縁部上方が内寄する壺 (PL139-b-128・129) があげられる。

⑨ 石野博信他「摂津加茂」 関西大学 昭和43年

## 第2節 弥生式土器 (第V様式)

### 1. 周溝墓A 5-2 土器群 (表4)

周溝墓A 5-2 の西周溝内から出土した一括資料で、畿内第V様式に属するものである。器種としては壺・鉢・高坏・器台・甕などがあげられる。全体として甕・壺が圧倒的に多く、甕が半数、壺が $\frac{1}{4}$ をしめ、あと高坏・鉢・器台がつづく。

またこの土器群は堆積層が薄く、個体数が多い割に、完形に復元しうるものはほとんどない。

ただ口縁部から底部までの接合資料が20個体あまりあり、その様相を知ることができる。そのためここでは、土器分類の視点を土器の製作技術におき、分類をおこなった。なお個々の土器については、観察表を参照されたい。

#### 壺（第5～8図、図版第20～24・52・55b）

壺A（1～4） 壺Aは第V様式の壺として、畿内各地にみられる、典型的なものである。全般的に仕上げがていねいで、口縁端部や体部上半に文様をほどこした、いわゆる飾る壺である。口縁部の形態から2つに分ける。

壺A<sub>1</sub>はイナジク形の体部に、直立した頸部と大きく外反する口縁部を有する土器である。口縁部の下方に粘土紐を貼り付けて、端部を拡張し、凹線文や円形浮文をほどこしている。第V様式の壺のなかでは、土器棺に使用されたものを除けば、大きい方に属し、(4)は西ノ辻I地點出土の壺<sup>①</sup>と法量的に似かよっている。また(1・2)は口縁部の器壁が厚く、のちにのべる成形手法の点から、古相を示していると思われる。

壺A<sub>2</sub>は体部が扁平になっているほかは、壺A<sub>1</sub>と同様の特徴を有する土器である。口縁端部のはか、口縁部上面および肩部にも文様をほどこしている。口縁部の形態から、壺Aのなかでは新しい相をもつと考える。

壺B（5～17） 壺Bは器高20cm前後の土器で、口縁部のヨコナデ手法をその特徴とする。すなわち、上縁部をつまむように強くヨコナデするため、上縁部内面がわずかに凹んだようになっている。そしてその後、端部をなでつけ、わずかに上下に突出する面をついている。また、調整は壺Aに比して簡素で、体部は刷毛調整を主に用いている。口縁部は、籠ナデ調整としかいいようのないもので、籠の押しつけが弱く、その大部分は多くの場合消えている。口縁部の形態から3つに分ける。

壺B<sub>1</sub>は、球形の体部に、短くたちあがる頸部と外反する口縁部を有する土器である。(8)を代表例とする。器高は20cm前後で、壺Aに比して小さく、口縁部に刻目文を有するもの(5・6)と、そうでないものがある。

壺B<sub>2</sub>は、ほぼ球形に近い体部に、外弯ぎみにたちあがり、上縁部で外反する口縁部を有する土器である。(9)を代表例とする。文様はほとんどなく、わずかに口縁端部に細い凹線や沈線をほどこすもの(9・11・12)がある。口縁部を除けば、ほぼ壺B<sub>1</sub>と同様の形態を呈する。

壺B<sub>3</sub>は、全体の形態が明らかでないが、体部から外反する口縁部を有する。壺Bのなかではやや大きい（推定腹径約26cm）土器であるが、口縁部の調整手法や文様のすくないことなどは、壺B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>と共通する。ただ(16)に刻目文をほどこしているのは、壺Eとの関連が考えられる。

壺C（18・19） 壺Cは口縁部のみ遺存する。頸部は上方にたちあがり、口縁部で外反する土

器である。口径約12cmを測る。体部は球形に近いと思われる。

壺D (20) 壺Dは、高くたちあがった頸部から外反する口縁部を有する土器である。壺A～Cの口頸部高は3～5cmであるのに対し、8cmを測る。体部が遺存していないため全体の形態は不明だが、他遺跡の出土例から推して、球形に近いと思われる。壺Aないし壺Bにふくめて考えることも可能だが、口縁部の調整手法から、別に分類した。

壺E (21) 壺Eは、上方にたちあがった頸部から屈曲して外反する口縁部を有する土器である。体部を欠失して全体の形態は不明であるが、頸部内外面を刷毛調整する。器壁は薄く、頸部中位でわずかにふくらむ。

壺F (22) 壺Fは、上方にたちあがった頸部に受口状の口縁がとりつく壺で、形態上から近江・山城地方との関連が考えられる土器である。体部を欠失するが、縦長の球形に近いと思われる。

壺G (23) 壺Gは、縦長の球形を呈する体部と、わずかに外反する口縁部を有する土器である。体部から口頸部にかけて、なめらかに移行する形態を呈する。体部上方に箋書きの記号文を有する。

壺H (24) 壺Hは、壺Gの口縁部の形態と似かよっているが、肩部の張りが強いことや、整形手法の違いから分けて考える。この種の壺は出土例がすくないが、滋賀県鴨田遺跡の出土例のなかに、体部から頸部にかけての形態がよく似ているものがある。<sup>24)</sup> ただ(24)の口縁部が薄くおわっているのに対し、鴨田例では受口状を呈している点が異なる。

壺I (25) 壺Iは、やや肩の張った球形の体部に、斜め上方にたちあがる口頸部を有する土器である。同じく鴨田遺跡に類似品を見るが、明確な位置づけができない。

壺J (26) 壺Jは、卵形の体部に短くたつ口縁部を有する土器である。肩部に把手の接合痕を有し、水差し形土器としての機能が考えられる。口縁部のヨコナデは壺Bと同手法である。

壺K (27) 壺Kは、胴の張った球形の体部に、上方へ短くたちあがる口頸部を有する土器である。この形態の壺は、畿内で散見するが、近江地方にも類似品が存在する。

壺L (28) 壺Lは、いわゆる無頸壺である。口径は口縁部小片からの推定復元である。他に同一個体とみられるものではなく、混入品かもしれない。蓋形土器は検出できなかった。

壺M (29) 壺Mは、無頸壺にわずかにたちあがる口縁部を有する土器である。小片のため、全体の形態は不明である。

壺N (30～37) 壺Nは、球形に近い胴部に、縦に長い口頸部を有する、いわゆる長頸壺である。完形品はないが、口頸部の長いもの(N<sub>1</sub>)と短いもの(N<sub>2</sub>)の2つに大きく分けられる。端部の形態は、面をもつもの、薄くなつておわるものなど、多様である。

**壺O** 壺Oは、球形に近い胴部に細長い口縁部を有するいわゆる細頸壺である。この土器群からは検出されなかった。

**壺P (46~55)** 壺Pは、胴の張った体部に短く屈曲する口縁部を有し、器体に脚台のつく土器で、器高は20cm前後である。(46)を代表例とする。外面の磨きを脚台部内面にもほどこし、ていねいな作りである。脚台部は、裾部が細いもの(51・54)と、太くしっかりしたものがある。また、裾部に細い凹線を有するもの(51・53)がある。

**壺底 (38~45)** 壺底は、全部で17点を数える。すべて平底であるが、わずかに残った体部下半の形態および調整手法から推して、壺A的なもの6個、壺B的なもの11個の2つに大きく分けられる。底裏の仕上げ調整は、大部分がナデ調整と思われるが、(45)のように未調整で木葉痕を有するものがある。

**鉢 (第8・9図、図版24・25・53a)**

鉢は形態から大きく5つに分けられる。

**鉢A (56・58)** 鉢Aは、外反する口縁部を有するもので、口縁端部に面をもつA<sub>1</sub>(56)と、薄くおわるA<sub>2</sub>(57・58)がある。(58)は、形態的に壺形土器とも、考えられるが、体部外面をナデ調整しているところから鉢とした。

**鉢B (59~63)** 鉢Bは、受口状を呈する口縁部を有するもので、口径25cm前後のB<sub>1</sub>と18cm前後のB<sub>2</sub>の大小2種に分けられる。現在まで、他にあまり類例をみない。(63)は口径に対して、器高が低く、庄内式以降の小形鉢に、受けつながれる形態をそなえている。

**鉢C (64~67)** 鉢Cは、口径13cm前後の小型の直口鉢で、上方が内弯するC<sub>1</sub>(64・65・66)と、直線的におわるC<sub>2</sub>(67)がある。

**鉢D (68・69)** 鉢Dは受口状口縁をもつ浅鉢である。近江地方にその源を求めるよう。(69)はその典型で、形態とともに調整・施文にいたるまで近江地方のものと酷似している。ただ、(68)とともに体部中位に貼り付け凸帶を有しており、手焙形土器との関連性がうかがえる。

**高环 (第9・10図、図版第25・26・53b・54a)**

高环はすべて曲折してたちあがる口縁部と、裾ひろがりの脚台部をもつ高环Aに属する。環部が碗状になったものや、段や凸帯を有するものは検出できなかった。高环Aは形態からA<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>に分けた。しかし両者に明確な差異を認めるものではない。

**高环A<sub>1</sub> (70~84)** 高环A<sub>1</sub>は、口径に対する環部高の比率が0.24を上まわらないこと、脚部が比較的なめらかにひろがることなどをめやすとしている。

**高环A<sub>2</sub> (85~100)** 高环A<sub>2</sub>は、口径に対する環部高の比率が0.24を下まわらないこと、脚部が中位で屈曲して、下方へひろがることをめやすにしている。また口縁部は、高环A<sub>1</sub>と異なり、わずかに上方にたちあがったのち、外反する。なかでも(85)は口径33.7cmの大形品で、上縁

部で大きく外反し、内面に2条の細い凹線をほどこしている。

整形手法は高环A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>ともほぼ同様である。なお(81)は、断片的資料ではあるが、連続成形技法によると思われる。

**小形高环(101・102)** 小形高环は、復元口径15cm前後のもので(101)は口縁部と环底部の境に、刻目文をほどこしている。

**器台(第11図、図版第27・53a)**

器台は、裾ひろがりの脚部に、屈曲して外反する受皿部を有するA類と、受皿部からなだらかに筒部へ移行するB類がある。

**器台A(103~106)** 器台Aは、口径20cm前後で、全般的にていねいな仕上げの土器である。

(103)は口縁端部を下方に拡張し、2条の凹線をほどこしている。

**器台B(107~111)** 器台Bは、口径22~23cmで、(109)を代表例とする。口縁端部および裾部に文様をほどこすもの(108~110)と、ほどこさないもの(107・111)がある。(109・110)の裾部の文様は、会下山遺跡のU地区から出土した土器に似たものがある。<sup>③</sup>器台A・Bともに、受皿部上面に顯著な磨耗痕は認められなかった。

**有孔鉢(第11図、図版第28・55b)**

有孔鉢は、鉢Cの底部に1孔~数孔を穿ったもので、底部の形態から2つに分けられる。

**有孔鉢A(112~114)** 有孔鉢Aは、外方へ開き深鉢状を呈する体部と平底を有する土器である。

**有孔鉢B(115~119)** 有孔鉢Bは、やや内寄ぎみの体部と、小さく不安定な底部を有する土器である。単独では、到底正立しないものであって、他の器種と組み合わせて使用しないかぎり、日常土器としての機能は考えがたい。

**甕(第12~17図、図版第28~35・52a)**

甕は全形を知りうるもののが少ないので、口縁部の形態および手法から5つに分けた。

**甕A(120~156)** 甕Aは、斜め上方にたちあがる口縁部を有する土器である。それらを、端部に面を有するA<sub>1</sub>と、そうでないA<sub>2</sub>に分ける。

甕A<sub>1</sub>は、やや丸味をおびた丈高的体部に、外反ないし外弯する口縁部をそなえ、口縁端部に面を有する土器である。口径は12~20cm前後のものが絶体多数をしめ、なかでも14~16cmのものが約半数をしめる。ただ(145)は口径23.6cmと大きい。手法的には、タキ整形後、外面に刷毛調整をほどこすものと、そうでないものがある。刷毛調整をほどこすのは上腹部の張った甕(130・133・135)や縦長の甕(142・144)によくみられ、とくに(133)は口縁部の形態から古く考えられる。また(132)は河内からの搬入品であり、庄内式變形土器以前に、北撰へ變形土器がもたらされていたことを示す数少ない実例である。このほか、三島では郡家川西

遺跡で数点類品が検出されている。

甕A<sub>2</sub>は口縁端部に面を有さないことを除けば、形態的には甕A<sub>1</sub>とほとんど差はない。ただし刷毛調整を全面にほどこすことなく、外面調整の簡略化が目立つ。口縁部の形態は、大部分が外反しているが、口縁部上方が内傾するもの（146・148）もある。また、口径から推して、容量的に大小に分かれる。

甕B（157～166） 甕Bは、口縁部中位がわずかにふくらみ、端部に面を有する土器である。口縁部の形態によって、外反するB<sub>1</sub>と、内嚢するB<sub>2</sub>に分けられるが、形態・手法はほぼ同様である。全般的に成形技術が稚拙で、体部中位の接合部に凹凸を残し、接合痕が明瞭なもの（161・162・166）がある。また、容量的に甕A<sub>2</sub>と同じく、大きいものと小さいものに明確に分かれる。

甕C（167） 甕Cは薄手の土器で、たちあがりの強い口縁部を有する。

甕D（168） 甕Dは、なめらかに外方へひろがる体部に、短く外反する口縁部を有する土器である。形態的には第Ⅱ様式に属するものであるが、刷毛目が細いことや、口縁部内外面をヨコナデすることから、それとは分けて考えた。

甕E（169～186） 甕Eは、やや胴の張った綫長の体部に、受口状口縁を有する土器である。タタキ整形後、全面に刷毛調整をほどこすのを通例とする。また口縁端部外面や体部上方に文様をほどこすものが多く、近江・山城地方との関係がうかがえる。

甕底部（187～203） 甕底部は、全部で32点検出されている。いずれも平底で底径4～6cmが大部分をしめ、最大のものは、径7.6cmを測り、最少で径3.7cmを測る。

これまで器種別に形態を中心として、その概略を述べてきたが、以下施文手法も含め、製作技法についてもうすこし詳しくみることにする。かって佐原真氏は高环の観察から組み合わせ技法を提唱し、都出比呂志氏はそれをうけて変形土器をとりあげ、第V様式における分割成形技法を提起した。<sup>④</sup>ここではそれら先学の成果を踏まえて、各器種の製作技法について、考察したい。

壺は、幅数cmの粘土紐をまきあげて、まず胸部下半までを成形する。この技法は各類とも共通であるが、外面整形段階において、相違がみられる。壺A・B<sub>2</sub>・Kはナデ調整ないし刷毛調整をほどこすのに対し、壺B<sub>1</sub>・G・J・N・Pではタタキ技法を用いている。内面の調整は、底部成形後ナデ調整ないし、刷毛調整をほどこすのが通例である。そして、下半部の整形がおわった段階で、粘土紐を下半部に直接まき上げ、頸部まで一気に成形する。外面の整形手法は、下半部のそれと同手法の場合が多い。そしてこの段階で、胸部内面を下半部との整合面直下から、一気に調整している。つまり、下半部、上半部それぞれに、粘土紐まきあげ→成形→外面

調整→内面調整、という工程があるわけである。ただ、上半部内面の調整手法は、必ずしも下半部内面の調整手法とは対応していない。なかには（30）のように、上半部内面の粘土紐を指でおさえて接合するだけで未調整のものもある。このことは、上半部と下半部の製作工程が、明確に分離していることを如実に示している。

さて、上半部まで整形をおわった段階で、口縁部をつくりたのであるが、器種によってさまざまな形態があり、一概に論ずるのはむずかしい。基本的には粘土紐をまき上げて成形するのであろうが、「口縁部のみを先に成形し」て、体部にとりつけるという指摘もある。<sup>⑤</sup> 壺Aは、口縁部下方に粘土紐を貼付し、端部を拡張するのを特徴とするのであるが、いまかりに端部拡張以前の口縁部を仮口縁部と呼ぶことにしよう。古柏と考えられる（1）と（2）の壺は、仮口縁部成形後、未調整の段階で粘土紐を貼付するのに対し、（3）と（4）の壺は、仮口縁部をヨコナデ調整してから、粘土紐を貼付している。このことは、のちに施文方法のところでもふれるが、前者の壺は、口縁部の調整と施文を同一工程で処理しようとする中期の回転台技法からくるものであり、後者の壺は、調整と施文を別工程でおこなう第V様式の土器製作技法からくるものであることを示すと考える。ところで、口縁部のとりつけ方であるが、口縁部をさきに成形し、半乾燥したものを体部と接合するのは、接合面の粘着性が弱く、また口縁部と体部上縁径を同一寸法につくりあげねばならないなど合理的でない。これに対し、壺Pなどは甕と同じく粘土紐をつぎたすだけで口縁部を成形しており、壺G・Hなどのように体部から口縁部へなめらかに移行する形態は、粘土紐を積みあげていくことによって、なしうるものであろう。つまり口縁部の成形も、基本的には体部と同様、下から上へ粘土紐をまきあげていったものと考えられる。そして口縁部をつくりたしたところで、頸部下方数cmのところから口縁部にかけて、ナデ調整ないし刷毛調整によって接合する。と同時に、口縁部内外面の調整をおこない、最後に体部外面を籠磨き・刷毛調整などで仕上げるわけである。これにはおおよそ3つのタイプがある。すなわち、①肩部から底部まで一気に籠磨きするもの（3・4・24・46）、②刷毛調整後、下半部のみ籠磨きするもの（9・26）、③上半部から下半部にかけて刷毛調整仕上げするもの（8・30）などである。さらにこの作業と併行して口縁部内外面の仕上げもおこなうわけであるが、壺Aが籠磨き、壺Bが籠ナデしたのち、それぞれ上縁部および端部をヨコナデして仕上げているのに対し、他の壺の口縁部は、ヨコナデするだけで仕上げている。

〔施文〕 文様を有するものは壺A・B・D・Nにみられるが、その方法は施文工程を必要とする場合と、調整工程の最終段階で施文する場合とがある。前者を施文a手法、後者を施文b手法とし、分けて考える。というのは、中期の回転台による文様（櫛描文・凹線文）は、土器製作の最終段階に回転台上でほどこされるものであり、施文工程を整形工程から明確に区別しがたい要素が多い。それに対し、後期の土器は回転台を放棄し、土器製作技法にタタキ技法

をとり入れた結果、別に施文工程を設ける必要が生じたと考えられる。このことが、文様の希少性やその構成の貧弱さにつながるのであろう。具体的には、施文a手法は施文具(櫛原体等)を必要とする手法であり、施文b手法はそれらを必要とせず、調整具(箒原体・刷毛原体等)で施文する手法であって、そこには施文工程の簡略化がうかがえる。そして施文a手法は西ノ辻I式以降、第V様式土器の基本的施文法であって、庄内式期にまでつづくのに対し、施文b手法は、ややおくれてはじまつたと考えられる。この土器群では、壺A・Dが施文a手法、壺Bが施文b手法と考えられる。

施文a手法による代表的なものを個々具体的にみていくと、(3)は籠磨き完了後、口縁部内面および端部に櫛描き波状文をほどこしたのち、端部に竹管文付円形浮文をめぐらしている。櫛描き波状文は全体的に浅くほどこされており、ところどころ消えてはいるが、少なくとも2カ所のプレスが認められる。そして肩部にも同一原体による直線文と波状文をほどこしており、<sup>⑦</sup>それに2カ所、対面のかたちでプレスがある。また、この肩部の文様をほどこす前に、そのわずか上方に、波状文を部分的にほどこしながらも、なで消した痕がある。これはおそらく、文様が頸部によりすぎて櫛原体が口縁部につかえたため、途中で施文を断念したものと考えられ、製作者の真剣な表情がうかがえて面白い。(4)は3個1組の竹管文付円形浮文を4組、(2)は同じく6組、(20)は円形浮文数個をそれぞれ口縁端部に貼付している。(4)の口縁端部の凹線文は、ヨコナデ仕上げと併行してほどこされたと考えられる。

施文b手法による文様としては、刻目文と細い凹線文の2種がある。細い凹線文は(9・11・12)の口縁端部にみられるもので、沈線をほどこしたのち、ヨコナデしている。刻目文は刷毛原体によるもので、(5・6・16)の口縁部および肩部にみられる。とくに(5)などは、口縁部内面と端部の両方にほどこされ、一見飾る壺のようであるが、その施文をみると、間隔も不規則で、施文a手法によるものに比して稚拙な感はいなめない。また、のちにもふれるが、(16)の肩部に刻目文をほどこすのは、甕Eの施文手法と通じるところがある。

以上壺形土器の成形・調整・施文をみてきたが、それぞれの段階における手法の有機的な関連をみると、壺Aを代表とするA群と壺Bを代表とするB群の、2群に大別できる。

A群は、壺Aに代表され、壺D・Hなどを含む。その最も大きな特色は、タタキ技法を用いないことである。その成形法は粘土紐まきあげによるものであるが、内面についている刷毛やナデの方向などからみて、まず体部下半をつくって内外面を整え、ついで体部上半をつくりたし、最後に口頸部をつくるといったおよそ3つの段階があったことが知られる。各段階では、それぞれ下から上へ連続的に粘土紐をまきあげている。また体部に縱方向の籠磨きをていねいにほどこして仕上げていることも、A群の特徴の1つにあげられる。籠磨き仕上げの精粗は、粘土紐まきあげによって生じる器表面の起伏を、前もってどの程度調整しているかに左右され

る。すなわち、箒磨き仕上げを縦方向にほどこそうとすれば、器表面の起伏と直交することになり、あらかじめ、よくならしてなければ、縦方向の箒磨きはかけにくい。一方、横方向の箒磨きは器表面調整の良し悪しに左右されずにほどこすことができる。(9) の下半部にみる横方向の箒磨き調整はその好例である。ただし、これはあくまで体部のみに該当することであって、口頸部に関しては、形態上の制約からくるのか、横方向の箒磨き仕上げが多くみられる。また、A群の基本的な特徴の一つに、文様をほどこして装飾性を高めていることもあげられよう。以上A群の特徴として3点をあげた。これらの特徴は、中期的な製作技法を踏襲していることを強くしめしている。また製作技法のみならず、A群に包括された壺形土器の各形式が中期に遡れるから、これらの土器の機能が前代のそれらと似たものであったとみてよいであろう。

B群は壺Bを代表とする。タタキ技法を用いて体部を下方から段階的に整形した後、口頸部をつくりつけている。仕上げ調整は刷毛調整を基本とし、一部の上器には箒磨きをほどこすもの(9・46)もある。全体的に装飾が少なく、施文する場合でも施文b手法により施文工程を省いている。つまりB群は、あとでのべる第V様式土器のもつ志向性に合致する技法(タタキ技法)で製作されているといえよう。また量的にも多く、壺を構成する各類のなかでB群に属するものが、A群のそれを上回っている。そこには、A群の壺とB群の壺のもつ機能的な差異が反映しているとみるとべきであろう。

鉢は、前述のように、形態上4類に分けられるが、調整手法の違いから3つにまとめられる。1つは、鉢A・Bを含む一群で、基本的にタタキ整形技法を用いていると考えられるが、器表面に顯著なタタキ目を見いだせないものである。おそらく、ていねいな調整によって消えたものと考えられる。そして体部整形後、口縁部をつくりだすものであるが、鉢Aでは外面に粘土紐をつぎたすのに対し、口縁部が内弯する鉢B・Cでは内側に粘土紐をつぎたしている。また最後に内外全面を箒磨き仕上げするものが多くこの一群の特徴と云える。もう一つは、鉢Cを中心とする一群で、口径20cm未満の小形品がほとんどである。いわゆる段階(分割)成形技法の所産と考えられるもので、形態・手法の点から、(66)は壺下半部、(67)は壺下部に相等する。技術的には、粘土紐をまき上げ、タタキ整形し、内面に粗く刷毛調整をほどこしている。そして内外面を軽くナデて仕上げている。中でも(64)・(65)は、擬口縁部をヨコナデし、口縁部をていねいに仕上げている。もう一つは鉢Dとよばれるもので、とくにその形態から分類できるものである。(69)のていねいな刷毛調整や櫛描施文等、他の群には、あまりみられない手法、施文法を有している。貼り付け凸帯は左廻りにほどこされているが、その多くは消失し、櫛描直線文のプレスも接合資料のため不明である。

高坏は一般に調整がていねいであって、製作技法の観察には困難をともなう。ここでは資料に基づき復元的に製作技法を考えてみたい。

ほとんどの高坏の柱状部は、断面観察で粘土紐の接合痕を検証できないから、1つの粘土塊から成形されていると考えられる。そこで1案として製作技法を復元すると、まず最初に一握りの粘土塊を高さ5~6cm、径4~5cmの円柱状につくる。それを片手にもち、一方から棒状のもの（裾部の穿孔具と同一のものと考えている）を奥深く突きさし、先端を支点にして円を描くように回しつつ徐々に粘土を押しひろげ、大まかに柱状部を形づくる。そして中空部を棒状工具でかきとるなどして、円錐状に成形する。その多くは内面を指でナデて調整している。こうしてできた柱状部に、台状があるいは手のなかで粘土紐をつぎながら裾部を成形したのち、内外面を調整する。外面は箒磨き仕上げのためくわしく観察できないが、内面は壺の内面調整手法と同じく、接合面よりすこし上方から、端部まで一気に刷毛調整をほどこしていると考えられる。ついで端部付近をヨコナデして、調整をおえる。

つぎに坏部の成形にうつるのであるが、まず調整をおわった脚台部を正立させ、柱状部上端外面に粘土紐をつぎながら、一気に坏底部を成形し、内外面に刷毛調整をほどこす。なかには上述の方法によらず、(90)のように柱状部上端が凹面に剥離したものがあって、坏底部成形後柱状部と接合して製作したと考えられるものもある。また唐古・田能両遺跡には、タタキ技法を用いて整形するものもある。さて坏底部は調整完了後、すこし時間をおいて端部上面に粘土紐を積みあげ、口縁部を成形していく。この形式の高坏は、ほとんどこの方法をとっていると考えられる。そして口縁部をヨコナデして調整したのち、全体に箒磨きをほどこして仕上げるわけであるが、坏部と脚部の箒磨きの先後関係は、明確にはつかめなかった。最後に脚部に穿孔し、製作は完了する。なお(84)や(131)のように、刻目文などを施文するものが若干ある。

第V様式の高坏Aの形式変化は、口縁部の外反する度合いから考えられてきたが、ここでは柱状部の成形技法の変化という観点から、それを考えてみたい。

西ノ辻I地点出土高坏の柱状部内面は、箒削りがほどこされておらず、ナデ調整痕がある。これを前記の手法——柱状部を粘土塊から一気に成形する——による最古相と考えたい。形態的には中期のそれとほとんど変わらない。

第V様式前半の高坏Aの柱状部は、大部分が西ノ辻I式と同様の形態をとっているが、中頃になると、柱状部が円柱状のものや中実のものが多くなる。このことは、柱状部成形に際して簡略化がなされ、円柱状粘土塊に対する刺突具の挿入深度が浅くなったり、また深くても中空部をひろげず、余分な粘土のかきとりやナデ調整が省略されるようになったためと考えられる。その結果、柱状部から裾部へなだらかに移行していた形態は、柱状部下端で屈折し、裾部が大

きく開くことになる。

そして、第V様式後半にはいると、円柱部に刺突せず、下方へひろがる裾部をとりつけただけの脚部が多くなる。口縁部や裾部に段や凸帯を有する「飾られた高環」のなかで、第V様式後半に比定されるものは、ほとんど柱状部が中実している。この土器群の資料では高環AをA<sub>1</sub>とA<sub>2</sub>に大別したが、脚部についてのみみると、A<sub>1</sub>が7点、A<sub>2</sub>が12点ある。

以上、第V様式の高環脚部の変化の大筋をおってみたが、脚部の形態および手法は漸次変化していくものと思われる。中期の高環にも柱状部が中実したものが存在するし、後期にもしばり目を有するものがある。今後、遺跡ごとの統計的数値の累積が、肝要と思われる。

器台は、A・Bともに同様の成形手法と考えられる。すなわち、粘土紐を径7cm前後、高さ4~5cmの円筒状にまず積みあげ、さらに徐々に外反させつつ粘土紐をまきあげて一気に裾部を成形する(111)。ついで内外面とも刷毛調整をほどこしたのち、端部付近をヨコナデする。こうして下半部の整形をおえ、端部がある程度乾燥した段階で正立させ、上半部を下半部と同じく粘土紐をまきあげて成形している。接合部の調整は、内外面とも接合面のやや下方から上方へむかってナデている。そして受皿部の内外面に刷毛調整をほどこし、仕上げにはいるわけであるが、AとBでは、その手法が若干異なる。

器台Aは、口縁端部下方に粘土紐を貼付してからヨコナデし、最後に外面全面および受皿部内面にていねいな箒磨きをほどこして仕上げている。(103)は、脚部のみの資料であるが、箒磨きはほどこされていないものの、器台Bに比して、ていねいな刷毛調整をほどこしている。

器台Bは、口縁部付近をヨコナデしたのち、受皿部内面に箒磨きをほどこして、仕上げている。

施文は、器台Aでは他遺跡の出土例からして、施文a手法を基本とすると考えられるが、(103)は四線文のみをほどこす例である。器台Bは、施文b手法を基本とすると考えられる。口縁端部に刻目文(箒原体ないし刷毛原体)を、裾部に羽状文(刷毛原体)をめぐらすもの(109)がある。穿孔は外側からおこなわれており、上下2段になされているものが多い。なお文様との先後関係は不明である。

有孔鉢は、底部の形態から2類に分けたが、製作技法のうえからも、分けて考えられる。

有孔鉢Aは、鉢Cの底部に穿孔したものと考えられ、形態的に「有孔」鉢そのものである。(112)は内外面とも刷毛調整をていねいにほどこしており、タタキ目は認められない。

有孔鉢Bはタタキ技法によって製作されているが、底部の成形が鉢Cや有孔鉢Aと異なる。すなわち、直径2~3cm、高さ2cm前後の小さい粘土板を底部とし、それに粘土紐を巻きあげ

て体部を成形している。このことは、土器製作の当初から、穿孔を考慮して底部を厚くつくっていると考えられる。そして内面調整後、土器を手にもって内側から穿孔する。その際、内面の孔周縁にわずかに盛りあがる粘土を、ていねいに指ナデして、水切りをよくしている。底径が極端に小さいため、単独では正立しがたいもので、より機能本位に製作されていると考える。しかし実際の使用においては、有孔鉢Aとの間にそれほど明確な差はなかったであろう。そこで(115)の底部を詳細にみると、直径4~5mmの棒状のものを内側から数回突き刷し、直径13mmの孔を穿っている。ところが、孔径がこの土器の機能にそぐわないためか、底部周縁の粘土を指で中央へおくり、孔径を6mm×12mmにせばめていることがわかる。その結果、底部外面の形状は大きくくずれて棱を失い、半球状を呈している。このことは、この器種の機能が、孔径に深い関わりをもっており、土器が正立するか否かは、さほど重要でないと推測できる。

現在知られているこの種の有孔鉢は、ほとんどが器高15cm以内の小形品であって、これらを瓶として日常調理器に使用するには容量が小さく、不合理と思われる。また外面に煤の付着した例もありきかない。そこで、もう1つの可能性として、漏斗としての機能が考えられないであろうか。

第V様式の土器は、製作技法の転換から小形化の傾向が進み、貯蔵用と考えられる大形壺や大形甕は極端に少なくなる。さらに水差形土器がほとんど姿を消し、かわって長頸甕<sup>⑨</sup>が出現するなど、いくつかの器種に入れ替わりがみられる。これらの現象は、住居内における食生活の形態が、以前と大きく変化したことによると思われ、「有孔鉢」はその変化に対応して、長頸甕とともに出現したものと考えられる。

甕は、内外面の調整手法から、体部を2段階に分けて成形しているものと、3段階に分けて成形していると考えられるものがある。甕Aの大部分が前者、甕B・Eの大部分が後者の技法で製作されている。代表的な数例をあげて、製作技法を観察してみよう。

(151)は頻繁に使用されたのか、下半が赤く焼けて剥離しているが、製作技法がよくわかる資料である。まず粘土紐を巻きあげて最大腹径直下まで成形したのち、外面はタタキ整形、内面はナデ調整をほどこす。底部の成形は、内面下半の剥離が激しいため不明であるが、他の例では内面調整と底部内面の調整が同時にこなされていることから、下半部の成形直後になされたと考えられる。そして下半部がなかば乾燥した時点で、再び粘土紐を頸部まで巻きあげ、内面を軽くナデて粘土紐の継目を調整してから、外面をタタキ整形する。ついで接合部内外面にナデ調整をほどこし、体部の整形を完了している。

口縁部の成形は幅数cmの粘土紐を頸部内面の上端より1~2cm下方に巻きつけ、頸部で「く」の字形に外反させて、短くたちあがらせる。そしてこの粘土紐をよりどころにして、外側に粘

土紐を巻きつけて斜め上方に外反させ、頸部外面の接合部に刷毛調整をほどこしたのち、口縁部内外面をヨコナデして仕上げている。

また壺Aのなかには、(150)のように底裏に木葉痕を有するものがある。これはおそらく体部下半の整形がおわって、まだ粘土が乾燥しない間に正立させて置く際に、木葉を敷いたためと思われる。この木葉は、体部上半部をタタキ整形する段階で、とくに有用であったと考える。すなわち、左手で土器を内側から支えながら、右手にタタキ板をもって整形するのであろうが、右上から左下へ規則的に一定の範囲をタタキおえると、土器を左回転して同様の作業を数回くりかえたと考えられる。この数回にわたる回転運動を安易ならしむるために木葉を敷いた、と考えている。<sup>⑨</sup>もちろん、ヨコナデ仕上げの段階でも、同様の役割を果したことは充分考えられる。

つぎに(156)の調整手法についてみてみよう。ほかの壺Aと同じく、2段階成形技法で成形されていると思われるが、内面調整は箒削り手法を用いている。内面の箒削り手法は、三島地方でも、芝谷遺跡や東奈良遺跡などの、第IV様式末から第V様式初頭の土器に散見できるものであるが、第V様式中頃の例としては、稀なものである。しかし、この時期の箒削り手法は、中期のそれと同様、器表面調整に用いられる箒削り調整手法と考えられる。そこには、まだ器壁を削って薄くしようとする意識は認められず、(156)の器壁も5mmを測り、ほかの土器の器壁と比べても差はない。また底部外面に浅いタキ目が認められる。

壺Bは、全形を復元できるものがないため、製作技法を詳しくは観察できないが、基本的に壺Aと同技法で成形していると考えられる。ただ成形技術が稚拙なため、接合部がいびつなっていたり、刷毛で調整しているのが多い。器壁が厚いことも、成形技術の未熟さによるのかもしれない。また、接合部が胴部上半にあり、壺Aとの違いをみせている。おそらく、胴部下半にもう1つの接合面があって、3段階成形技法によると思われるが明確な資料を欠く。

口縁部とりつけ方法も壺Aと異なり、(159・162・164)などをみると、口縁部外面下半にタタキ目が認められる。これは、壺Aの口縁部とりつけ方法を簡略化したものと考えられ、体部上縁を斜め上方へおりまげて、口縁部となるべき粘土紐を巻きつけるよりどころとしているといえよう。そして外側から粘土紐を捕うように巻きつけ、ヨコナデ調整して口縁部を仕上げている。製作技法からみると、全体的に壺Bは壺Aよりも、合理的に製作されているといえよう。

壺C(167)は断片資料のため製作技法は不明である。ただ口縁部に関しては、中位が厚くなっているのは、壺Bと同様のとりつけ方法によるためと思われる。

壺D(168)は、先述のように形態的には中期の様相を示しているが、技法的には第V様式の特徴を示しており、この土器群の資料として考えた。すなわち、胎土はわずかに細かい砂粒を含み、中期のそれとは区別されること、口縁部内面に刷毛調整が認められないこと、などがあ

げられる。反面、体部外面の縱方向の箇磨きがほどこされており、この時期のものとしては特異なあり方を示している。

壺Eは、(104) の資料から3段階に分けて成形していると考えられる。外面は、タタキ整形後、刷毛調整をていねいにほどこしているため、接合痕は認められない。内面は、第1段階(体部下位)はナデ調整、第2段階(体部中位)は接合面直下から上方へ刷毛調整、第3段階(体部上位)はやはり接合面直下からナデ調整をほどこしている。これら内外面の調整は、変形土器としては、ていねいにほどこされている。

口縁部のとりつけは、壺Aと同方法であり、頸部外面の接合面に刷毛調整やヨコナデ調整をほどこしている。口縁部上端のたちあがり部は、粘土紐を外側からまきつけて成形するものが1例(172)検証できた。

また、壺Eは先述のように、形態的に近江地方の土器との関連性が強く認められるもので、文様構成も極めて似かよっている。そこで注意されることは、口縁部のたちあがり部の列点文の原体に、櫛(175・176・178・181)と刷毛(177・180)の2種あることである。そして櫛描き列点文を有する壺は、必ずといってよいほど、肩部に櫛描き直線文を有している。このことは、近江・山城地方の出土例からもうなづけるところであって、壺Eに関する限り、口縁部の櫛描き列点文と肩部の櫛描き直線文のパラレルな関係は、1つのパターンとして定着していたと考えられる。

ところが、(180)のように刷毛原体による列点文を有するものは、肩部に同様の列点文をほどこすだけであって、櫛描き直線文は認められない。ついには(174)のように、刷毛原体による施文もおこなわなくなると考えられる。このことは、第V様式の変形土器にまったく施文しない三島地方において、近江系壺が流入してから徐々に三島化していくプロセスをあらわしているのか、あるいは近江・山城地方をも含めた、壺E全般にいえることなのか、他遺跡の資料の検討が待たれる。ただこれを施文手法の観点からみれば、(178)はa手法、(180)はb手法とことができ、a手法からb手法への変化がたどれる。

壺底部はそのほとんどが、タタキ目をそのまま残しているが、刷毛調整をほどこしたもののが3例みられた。底部外面の仕上げ調整は、大部分がナデ調整と思われるが、なかには刷毛調整(202)や鉢削り調整(190・191)、指ナデ調整(187)などをほどこしたものがある。また、未調整のままで木葉痕を有するもの(203)もいくつかある。

以上、周溝墓A 5-2土器群の土器をみてきたが、全般的に淡褐色から灰褐色の明るい色調を呈し、安溝遺跡の弥生式土器として通有のものである。胎土は、細砂粒を均等に含み、密度の高い良質のものが多く、焼成も良好である。また、北摂の土器を特徴づける、赤褐色のクサ

り穂は、河内産の土器を除いたすべての土器に含まれていた。しかし、個体別には含有量の差が相当あり、器表面 5 cm に数個しか認められないものから、100 個を超えるものまである。器種による含有量の偏りは認められず、胎土に基本的な差はない。おそらくこのクサリ穂含有量の差は、粘土の採取地の別に大きく関係していると考えられる。全般に、紅葉山遺跡の弥生式土器や新池窯の埴輪など、山手の粘土によってつくられたと考えられるものは、含有量が高い傾向にある。

なお、河内産の土器が 2 片検出されている。壺 N の口縁部 (32) と、甕 A の口縁部 (132) がそれで、全個体数の 1% にも満たないものである。

つぎに、この土器群の編年的位置づけをおこなっていきたい。土器観察表（表 4）でも明らかのように、この土器群の形式細別の方法として、まず器種別に分けたのち、それらの形態を中心に手法・施文の別から、一連的に A・B・C 等の記号を付して、形式を設定した。したがって、従来のように、長頸壺とか短頸壺のような呼称はとらなかった。一見煩はしく思われるかもしれないが、より客観的な視点から分類を試みた結果である。たとえば、短頸壺といつても、単に長頸壺の口縁部の短いものをさすのか、無頸壺に短くたちあがる口縁部を有するものをさすのか、判然としない。また、これらの形式を様式設定のなかへ組み込んでいく過程で、その形式が時間的に正の方向へ進むのか、負の方向へたどるのかという場合などに、單一形式名で追うことができるし、その時間的な幅も、同様に單一形式名でとらえられる。ただ、細別した形式を、地域的にどこまで拡大して考えるのかが、問題となる。今日のように、弥生式土器の研究が、地域性を重視するようになってくると、各地域ごとのものさし（編年基準）を設ける必要が出てくる。そして、このものさしと「弥生式土器集成図」のような大きなものさしとを対比することによって全体像も考えられる。

ここでは、周溝墓 A 5-2 土器群の資料を、三島地方のものさしの形式設定の基準とした。そのため形式名も、現在のところ三島地方に地域を限り、用いることとする。<sup>①</sup>

表 1 は、周溝墓 A 5-2 土器群の整理集計表である。壺と甕は、それぞれの底部破片数が、各形式の口縁部数合計より下回るため、二器種の個体総数は、底部破片数をいちおう除外して計算した。また、形式設定においては、口縁部および部の形態・手法を中心に分類したので、底部を除外しても、その構成に変化はないと考える。

つぎに各器種のなかで、個体数の多い形式をとりあげてみることにする。

壺のなかで高い比率を示すのは、壺 A (7.5%)、壺 B (30%)、壺 N (21%)、壺 O (19%) である。

壺 A は、形態的に西ノ辻 I 式の壺の系統をひく、第 V 様式の古い段階で多くみられるもので



のは、横津の第V様式の一括資料のなかにあって異例なことと考えられる。しかも河内産の土器は1片(32)だけで、その他の資料はすべて、胎上からみて三島産と考えられるものである。このことは、有孔鉢の製作技法のところで述べたように、横津においても、壺Nが独自の機能をもつものとして、存在した可能性が強い。ただ畿内南部と比べると、横津での出土例は少なく、壺Nの機能を他形式の壺で果たしていたかもしれない。

壺Pは、東海系と考えられるもので、脚台部片まで含めれば、壺のなかで2割弱を占め、畿内の他地域と比べて、大きく上回っている。ただ、脚台部の破片のなかには、台付壺脚台が含まれていないとはいえないが、整理中に台付壺と思われる破片が検出されなかったところから、その可能性はないと考える。横津における類似品としては、田能遺跡の資料があげられる。<sup>⑩</sup> なお、壺P独自では、畿内における資料の偏りから、現時点では形式変化を追うことはできない。そのほか、壺Jは、形態的に第IV様式の系譜をひくと考えられる。

鉢のなかで、鉢Bとしたものは、西ノ辻I式以来第V様式の全期間を通じてみられ、比較的変化の少ない形式である。これに対し、鉢Aは第V様式後半になると、若干の変化が認められる。たとえば、この土器群では、調整手法がていねいで大形品が多いのに、第V様式後半になると、小形化し、タタキ目を残すものが多くみられる。また鉢Dのうち、(69)は近江・東海地方の影響の強い鉢であり、鉢Dのなかでは、口径に対する器高の割合が高いところから、鉢Dとしては最古相と考えられる。

高环は、製作技法のところでも述べたように、脚台部の変化過程から、高环A<sub>1</sub>が形式的に古く、高环A<sub>2</sub>が新しく考えられ、その共存比はほぼ1:1である。西ノ辻I・D・F地点、唐古70号地点の高环は脚部が高く、形的には高环A<sub>1</sub>に属すと考えられ、高环A<sub>2</sub>の脚部を有するものはない。池上遺跡J-3号井戸出土の高环は、同じくA<sub>2</sub>に類似している。<sup>⑨</sup>

なお、この土器群の資料では、壺部が碗状を呈するものや、壺部や脚部に段や凸帯を有するものは、欠落している。

器台Aは、口縁端部を拡張して、凹線文をほどこすものの、唐古45号上層式や、紅葉山3号住居址出土例にまで遺存する形態であって、維続時間が長く、しいて古く考える必要はない。器台Bは、口縁端部を拡張せず、西ノ辻F地点出土の器台よりは、後出と考えられる。<sup>⑩</sup>

有孔鉢は、A・B両形式ともに西ノ辻I式以来おこなわれているが、有孔鉢Aに関しては、時期が下がるにつれて、鉢形土器A群と同様、調整手法が難になる。すなわち、(112)のように外面をいねいに刷毛調整することがなくなり、タタキ目を残すものが多くなる。

壺は、壺Aが50%強、壺Bが20%弱、壺Eが26%の構成比率を示す。壺A<sub>1</sub>は、西ノ辻I・E地点、唐古70号地点など、第V様式前半に主としてみられ、一部は後半にも認められる。その調整手法は、古い段階ほどていねいで、西ノ辻I式や唐古70号地点出土例では、全面に刷毛調

縫をはどこしている。それに比べ、時期が下るにつれて、刷毛調整をはどこす範囲が、次第に狭くなる傾向にある。この土器群の縫A<sub>1</sub>は、刷毛調整をはどこしたものとそうでないものが、ほぼ同数を示している。(133)などは、口縁部の形態から、古く考えられる。

縫A<sub>2</sub>は、西ノ辻I式に類似は認められないものの、それと同時期と考えられる東奈良遺跡F-3区溝3出土の一括資料中に、端部を丸くおさめたものがみられることから、縫A<sub>1</sub>と併行しておこなわれたと考えられる。器面調整は、やはり古い段階のものは、ていねいになされている。この土器群の縫A<sub>2</sub>の刷毛調整は、部分的にはどこされているにすぎない。

総じて、第V様式の變形土器の形態・製作技法は、漸次的に変化していくと考えられる。口径に対する腹径の割合も、徐々に大きくなるものと理解し、縫で時期を判断するには、できるだけ多くの資料を統計的に処理しなければならないと考える。この土器群の場合、口径が腹径をしのぐものは数点で、大部分は7割~9割の間におさまる。

また、口縁端部を上方へつまみあげて、わずかな段をつくるように調整したものは、縫Aには認められず、形式的にはやや後出の縫になると考えられる。

縫Bは、口縁部の形態および成形技法から、形式的に縫Aに連なるものと考えられる。

縫Eのうち、(174)は、上腹部の張った丈高の形態を呈するところから、そのなかでも比較的古く考えられる。また、施文のところで述べた形式変化を良しとするなら、その他の大部分の縫Eも、同一型式として取り扱うことが可能である。ただ(173)は、体部が球形に近くなり、形式的に新しい要素を有している。円勝寺遺跡のA類~B類の資料と類似していると思われるが、鉢D(69)の共伴を重視して、円勝寺遺跡のA類と併行すると考えられる。

また、この土器群の性格については、完存ないし、それに近い土器がほとんどなく、いづれも、欠損部の多いところから破損した土器の捨て場と考えられる。例えば、壺(23・26)、高杯(96・100・101)、縫(14)などは、2~4mも離れた土器片が接合しているところから、投棄した時点で、破碎したのではなく、すでに、こわれた土器を、投棄したと推定する。そして、この土器群が、周溝墓の辺を、その土器捨場に利用していることから、当時まだ、周溝墓の溝は、いくぶんか回んでいたと考えられる。いずれにしても、この時期において、第II様式の周溝墓の祭祀は、既に廃絶していたことは確実である。

#### 糊痕のついた土器 (表2)

糊痕は、壺、器台、有孔鉢、縫等の器種にあり、全部で7例数えられた。I・II様式の土器についている糊痕は、底部外面についているのが大部分であるが、この土器群の例では、ほとんどが、体部上半から口縁部にかけて見られる。しかも、土器の内面から検出されたものが2例あり、単に土器製作作業中に付いたとは思われず、おそらく、胎土中に混入していたものと

	器種	寸法	備考	土器番号
1	壺 B <sub>2</sub>	3.0mm×6.0mm	口縁部内面	13
2	器台 A	6.2mm×1.8mm	脚部内面	111
3	有孔鉢 B	6.5mm×3.5mm	胴上部外面	115
4	有孔鉢 B	6.5mm×3.5mm	底裏外面	118
5	甕	5.0mm×2.5mm	肩部外面	151
6	甕	6.5mm×2.5mm	肩部外面	
7	甕	7.0mm×3.5mm	胴部外面	

表2 周溝墓A5-2土器群出土の粗痕付土器一覧表  
て右方向へすばまるようにのびている。文様の左下以下については、土器が欠損しており、意匠は不明だが、何か動物の足を表現しているようにもみえる。池上遺跡のJ-3号井戸出土の長頸甕（3-6）のものとよく似ている。

考えられる。

#### 範描記号文を有する土器（図版第54b）

記号文は、壺（15）と壺（23）の2個体にみとめられた。（15）の記号文は、肩部にあり、長さ1.5cm程度の範描直線を概に4本ほどこしている。（23）は、胴部中位のやや上方にあり、範描沈線2条で、左下から右上へ弧を描くようにカーブして右方向へすばまるようにのびている。文様の左下以下については、土器が欠損しており、意匠は不明だが、何か動物の足を表現しているようにもみえる。池上遺跡のJ-3号井戸出土の長頸甕（3-6）のものとよく似ている。

- 注① 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡」地点の土器 PL. 12-1 「弥生式土器集成」Ⅰ 昭和33年
- ② 中谷雅治他「鶴田遺跡」図版5-12 「国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書」Ⅱ 滋賀県教育委員会 昭和48年
- ③ 村川行弘・石野博信「会下山遺跡」U塙括址「芦屋市文化財調査報告」第3集 芦屋市教育委員会 昭和39年
- ④ 小林行雄・佐原真「紫雲出」鈴間町教育委員会 昭和39年
- ⑤ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号 昭和49年
- ⑥ ⑤に同じ
- ⑦ 息懸という本来的な意味を加味しながら、ここでは、連続性のある文様（帯）の描繪として考えている。それも、第V様式土器の施文法に限って、使用したいと思う。というのは、中期の施文は、土器を動かして、おこなうのに対し、後期のそれは施文具（原体）を移動させて、おこなうため、1回の動作（施文作業）によって、文様帯を完結しないと考えられるからである。
- ⑧ 水差形土器の機能を果すものと考えている。
- ⑨ この意味においては、第Ⅱ様式と同様の役割を果している。
- ⑩ 藤沢真依氏の御教示による。
- ⑪ ただし、他地域の土器でも、三島地方の土器と比較する場合などは、この形式名にしたがう。
- ⑫ 村川行弘他「田能遺跡概報」30図-542 「尼崎市文化財調査報告書」5 尼崎市田能遺跡発掘調査委員会・尼崎市教育委員会 昭和42年

- ⑬ ①と同じ PL. 12, 13B
- ⑭ 小林行雄・末永雅雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』16 昭和18年
- ⑮ 「池上・四ツ池遺跡」16(月報) 第2阪和道内遺跡調査会 昭和46年
- ⑯ ⑪と同じ 29図-520
- ⑰ ⑫と同じ
- ⑱ ⑬と同じ
- ⑲ ④と同じ PL. 13B
- ㉑ 藤沢真依氏の御教示による。
- ㉒ 「円勝寺の発掘調査」(上) (仏教藝術82号) 円勝寺発掘調査団 昭和46年
- ㉓ ㉔と同じ

## 2. 土壙 3 出土の土器 (第18図、図版第36、表5)

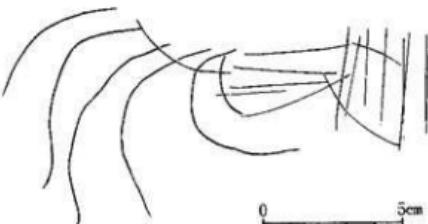
周溝墓B2北西隅の溝内土壙から検出された一括資料で、壺2点、甕1点がみとめられた。壺(204)は、A類に属するもので、口縁端部に横描波状文とS字状の貼付文がある。形態的な特徴は、胴部中位が強く突出していることである。体部の製作技法は、内外面の刷毛調整痕から推して、3段階成形と考えられる。なお、肩部上面に意匠不明の施描き文を有する。

壺(205)は、E類に属するもので、直立した頸部に斜め上方へ外反する口縁部がとりつく。(204)と同様、

胴部中位は強く張っている。体部の製作技法も、内外面の刷毛調整痕から推して、3段階成形と考えられる。

甕(206)は、B<sub>3</sub>類に属する。体部タタキ整形後、上縁を外方へ折りまげて、口縁部を成形している。

3個体とも、胎土に径3mm前後の小石粒を多く含んでいる。この小石粒は、意識的に混入された繋ぎ材と考えられる。体部外面のていねいな刷毛目は、タタキ目を消すためのものと考えられる。いずれにしても、壺Aの施描きをほどこさず、手法的に簡略化がみられるのは否めない。時期的には、先のA5—2周溝内の土器群より後出で、唐古45号下層式併行と考えられる。



挿図第12 土壙 3 出土壺A (204) の範描文

### 3. 第V様式土器の型式細分について

周溝墓A 5-2 土器群の編年的位置は、先でみたように、第V様式中頃にその時期を求める。そこでこの土器型式が、第V様式のなかで相対的にどう位置づけられるのか、また第V様式の型式細分について、みていきたい。畿内第V様式の設定は、小林行雄氏によって、最初、穗積式<sup>①</sup>とよばれたもので、その後、同氏によって、畿内第V様式として位置づけられている。それから昭和18年の唐古遺跡の報告書の中では、第45号地点竪穴内の土器と、その上層の土器を区別し、上層の土器を、第1亜式として分類し、第V様式の細分の可能性を示した。<sup>②</sup>そして、それより以前の昭和16年に調査した、枚岡市（現東大阪市）西ノ辻遺跡の資料によってその形式細分は具体化され、I式・E式・D式の3型式に大きく分類された。<sup>③</sup>しかし、その時点では、第1亜式との関係は明確に示されなかった。昭和38年になって、坪井清足氏は、前記の西ノ辻各型式と、唐古45号上層式（第1亜式）をもって、第V様式を4型式に分類された。これは、その後の第V様式土器編年の根幹となった。また、佐原真氏は、「弥生式土器集成」（本編）において、唐古45号下層式を、1型式として、復活させ、5型式に分けられた。<sup>④</sup>さらに昭和48年石野博信氏は、後期の高地性遺跡との関連から、第V様式を4段階に分けて、実年代を想定されたが、具体的な型式名は呈示されなかった。<sup>⑤</sup>これらの中にあって、都出比呂志氏は、東大阪市北鳥池遺跡下層の一括資料を第V様式の最終型式として、とりあげ、後期を西ノ辻I式・西ノ辻E式（D式）・北鳥池下層式と大きく3型式に分け、さらに北鳥池下層式に先行するものとして、上六万寺遺跡の資料が考えられている。<sup>⑥</sup>以上第V様式の型式細分を順におって、概括的に述べたが、ここでは、これらの成果をふまえて、以下の記述をすすめていくことにする。

西ノ辻I地点出土土器のなかに、鉢Cや有孔鉢が含まれていることは、明らかに土器製作技法の転換を示すもので、それまでのいわゆる回転台技法からの脱却を表わしていると考えられる。すなわち、タタキ技法を仕上げ調整の段階に用いていたものを、整形技法に積極的に取り入れた結果、新しく生まれた型式として認められる。また、同型式の菱形土器は、内外面の調整手法の観察から、3段階に分けて成形していると考えられ、タタキ目を確認したという報告<sup>⑦</sup>もある。

このように、西ノ辻I式を構成する器種のうち、一部を除いては、ほとんどにタタキ技法が整形技法として用いられ、それまでと比べて大きく転換している。そしてこの西ノ辻I式における転換以後、第V様式末まで一貫して、タタキ技法はより合理的に土器製作に用いられるようになつたと考えられる。たとえば甕は、従来いわれているように、時期が下るにつれて器表面の刷毛調整の範囲がせばまることや、タタキ技法を巧みに取り入れることによって、いわゆる「連続ラセンタタキ目」を有する形態に移行する過程や、口縁部の成形方法の簡略化など、漸次変化していくことがうかがえる。また、鉢形土器も調整技法の簡略化がたどれるし、高杯

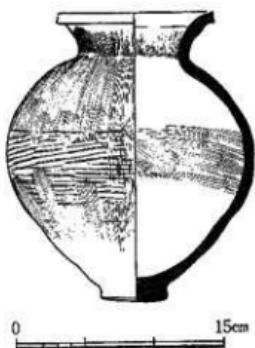
形土器も脚部をみると、製作技法が漸次変化していったと考えられる。

西ノ辻I式の次の段階になると、広口の壺に、タタキ技法を用いた壺Bが出現すると考えている。この壺Bを含んだ一括資料としては、池上遺跡J-2号井戸や安満遺跡(北-9地区)の井戸3出土の土器(挿図第13)が、考えられる。それらの壺Bは、イチヂク形を呈し、今回報告の周溝内土器群の壺Bに比して調整がていねいで、やや先行するものと思われる。タタキ技法は、広口の壺にも用いられ、そこにはあらゆる器種にタタキ整形技法をおよばそうとする意図がうかがえる。この型式の併行資料として、唐古遺跡70号地点・西ノ辻遺跡E地点出土土器があげられよう。

今回報告の土器群は、上記2型式の次の段階に位置づけられると考える。各形式の製作技法などは、先述したのでここでは省略するが、全般的に、先の型式からの漸次的変化過程のなかにあると思われるもの【壺A-G・K・M・O、鉢C、器台A・B、有孔鉢A・B、壺A<sub>2</sub>】や、同じ器種のなかでもやや古い様相を示すもの【壺J・L、鉢A・B(62を除く)、高環A<sub>1</sub>、壺A<sub>1</sub>】と、新しい様相を示すもの【鉢Bの62-D、高環A<sub>2</sub>、壺B】などがある。併行資料としては、池上遺跡J-3号井戸の一括資料が考えられる。

そして、次の段階は、田能遺跡6Y-2溝の一括資料を基準資料とする。まず新しい器種として、二重口縁を有する壺(ここでは壺Qとしておく)がみだされる。また、壺Bと考えられるものは、胴部中位が強く張り出しているのが、それまでの形態と大きく違う点としてあげられる。その他の器種は、周溝墓A5-2土器群と似かよった形態・製作技法がみられる。ただ、田能遺跡の資料では、壺A<sub>2</sub>がみられないが、鉢Aの口縁部形態にその手法がみられるから、その存在は否定できない。この時期の併行資料としては、唐古45号下層式・安満遺跡土壙3(今回報告)出土土器があげられる。唐古45号下層式の壺Qは、田能遺跡のそれに比して、胴部の張り出しが強く、形式的には、やや後出と考えられる。なお、この時期の壺Qは、口縁部に文様をほどこすことはほとんどないといつてよい。また、周溝墓A5-2上土器群の壺Bの口縁部成形方法をより簡略化して、体部上端を外方へ折り上げてヨコナデしただけの口縁部を有する壺B<sub>2</sub>がみだされるのもこの段階からである。

その次の段階は、唐古45号上層式を基準型式とするもので、三島地方においては、紅葉山遺跡3号住居跡の一括資料がある。まず、高環Aの環部の高さに対する口縁部の高さの割合が大きくなることが、形態上の変化として指摘できる。壺Qは、紅葉山遺跡3号住居跡の例をみると、



挿図第13 北-9地区  
井戸3出土の壺B<sub>2</sub>

胴部が強く張り出している。また、文様がほどこされるようになるのも、この段階からである。さらに、甕や壺の一部に、口縁端部下方を面取りする手法があらわれるとともに、鉢・高杯・甕などの器種の小型化がめだつ。その他の併行型式としては、上六万寺遺跡・中ノ田遺跡および渚院遺跡の資料があるが、上六万寺・中ノ田遺跡の鉢や高杯にはやや先行する形態が認められる。

次の段階には、北鳥池遺跡の資料を基準型式とし、併行するものとしては、船橋遺跡第9トレンチの資料があり、三島地方では、紅葉山遺跡17号住居址の資料がある。この段階は連続ラセンタタキ目技法による甕が出現する時期で、器形の大小を問わず、大部分が同技法を用いて成形され、器形も極端に球形を呈するようになる。

連続ラセンタタキ目技法は、それまでの2段階ないし3段階成形技法と異なり、体部を一気に叩いてつくりあげる点が特徴的である。すなわち、成形第1段階として、鉢形の逆円錐台をつくるのはそれまでの技法と同様だが、器高に対する割合が低く、周溝甕A 5-2土器群の2段階成形の甕Aなどの逆円錐台が、最大腹径直下まであるのと比べると大きな差がある。比較的大きな甕を比べると、特に明確である。この逆円錐台が小さくなるのは、鉢形土器などの器種が小型化するのとパラレルな関係にあると考えられる。

いま少し詳しくいうと、第1段階成形後、ふたたび粘土紐巻き上げをおこない、おおよその形をつくってから、粘土の軟かいうちに一気に叩いて体部をつくりあげようとしている。その際に、軟かい粘土で器壁を保たせるためには、強く叩き締めねばならず、結果的に粘土がのびて体部中位がふくらむと同時に、器壁が薄くなる傾向を示すことになる。現に北鳥池下層式や、その併行型式と考えられる變形土器に残るタタキ目は全般的に深く、強く叩いていることがわかる。極端にいえば、タタキをほどこす前と後では、その形態は異なっていたかもしれない。この意味では、タタキ技法は単なる整形技法の1つから、成形技法に転化したいということができる。その後、庄内式から布留式にかけて、變形土器製作技法は加速度的に変化していくと考えられる。

そしてこのことは、この時期における連続ラセンタタキ目技法の出現を、製作技法の簡略化の方向のなかで生みだされたものとして、理解することもできる。つまり段階成形技法では、ある程度粘土が乾燥していなければ、上に粘土紐を巻きあげてタタキ整形できないのに対し、連続ラセンタタキ目技法では、成形第1段階終了後一気に頭部までつくりあげることができるのである。そして、この技法が中河内地方でとくに発達したのは、生駒山麓から河内平野に分布する雲母を多量に含む土壤による腰の強い胎土を用いた結果と考えられる。いいかえれば、この河内の胎土こそ、連続ラセンタタキ目技法を生み出しうる要素が内在していたと思われるのである。ひいては、庄内式變形土器の出自もそれに發するのであろう。またこの時期の甕形土器

をみると、腹部の張り出しが弱くなり、再び丸みを帯びることが認められるところから、壺にも、壺と同様連続ラセンタキ目技法が用いられたと考えるのは早計であろうか。

以上、第V様式を製作技法の変化過程から、6型式に分けて考えてみた。セット関係の明確な資料が非常に限られているため、諸地域ごとの縦年作業は将来にまつところが大きいが、おおまかにいって、第V様式の型式変化は、タタキ技法の発達の展開としてとらえうると考える。西ノ辻I式の段階で、はじめて整形技法として取り入れられたタタキ技法は、北島池式の段階において成形技法に転化をとげた。この間、(1)すべての器種にタタキ技法をおよぼそうとする努力は、同時に、(2)製作技法の簡略化の傾向を生んだ。<sup>◎</sup> いまこれらをまとめて、第V様式土器の志向性とおぼう。(1)は、壺Bや鉢Cなどの出現として、(2)は高坏Aの脚部の変化や、壺の外面刷毛調整の簡略化および口縁部成形方法の簡略化、連続ラセンタタキ目技法の出現などとして、あらわれている。

ところが器種構成の面では、必ずしも一貫しているとはいはず、1つの画期の存在が考えられる。第V様式初頭に、製作技法が転換して新しく生まれた壺N、鉢C、有孔鉢A・Bなどは第V様式末まで存続するが、壺A・J、鉢Aなど中期からその形態をたどれるものは、田能遺跡6Y地区の時期以降、ほとんどみられなくなる。また逆に、壺Qや手焙形土器は、この時期以降に出現すると推測される。現在のところ、田能遺跡の壺Qは、畿内における最古の二重口縁を有する壺であろう。<sup>◎</sup> また手焙形土器は、明瞭な伴出関係を指摘できる一括資料がないので、初現時期はいまひとつ判然としないが、紅葉山遺跡4号住居址の資料によって考えてみたい。<sup>◎</sup> この住居址で手焙形土器と共に伴しているものに、腹部の強く張った壺Eがある。これは、前述の安満遺跡9地区土壤3出土の壺E(205)と、形態・法量とともに酷似しており、胎土(多量の小石粒を含む)もまた似かよっていて、全く同一形式である。だから時期的には、唐古45号上層式併行と考えてよい。手焙形土器は器高18.5cmをはかり、平底の浅鉢に半ドーム状のおおいを取りつけた形態をなし、一体的に成形されている。恩智遺跡出土の手焙形土器は、鉢部に凸帯がほどこされているが、成形手法から同型式と考えられる。それに対し、船橋遺跡や上津島遺跡出土例では、その形態から推して、鉢部とおおい部とが明確に区別されており、おそらく鉢部成形後、おおい部をつくり出したと考えられる。形式的には、船橋・上津島例→紅葉山4号住居址・恩智例となるであろう。そこで前者を田能遺跡の資料に併行する型式としてとらえるなら、畿内における手焙形土器の初現とすることができるよう。

そのほか、これ以後盛んにおこなわれる器種として、高坏Cがあげられる。これは、先の2器種とともに、製作技法の変化過程からはとうてい出現しえないのであり、なんらかの要因のもとに成立した器種であろう。それが単に畿外からの新しい器種の移入によるものか、あるいは畿内における内的要因によるものか、現時点では明らかになしえない。

ただこれらの器種の出現が、社会的変動をいくぶんか反映したものであると考えるなら壺Qと手縫形土器の出現を画期として、第V様式を前半と後半に大きく分つことができよう。

- 注① 森本六爾・小林行雄「弥生式文化末期の研究」「考古学」第6巻第3号 昭和10年  
② 森本六爾・小林行雄「弥生式土器集成図録」正篇 東京考古学会学報第一冊 昭和14年  
③ 小林行雄・末永雅雄・藤岡謙次郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第16冊 昭和18年  
④ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡I地点の土器」「同、E・F・D・H地点の土器」「弥生式土器集成」資料編1 昭和33年  
⑤ 坪井清足「穂積式土器」「日本考古学辞典」昭和38年  
⑥ 佐原真「畿内地方」「弥生式土器集成」本編2 昭和43年  
⑦ 石野博信「3世紀の高城と水城」「古代学研究」68 昭和48年  
⑧ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」「考古学研究」第20巻第4号 昭和49年  
⑨ ④と同じ  
⑩ ⑧と同じ  
⑪ 「池上・四ツ池遺跡」16(月報) 第2版和国内遺跡調査会 昭和46年  
⑫ ③と同じ  
⑬ ④と同じ  
⑭ ⑩と同じ  
⑮ 村川行弘他「出能遺跡概報」「尼崎市文化財調査報告第5集」尼崎市教育委員会 昭和42年  
⑯ ⑰ ③と同じ  
⑱ 原口正三「紅葉山遺跡」「高槻市史」第6巻 高槻市役所 昭和48年  
⑲ 福永信雄・勝田邦夫「上六万寺遺跡」「東大阪市遺跡保護調査会年報I」東大阪市遺跡保護調査会 昭和50年  
⑳ 「尼崎市中ノ田遺跡」「尼崎市文化財調査報告第6集」尼崎市教育委員会 昭和46年  
㉑ 「諸院遺跡調査概要報告」「枚方市文化財調査報告第5集」枚方市教育委員会 昭和47年  
㉒ 「河内古代遺跡の研究」大阪府立花園高校地歴部 昭和45年  
㉓ 中西靖人・國乗和雄「大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴なう船橋遺跡試掘調査報告書」財團法人大阪府文化財センター 昭和51年3月  
㉔ ㉕ ⑯と同じ  
㉖ この簡略化とは、単に土器製作技術に関する問題であって、必ずしも量産を目的としたものでないことを付記しておく。横山浩一氏は、弥生土器と土師器を区別する視点として、装飾的手法の多少、仕上げ調整の程度、地方色の強弱をあげている。そして弥生土器の豊富な装飾と、ていねいな仕上げは、時間と労力をついやした結果であって、技術的水準は、それほど高くなく、

土師器の手早い仕上げは、職人的な熟練によって、時間と労力を節約した結果であるとしている。この意味においては、第V様式土器の製作技術の簡略化は、技術論的にみて、土師器への移行を強く示している。

横山浩一「手工業生産の発展—土師器と須恵器」『世界考古学大系』3（日本Ⅲ） 昭和34年

- ◎ この壺Qの出自については、森浩一・伊達宗泰両氏の説く多元論と、桐原健氏の説くようにその起源を上東式から酒津式にかけての、口縁にたかまりのある壺に求め、庄内期において、畿内で成立したとするものがある。ところがこの壺Qと口縁にたかまりのある壺とは、全く趣を異にするものである。後者の場合、口縁は内傾して立ち上り、文様帶を有するのを基本とし、体部は、上半のやや張った縱長のものであるのに、前者の場合、口縁は外反し、体部の形態も、基本的には壺Aのそれを踏襲していることがうかがえる。そこで、壺Qを壺Aの口縁形態が変化したものとして、とらえることができる。というのは、壺Aの仮口縁成形段階と壺Qの上縁部成形以前の段階とでは、形態的にその差異が認められないからである。また二重口縁成形の技法的な裏づけとしては、高杯Aの口縁部とつけ手法の採用が考えられ、初期の壺Qの上縁部に文様をほどこさないことや、高杯Aと壺Qの口縁外反角度がほぼ等しいことなどは、それを傍証するものであろう。こうした観点から、壺Qの出自を畿内に求め、一元的なものと理解している。

・伊達宗泰・森浩一「土器」『日本の考古学V』昭和41年

・桐原健「二重口縁をもつ土器の系譜と性格」『考古学研究』57 昭和43年

◎ ⑩と同じ

◎ 「弥生式土器集成 本編2」PL. 47-240 昭和43年

◎ ⑩と同じ PL. 47-239

◎ 江谷寛「手焙形土器の再検査」『古代学研究』59 昭和46年

#### 4. 受口状口縁土器とS字状口縁土器

畿内における近江系土器の分布

安満遺跡の樹溝墓A 5-2 土器群から、鉢D、壺Eなど受口状II縁を有し、櫛描きの直線文・列点文をほどこすことを特徴とする一群の土器が検出された。これらの特徴は、後述するように、近江地方の中期～後期の土器にしばしばみられるものである。そこで鉢D、壺E、および壺Fをも含めて、これらを近江系土器として括する。ここでは、同系土器の分布についてふれるとともに、関連する問題として、受口状口縁土器とS字状II縁土器の関係について、若干のべてみたい。なお、近江系土器としたのは、形態および技法が近江地方のそれと同様ではあるが、明らかに三島の粘土を胎土としており、この地域で製作されたと考えられるためである。この意味では、これらの土器を北摂の地域性を標榜したものとして理解することが可能で

ある。またさきには含めなかったが、鉢Bなども口縁部の形態からして、近江地方の影響のもとに生まれた形式ということができよう。

さて、近江系土器の分布は、山城地域（幣原遺跡・円勝寺遺跡・中久世遺跡・殿城遺跡・田辺天神山遺跡等）ではもちろんのこと、河内では猪窓遺跡・西ノ辻遺跡I地点・上六万寺遺跡、摂津では安満遺跡・郡家川西遺跡・古曾部遺跡・東奈良遺跡・垂水遺跡・田能遺跡・中ノ田遺跡・大和では平等坊・岩室遺跡などがあげられ、広く畿内各地におよんでいる。その多くは、淀川水系を中心とした、中河内以北にひろがっていることが指摘できる。これは、近江地方との地理的条件が大きく関与していると思われる。

#### S字状口縁土器の出自

S字状口縁土器については、大參義一氏の論考がある。それによると、S字状口縁變形土器は伊勢湾地域で発生した形式と考えられ、山中期（畿内第V様式前半）にその祖形となる要素が認められ、その後欠山期になってS字状口縁變形土器a類が出現していくと考えられている。その祖形としては、山中期の櫛描き直線文と列点文で飾られた受口状口縁を有する浅鉢形土器を指摘し、その文様・形態はS字状口縁變形土器に繼承されるとしている。

ところが、山中期以前の高藏期には、受口状口縁を有する浅鉢形土器は検出されず、同型式の他器種についても、受口状口縁をみいだすことはできない。このことは、受口状口縁を有する土器の形態変化を、伊勢湾地域のなかにおさめられないことを意味し、他地域からの影響を考えないわけにはいかない。

受口状口縁および櫛描き直線文・列点文を組みあわせた文様パターンを有する土器は、近江地方を中心に分布するものであり、少なくとも畿内第IV様式併行期の變形土器に確実に認められる（滋賀里遺跡11号方形周溝墓、鴨田遺跡溝1・大辰巳遺跡等）。さらに滋賀里遺跡の報告書によれば、先の變形土器は形式的に第II様式の壺Bの系譜をひくものとして、中期前半までたどれるとしている。そして第V様式になると、受口状口縁は近江地方の變形土器に一般的となり、その分布範囲は山城・摂津・河内などの畿内地方や、伊勢湾地域におよび、その並形式と考えられるものは、北陸地方や山陰地方東部にまで波及している。すなわち、受口状口縁變形土器（壺E）は、近江地方において中期後半に出現し、第IV様式末の古曾部遺跡・後期初頭西ノ辻I式の段階には淀川水系を南下し、山城・摂津・河内の各地域にもたらされている。その後、櫛描き文は無文化の方向をたどり、ついに庄内式併行期には、山城地域を除いてほとんどみられなくなる。一方、後期初頭に伊勢湾地域へ進出した受口状口縁土器は、山中期に台付變形土器に取り入れられ、S字状口縁土器の祖形ともいべき器種があらわれる。ついで欠山期から元屋敷期に、S字状口縁變形土器が出現すると考えられる。また一部の受口状口縁變形土器（壺E）は、伊勢湾地域を経由して伊賀から大和にまでおよんでいる。このように、各地に

波及した壺Eはそれぞれに発展・消滅していくのであるが、近江地域においては、第IV様式の壺E出現以来、庄内式併行期にいたるまで、若干の体部における形態上の変化は認められるものの、口縁部形態は大きく変化することなく踏襲されている。<sup>①</sup>このことから、受口状の口縁形態は単にS字状口縁の先行形態としてではなく、近江地方の土器の1類型として理解されよう。それは近江地方の壺・浅鉢など他の器種に、受口状口縁を有するものが多いことからも、首肯されると考える。S字状口縁が壺形土器に限られるのと対称的である。

畿内における古式のS字状口縁壺形土器の分布をみると、大和では小塙宮推定地・布留遺跡・繩向遺跡・平城宮下層遺跡・崇神天皇陵南遺跡、河内では鬼塚遺跡、和泉では石津遺跡、<sup>②</sup>摂津では東奈良遺跡、山城では中久世遺跡などがあげられ、いまのところ大和地域からの出土が圧倒的に多い。これは伊勢湾からの地理的条件が大きく影響していると考えられ、伊賀においても、その出土例が知られている。<sup>③</sup>最近、この大和の資料をもとにS字状口縁壺形土器の編年が試みられており、その初限を第V様式末期（伊勢湾地域の欠山期）にあて、伊勢湾地域と併行しておこなわれたことが指摘されている。<sup>④</sup>ところが近江地方では、南部と北部でそのあり方が異なる。1例として、北部の鶴田遺跡では、山中期と併行型式と考えられるものなかに、<sup>⑤</sup>S字状口縁の祖形と考えられているものが検出されているのをはじめ、伊勢湾地方と同様に、受口状口縁からS字状口縁への形式変化をある程度たどることができる。ところが南部地域では、S字状口縁壺形土器a類は認められず、滋賀県遺跡でb類が布留式と共に伴して検出されているが、必ずしも受口状口縁からS字状口縁への変化を明確にたどることはできない。これは山城・摂津地方でも同様あって、近江地方の影響の大きい庄内式併行の円勝寺遺跡では、S字状口縁壺形土器がみられない。さきの中久世遺跡や東奈良遺跡の資料もb類ないし、それ以降の形式に属している。このことから、伊勢湾地方で出現したS字状口縁土器が畿内地方へ伝播するルートは、伊勢湾→伊賀→大和→南河内→和泉の南回りと、伊勢湾→近江→山城→摂津の北回りの2つが考えられる。そして、さきにも述べたように、前者では受口状口縁→S字状口縁の変化過程が比較的スムーズにたどれるのに対し、後者では、特に近江地方南部から摂津にかけて受口状口縁とS字状口縁の間にギャップを生じている。これは近江地方で発生した受口状口縁が、伊勢湾地方でS字状口縁に変化し、それが再び近江地方へもたらされる。この間、近江地方南部では依然として受口状口縁を踏襲していた、と理解される。

以上のことから、近江地方南部・山城・摂津地域では、受口状口縁とS字状口縁を明確に区別してあつかう必要があると考える。具体的には、受口状口縁を有する土器を近江系・S字状口縁を有する土器を伊勢湾系として、扱えることになる。もちろん近江地方で検出された受口状口縁土器は、在地の土器として、明確に位置づける必要があろう。

- 注① 高橋美久二「幣原遺跡」「埋蔵文化財発掘調査概報」京都府教育委員会 昭和44年
- ② 「円勝寺の発掘調査」上 円勝寺発掘調査団 「仏教藝術」82号 昭和46年
- ③ 「中久世遺跡・殿城遺跡の土器」「大蔵遺跡」発掘調査報告 六勝寺研究会 昭和47年
- ④ 森浩一「田辺大神山遺跡」同志社 昭和51年
- ⑤ 「諸院遺跡調査概要報告」枚方市文化財調査報告第5集 枚方市教育委員会 昭和47年
- ⑥ 小林行雄「大阪府枚岡市鶴田町西ノ辻遺跡、I 地点の土器」「弥生式土器集成」資料編1 昭和33年
- ⑦ 福永信雄・勝田邦夫「上六万寺遺跡」「東大阪市遺跡保護調査会年報」東大阪市遺跡保護調査会 昭和50年
- ⑧ 「鳴上郡衛路発掘調査概要Ⅱ」他 大阪府教育委員会 昭和48年
- ⑨ 免山一篤「古曾部の弥生式遺跡の遺物」「古代学研究」第26号 昭和35年
- ⑩ 奥井哲秀氏の御教示による。
- ⑪ 「垂水遺跡第一次発掘調査概報」吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室 昭和50年
- ⑫ 村川行弘他「田能遺跡概報」「尼崎市文化財調査報告第5集」尼崎市教育委員会 昭和42年
- ⑬ 「尼崎市中ノ田遺跡」「尼崎市文化財調査報告第6集」尼崎市教育委員会 昭和46年
- ⑭ 白石太一郎・前園美知雄「天理市平等坊・岩室遺跡発掘調査概報」奈良県教育委員会 昭和45年
- ⑮ 大參義一「弥生式土器から土師器へ」「名古屋大学文学部研究論集(史学)」第47期
- ⑯ 田辺昭三他「湖西線関係遺跡調査報告書」滋賀県教育委員会 昭和48年
- ⑰ 「鴨田遺跡」「国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書」滋賀県教育委員会
- ⑱ 佐原真「先史時代」「彦根市史」上冊 昭和35年
- ⑲ 宇佐晋一・森川桜男「伊賀における弥生式土器・土師器の集成」「伊賀郷土史研究4」昭和41年
- ⑳ ⑯と同じ
- ㉑ 滋賀里遺跡Ⅲ-E区出土の受口状口縁菱形土器など。
- ㉒ 須恵器出現以前という意味
- ㉓ 「小望田宮推定地第2次の調査」「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」4 奈良国立文化財研究所 昭和49年
- ㉔ 藏田雅昭「大和における古式土師器の実態—天理市布留遺跡出土資料」「古代文化」第26巻2号 昭和49年
- ㉕ 石野博信「奈良県纏向遺跡の調査—三輪山麓における古墳時代前期集落の問題」「古代学研究」65 昭和47年
- ㉖ 安達厚三「古墳時代溝出土の遺物」「奈良国立文化財研究所年報」昭和44年
- ㉗ 清水真一「天理市柳本町崇神天皇陵古墳南で採集した遺物について」「古代学研究」68 昭和48年

- ⑩ 芦本隆裕・稻山數士「鬼塚遺跡」「東大阪市遺跡保護調査会年報」東大阪市遺跡保護調査会 昭和50年
- ⑪ 森浩一・田中英夫「堺市浜寺石津町遺跡の土師器と須恵器」「古代学研究」28 昭和36年
- ⑫ 奥井哲秀氏の御教示による。
- ⑬ ③と同じ
- ⑭ ⑯と同じ
- ⑮ 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」「考古学雑誌」第60巻第2号 昭和49年
- ⑯ ⑰と同じ
- ⑰ 大參義一氏の分類による。⑯参照
- ⑱ ⑯と同じ
- ⑲ ②と同じ

### 第3節 庄内式土器

#### 1. 井戸1出土の土器 (第19・20図、図版第36~38、表6)

形式分類は、基本的に第V様式土器に従う。器種としては、壺R 1点、壺S 1点、壺T 1点、鉢C 3点、高坏A 3点、有孔鉢A 1点、甕A 13点、甕F 5点、甕G 1点などがある。

壺R (1) は、器高12.7cmの小形品で、安定した平底を有し、旧態を依然として保っている。壺S (2) も、小形品で、底部を欠失しているが、球形の体部に短くたちあがる口縁部を有する。壺T (3) は、球形に近い体部に、内傾ぎみにたちあがった頸部から水平方向に外反する口縁部を有する。端部は上方に突出し、面をもつ。胎土および口縁部の形態から、瀬戸内系の土器と考えられる。体部下半は欠失しているが、口縁部の形態は、上記の特徴をそなえている。なお、<sup>①</sup> 体部内面下方は箇割りをほどこしている。

鉢C (4~6) は、タタキ目を有するC<sub>1</sub>(4~5) と、内外面ともに蒐磨きをほどこす精製のC<sub>2</sub>(6) に分けられる。(4~5) の底部成形は、第V様式の有孔鉢Bのそれと手法的につながるものがあるが、器壁を薄くタタキ仕上げているのは、この時期の特徴であろう。(6) は底部を欠失しており、その形状は不明である。

高坏A (7) は、柱状部中実のもの (7) と、中空のものがある。

有孔鉢A (8) は、底部が極端に突出しており、粘土を補充してタタキ成形した感がある。

甕A (9~12) は、体部球形のもの (9) と、長手のもの (10~12) がある。(11~12) は口縁部のたちあがりが強く、上縁部で外反しているのがみられ、A<sub>4</sub>類として分類できる。いずれも旧来の形態・手法を残すものの、タタキ整形後、ていねいなナデ調整をほどこすもの (11)

や底部が極端に小さくなるもの（12）がある。壺F（13～16）は、球形の体部に、尖底を有する。口縁部は、斜め上方へ外反し、端部は上方へわずかに突出して面をもつ。庄内式壺形土器と汎称されている形態をそなえている。（14・15）は、器高25cmを超える大形品で、胎土に雲母を多量に含み、茶褐色を呈するところから、河内産と考えられる。頸部の屈曲部や、口縁端部のたちあがりなどは、極めてシャープである。（16）は淡茶褐色を呈し三島産と考えられるものであるが、いまひとつ判然としない。ただ、胎土に雲母片を含まないことや、色調からみて、河内産ではないことを強調しておきたい。壺G（17）は、口縁端部に2条の挺凹線をほどこし、体部内面に範削りがみられる。胎土は淡茶褐色を呈し、（3）と酷似していることから、瀬戸内系の上器と考えられる。その他若干の壺片（口縁部・底部）が検出されている。

上記のように、この井戸は、河内産・瀬戸内産の土器が、在地の土器と伴って出土しており、この時期における土器の複雑な移動を端的にあらわしていて興味深い。ここでは、庄内式〔上田町（第Ⅱ層）式〕併行期とするにとどめておく。

## 2. 井戸2出土の土器（第20・21図、図版第38・39・57a、表7）

器種としては、壺Q1点、壺底部1点、高环B1点、脚部2点、壺F3点などがある。

壺Q（19）は、口縁部を欠失しているが、頸部が上方へたちあがる形状から、二重口縁を有するものと思われる。球形の体部に平底を有し、頸部下方に刻目文をめぐらした凸帯を有する。体部外面中位に横方向の範磨きが認められ、内面の刷毛調整痕の境界と対応させて考ると、体部を2段階に分けて成形していることがわかる。ただ、内面の刷毛調整が頸部直下までおよんでおり、たとえ頸部取りつけ以前に刷毛調整をおこなったとしても、その作業は大いに困難を生じたと思われ、手法的にいささか不可解な点がある。類似品は、奈良県有井遺跡など、大和からの出土が多い。<sup>⑨</sup> 底部片（20）は、平底で底部外面に木葉痕を、内面に刷毛原体のクモノ葉状痕を認める。技術的には、底部輪台技法をよく示したものといえる。

高环B（21）は、環部内面が水平になったもので、幅広くたちあがる口縁部を有する。（21）は、環底部のみ残在するが、口縁部との境に稜を有する。脚部は、柱状部が中空のもの（22）と、中途まで凹んだもの（23）とがある。（22）は柱状部の成形技法がよくわかるもので、内面に工具原体の回転運動時に生じた水平方向の擦痕が認められる。そして、工具原体を引き抜く際にいたと思われる縱方向の擦痕もみられる。また、この擦痕の延長線上に、工具の支点となつた凹穴が開口している。

壺Fは、口縁端部が上方へ突出するF<sub>1</sub>（24）と、突出しないF<sub>2</sub>（25・26）とがある。F<sub>2</sub>は、F<sub>1</sub>から派生した形式と考えられ、調整技法の簡略化がみられる。（24）は、河内産の土器で、口径14.6cmを測る小形品である。口縁端部の突出部はにぶくおわっている。（25・26）は、

胎土にはほとんどケサリ礫を含まず、灰白色を呈し、近接地域では東奈良遺跡のものに似かよっている。(25)は尖底であるが、内面窪削りが浅く、口縁端部の突出部も認められない。また、口縁部のヨコナデが肩部にまでおよんでおり、庄内式併行期の甕としては、新しい傾向をもつ。(26)は、(25)と近似した形態を有するが、肩部に細かな刷毛調整をほどこすことと、体部がより球形になっているのが異なる。

### 3. 土壙1出土の土器 (第21図、図版第39・40、表8)

器種および数量は、鉢C 1点、高杯脚部1点、甕A 1点、甕F 2点である。

鉢C (27)は、口径32cmを測る大形品で、平底を有する。形態・手法とも、第V様式のものと変らない。

高杯脚部 (28)は、中位でふくらみをもつ柱状部と、斜め下方へひろがる盤部からなる。柱状部は中空で、内面にしばり目が認められる。

甕A (29)は、下半を欠失しているが、外反する口縁部を有し、端部に斜め下方からヨコナデした面をもつ。これは、第V様式後半からおこなわれた手法で、甕A<sub>3</sub>として分類されるべきものである。甕Fは、F<sub>1</sub> (30)とF<sub>2</sub> (31)がある。(30)は、庄内式甕形土器の形態をそなえているが、体部内面の窪削りではなく、手法的に相異する。(31)は、底部を欠失するものの、ほぼ全形を知りうる。口縁部は外弯ぎみに外反し、端部はわずかに面をもつ。胎土には精選された粘土を用いており、触感は河内のものに近い。

### 4.まとめ

そもそも庄内式土器は、田中琢氏の提唱以来、原口正三・都出比呂志・石野博信各氏の論者<sup>③</sup>により、その性格や位置づけがなされているが、現段階では依然として流動的であるといわざるをえない。しかし、大極的には、庄内式を2小期に区分し、古墳出現以前の型式として認定されているようである。

これまで、庄内式土器に関しては、河内および大和の資料についての研究が主であった。周辺地域におけるこの種の土器については、三島を含めて、断片的に紹介されるだけで、造構などからの検出例など、実体としてその動静をうかがえる報告は数少ない。これらのなかにあって、豊中・古池遺跡の報告は、和泉における、庄内式土器を含めた、いわゆる古式土器の実体を論究していく注目される。摂津においては、東奈良遺跡から大量の庄内式併行期の土器が検出されている。

高槻市域でも、これまで郡家川西遺跡や柱本遺跡などから若干検出されているが、在地の土器との相対的な位置づけは、充分とはいえない。そこでここでは、わずかな資料ではあるが、

上記の遺構の検出例から、庄内式變形土器および併行期の土器に、若干の考察を加え、三島地域における位置を考えてみたい。

井戸1出土の2例の庄内式變形土器(斐F)は、同形式の斐としては大きい方で、いずれも細かなタタキ目、内面窓削り、口縁端部の上方への突出など、庄内式變形土器の諸特徴が顕著に認められる。(14)は、体部全面に左下りのタタキ目がみられ、刷毛調整は部分的である。底部は、尖底をめざしつつもいまだなしえず、わずかに径1.6cmの平坦面を有する。これに対し(15)は、タタキ成形後、外面を粗い刷毛原体で調整し、そのち底部を中心として上方へ放射状に細かな刷毛によって、ていねいに調整をほどこしている。土器製作者の側に、尖底をつくろうとする意識があったものと考えられる。この放射状の刷毛調整は、後に述べる井戸2の斐に顕著に認められる。これらのことから、(14・15)の斐は同一型式に属しながらも、調整手法に違いがみられる。そこで(14)を素材に、庄内式變形土器の製作技術を復元してみるとしよう。

成形技法は、内面窓削り技法を除くと、基本的に北鳥池式でおこなわれたそれと大差はないと考えられるが、タタキ目からみて、タタキ板は条溝が浅く細いうえ、密なものを使用したと考えられる。そのタタキ板を、器面に強く叩きつけることによって、胎土を均質化させるとともに器体を球形化し、なおかつ器表面を均整なものとしている。もちろん、内側には手あるいは内型に相当するものを当てがう。つぎに口縁部を成形する。頸部が「く」の字形に大きく外反することや、口縁部の長さが4cm近くもあるところから、タタキだしたとは考えられない。おそらく、体部上端を外方へ折りまげ、それをよりどころとして粘土紐を継ぎたしたと思われる。このことは、上田町(第II層)式の變形土器に具体的な事例としてみられる。<sup>(14)</sup>ついで底部および底部周辺を、内側から手で支えて再び叩き縮め、底部を小さくし、尖底化を促す。(14)の体部外面をみると、上半は比較的整然と、左下りのタタキ目がみられるのに対し、底部周辺はタタキ目の方向が乱れている。また、同形式土器の底部内面にしばしばみられる指頭痕ないし指關節痕などから、この技法の一端がうかがえる。そして、これらの一連の作業がおわると、土器を倒立して半乾燥させると思われる。半乾燥した土器は、内面を窓削りする第2の成形段階に入る。この段階では、下半を下から上へ、上半をやや右上りに、右回りにおこなっているのが一般的である。実際には、土器を膝の上にのせ、左手で支えながら右手を挿入して作業したと考えられる。ただ、器高22~23cmを超える大形品には、しばしば底部内面を窓削りせず部厚く残っている場合がみうけられる。それによって、内面を削る前の底部の厚みが、約10mm程度であったことを知ることができる。ところが他の部分では、4mm内外の厚さであるから、よしんば、あらかじめ叩くことによって、薄くなっていたとしても、内面をかなりの程度削っていると推測される。

それから最後に口縁部を仕上げて、製作を完了するわけであるが、口縁部の器壁の厚み、くびれ部内面のシャープさ、および口縁部内面が平滑なことなどから、この工程に際して、口縁部内面を箝削りしたと想定するのは如何であろうか。その工程を復元的に考えると、まず、口縁部内面を箝削りして器壁を薄くし、刷毛調整する。そして尖鋸になった端部を、水で湿したものでヨコナデ成形すると考えるのである。というのは、半乾燥させる時点で、内面箝削り前の土器を倒置する。そのため、大形品では、その自重を支えるために、いくぶんか口縁部を厚くつくって、仕上げ段階であらためて成形すると理解しているからである。だからこの時期の壺Fの大形品の口縁部は、外面にわずかな起伏を認めるものの、内面——特に下縁部——は非常にシャープな平坦面を形成している。上縁部は、わずかに上方や下方へカーブするものがしばしばみられる。これは、端部のヨコナデか、あるいは最終的に口縁部全体にほどこされるヨコナデ仕上げに起因するものであろう。

以上は、井戸1の壺Fにきわだつてみられるところである。他遺跡の事例をもってしても、河内産庄内式壺形土器のなかで器高22~23cmを超える大形品に関しては、同手法によっていると思われる。しかし以後の同形式土器は、三島地域に関する限り、技法的に退潮している。

つぎに、庄内式併行期の土器のあり方をみてみよう。

井戸1は、さきに記した河内産の壺Fが2例検出されているが、三島地域の壺は、基本的に第V様式の形態・手法を踏襲しており、河内産との差が歴然としている。このことは、壺Rや鉢C、高環にもいえることで、土器製作に関しては、前代と比して大きな変化はみられない。ただ壺Tのあり方などは、この時期に、播磨・吉備地方と交流のあったことを知るうえで非常に興味をひく。

井戸2は、大形の壺Fは検出されず、小形の壺Fが3例みられた。そのうち、河内産の(24)は、左下りのタタキ目、中位・下半の刷毛調整、内面箝削り、口縁端部の突出など、庄内式壺形土器の諸特徴をそなえている。井戸1出土の壺F(14・15)とは、器体の大小、それに起因する口縁部内面の箝削りの有無が相違する。他の2例(25・26)は、三島産と考えられるものである。形態的には、やや扁球形を呈すること、技法的には体部外面の刷毛調整が全面におよんでいること、体部下半の——尖底化作業時における——放射状の刷毛調整が、極めて顕著であること、<sup>◎</sup>口縁端部が上方へ突出しないこと、(25)では口縁部仕上げ段階のヨコナデが肩部においておどりいることなど、新しい要素が認められる。

つぎに土壤1の検出例をみると、多量の雲母を含んだいわゆる河内産のものは認められず、三島産と考えられる壺Fが2点(30・31)認められる。(31)は、井戸1出土の壺F(15)と比べると、ひとまわり小さいが、口縁端部の突出部および口縁部内面の箝削りの有無が対照的にみられる。これは、大形品における口縁部の箝削りとヨコナデの関係が、ネガティブな形であ

らわれたものと考えられる。(30)は体部内面に窓削りがみられず、第V様式土器の系列のなかで考えるべきものかもしれないが、タタキ目が細いところから、やはり變Fの手法の退化した形式とみるのが自然であろう。また土壌1と井戸2の變Fをみると、F<sub>1</sub>の退化したものとF<sub>2</sub>の共存がみられることから、時期的には近似し、技法的に同一型式に属すると考えられる。

以上變形土器を中心に、庄内式併行期の遺構をみてきたが、時間的前後関係は、さきにも述べたように、井戸1→土壌1・井戸2となることが理解される。しかし、どの遺構も、伴出土器が少なくセット関係が不明瞭なところから、上記の2段階を庄内式における2型式として設定するには、十分でない。ただ三島地域に視点をおく場合、基本的に第V様式の技法で變形土器が製作され、變Fは河内産のものが主流をしめる時期と、變形土器の主流が變Fになり、しかも技法的にも形態的にも退化現象のみられるF<sub>2</sub>がおこなわれる時期とに分つことができる。

庄内式土器を全体的にみたとき、變以外の器種は、なお平底を保持し、變形土器の変化と比して対象的なあり方を示している。これは、熟効率を考慮して變形土器を尖底化したとする考え方を補強するものである。

注① 類似品としては、川島遺跡の臺Bや雄町遺跡の11類に分類された壺などがあげられるが、頸部高に差異がみられる。

「川島・立岡遺跡」 太子町教育委員会 昭和46年

「埋蔵文化財発掘調査報告」山陽新幹線に伴う調査 岡山県文化財保護協会 昭和47年

② 末永雅雄「北葛城郡船橋村有井池出土・弥生式土器」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報2』奈良県教育委員会 昭和16年

③ 田中琢「布留式以前」『考古学研究』第12巻2号 昭和40年

④ 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」「大阪府立島上高等学校研究概要」復刊第3号 大阪府立島上高等学校 昭和43年

都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号

石野博信「奈良県纏向遺跡の調査」『古代学研究』65 昭和47年

⑤ 「豊中・古池遺跡」そのⅢ、豊中・古池遺跡調査会 昭和51年

⑥ 堀江門也「嶋上郡街跡発掘調査概要」Ⅲ 大阪府教育委員会 昭和48年

⑦ 「高槻市柱本遺跡試掘調査概要」柱本遺跡調査会 昭和47年

⑧ ④-(原口)と同じ 第5図-21

⑨ 土器を倒立させて、伏せておくと、内壁と外壁とでは、その乾燥度が異なる。すなわち、内壁の乾燥が遅いのに対して、外壁は乾燥がすすみ、器体を保持するほどに固くなる。このことが、内面窓削りによって、器壁を極めてうすく仕上げることを可能にしたと考えられる。

⑩ 3~4cmの単位幅で、底部中心から、腹部にかけて、極めて、ていねいにほどこしている。

① この土器は、觀察表にも記したように、ごくわずかに煮母片を含むものであるが、ここでは一応三島産として分別しておく。

## 第4節 布留式土器

布留式土器の分類基準は、基本的に安達・木下両氏のものに従ったが、それに含まれていない器形については、別に形式名を設定して補った。<sup>①</sup>

### 1. 井戸3出土の土器 (第22図、図版第40・41、表9)

器種および数量は、壺A 1点、壺D 1点、壺E 1点、高坏B 1点、脚部1点、甕A 2点、甕B 1点である。

壺A (1) は、二重口縁を有するもので、体部を欠失している。屈曲部がわずかに下方に突出し、上縁部のたちあがりは強く、文様などはみられない。壺Dは、球形の体部に短くたちあがる口縁部がついている。(2) は、壺形土器としての形態をそなえているが、成形技法の点では、甕となんら変わらない。また全面に煤が付着しているから、煮沸機能を有したものといえよう。しかしそれが壺Dの本來的なりかたかどうかはわからない。壺E (3) は、球形の体部に、斜め上方へ短くたちあがる口縁部を有する。この土器も煤が付着しており、(2) と同様のことが考えられる。しいていえば、甕Aや甕Bの大形甕に対する小形甕として、使用されたものかもしれない。

高坏Bは、坏底部から口縁部にかけてなだらかに移行し、上縁で外反するものをいう。(4) は、風化が著しいため手法をくわしく観察できないが、刷毛目などはみられず、範磨きがほどこされていたと考えられる。脚部との接合は、挿入法によると思われる。脚部片 (5) は、裾部の大半を欠失しており、端部は不明である。柱状部内面にしばり目がみられる。

甕Aは、球形の胴部に、頸部で外反し、斜め上方へたちあがる口縁部を有するものである。(6) は、口縁端部が内側に肥厚し、平坦な面をもつA<sub>2</sub>類に属する。体部を刷毛調整後、口縁部から肩部までをヨコナデしている。底部外面は、刷毛原体2~3帯を単位として、縦横に刷毛調整している。内面は範削りをほどこすものの、底部周辺にはおよんでいない。(7) は、底部を欠失しているが、口縁部の形態から、(6) と同様、A<sub>2</sub>類に属する。体部はやや長手の球形を呈し、刷毛調整後、肩部下辺にヨコハケを、口縁部から肩部上辺にかけてヨコナデをほどこしている。甕Cは、長手の体部に、外反する口縁部を有するもので、端部は肥厚していない。(8) は、外面全面を粗く範磨き調整するが、概して、器表面の起伏が激しい。内面は浅く範削りをほどこしている。全体的に、調整が粗雑で、胎土に小石を含むなど、純重な感じがする。

## 2. 井戸 4 出土の土器 (第23図、図版第41~43、表10)

器種および数量は、壺A 1点、小形丸底壺D 4点、小形粗製土器2点、手づくね土器2点、甕A 3点である。

壺A (9) は、口縁部の大半を欠失しているが、まっすぐにたちあがる頸部と、水平方向にひらく下縁部が認められるところから、二重口縁を有するものと考えられる。割れ口は、打ち欠かれたような形状を呈する。体部は、腹部の張った球形で、尖底に近い。体部外面および内面下半に、細かな範磨きをていねいにほどこした、精良な土器である。最大腹径は9.7cmを測る。大きさからいえば、小形丸底壺などに対応するもので、通常の壺Aとは異なった機能を有するものと考え、一応 A<sub>2</sub>類として分類しておく。

小形丸底壺D (10~13) は、球形の体部に、短く外反する口縁部を有するもので、口径は腹径とほぼ同じか、下回る。外面は、刷毛調整後、ナデ仕上げをほどこしており、細かくはD<sub>2</sub>類に属する。内面は、範削りをほどこした軽快な感じのもの (10・11) と、指ナデ調整をほどこした鈍重な感じのもの (12・13) に分けられる。その差は胎土にもみられ、前者は砂粒を含み灰褐色系の色調を呈するのに対し、後者は、クサリ礫を多く含み、灰白色を呈している。

小形粗製土器 (14・15) は、深塊形の体部上縁を軽くヨコナデして、口縁部を整形している。特に (15) は、体部外面を指ナデ整形しており、手づくね土器ともいえる。これらの胎土はクサリ礫を多量に含み、安満遺跡出土の弥生式土器と全く同質のものである。

手づくね土器 (16・17) は、盛大で、極めて不整形なものである。胎土は、小形丸底壺の (4・5) や、小形粗製土器と同質である。なお、茶褐色土層 (包含層) 内からも、手づくね土器 (52) が1点 (第23図、図版第41) 出土している。

甕Aは、口縁端部内側の肥厚部上面が、平坦なA<sub>2</sub>類 (18・19) と、内傾するA<sub>3</sub>類 (20) に分かれる。(18・19) は、長手の球形を呈する体部に、斜め上方にたちあがる口縁部を有する。外面は、いったん全体全面を刷毛で調整したあと、肩部には横方向に刷毛目をつけ、底部には一定方向の刷毛目をつけて、器面を整えている。そして、口縁部から肩部上辺にかけて、横方向にナデで仕上げる。ただ (18) は、肩部下辺に鈍い稜線が入るほど、強く刷毛原体をあてている。内面の範削りは、底部におよんでいない。胎土は、やや砂質の均質なものを使用している。(20) も、前二者とはほぼ同様の形態・手法をしめすが、内面範削りのあと、ナデ調整がほどこされている点、口縁端部の形態差とともに若干異なる。

## 3. 土塹 2 出土の土器 (第25図、図版第43)

布留式甕形土器A類の底部と思われるものが、2点 (21・22) 出土している。外面は刷毛調

整、内面は箝削りを、おこなっている。器壁が薄く、軽快な感じがするもので、布留式の中でも古相のものと考えられる。

#### 4.まとめ

これらの造構の時間的前後関係については、伴出土器のセットがとぼしく、わずかに壺Aにおいて対比しうるにとどまる。井戸3からは、すでに定型化した壺A<sub>2</sub>が2例検出されているが、井戸4の壺A<sub>2</sub>と比べると、器体が小さく、また、底部外面の調整手法に若干の違いが指摘できる。また、井戸4には、形式的に後出と考えられる壺A<sub>3</sub>が検出されており、型式学的には前後関係がみられる。しかし、他遺跡からの伴出例からすると、これらを同一型式とするのも可能で、時間的な幅は極めて限定されるだろう。

つぎに、井戸4の出土土器を中心に、編年的位置についてみてみたい。先述のように、この井戸は、小形丸底壺D<sub>2</sub>の盛行、壺A<sub>2</sub>、A<sub>3</sub>の共伴、小形粗製土器の伴出等が、基本的な要素として指摘できる。比較資料としては、大阪府船橋遺跡O-1の土器があげられる。とくに壺A<sub>2</sub>、壺A<sub>3</sub>、小形丸底壺D<sub>2</sub>の盛行は、重視すべきである。井戸4の資料は、セットをなしていないところから、壺、高坏などについては船橋遺跡の資料と比較できないが、ほぼこの時期に相前後するものと考えて差し支えない。その他の併行資料としては、奈良県上ノ井手遺跡井戸上層<sup>⑨</sup>や高槻市上牧遺跡などがあげられる。また、和泉大津市豊中遺跡上池部分出土の小形粗製土器<sup>⑩</sup>は、井戸4出土の小形粗製土器との関連が考えられる。

現在までの三島地域における布留式土器検出例は、さきに記した上牧遺跡や安満遺跡のほか、宮田遺跡・郡家川西遺跡・柱本遺跡などがあげられる。

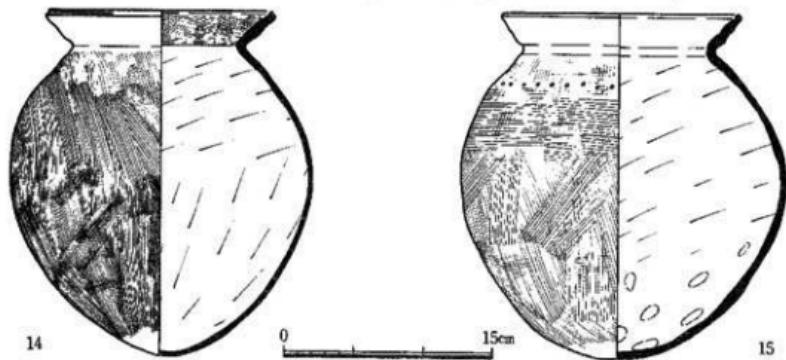
郡家川西遺跡27-D区では、壺Bのほか、小形丸底壺・小形鉢・小形器台など精製土器として定型化していないもの、および高坏A、壺A<sub>1</sub>が出土している。また、同遺跡7-C・G地区住居跡上層では、壺A・B、小形丸底壺A・B、小形鉢<sup>⑪</sup>・高坏、壺Aなどがあり、18-E地区第3層(砂礫層)では、壺A、小形丸底壺D<sub>2</sub>、高坏A、壺B<sub>2</sub>が、出土している。宮田遺跡東西溝では、壺Aと思われるもの、壺B、小形丸底壺B・C、高坏B<sub>2</sub>、のほか壺Aと思われるものが出土している。以上のことから、大筋として、郡家川西遺跡27-D地区→同7-C・G地区→宮田遺跡東西溝→安満遺跡9地区(今回報告の井戸4)・上牧遺跡土壙塗等→郡家川西遺跡18-E地区とたどることができる。いまここでそれらを図示できないが、将来具体的なかたちで明らかにしていきたいと思っている。

最後に、庄内式土器と布留式土器との接点について、若干述べて結びとしたい。

今回の調査ではないが、同じ安満遺跡の東1地区で検出された井戸7から、4個体の変形上

器が出土している。そのうち2個体は完形に復せるもので、いずれも丸底に近い形状を呈している。甕(14)(報告書記載の番号による)は、球形の体部に、斜め上方へ外反する口縁部を有する。その端部は面をもち、上方へこころもち突出しているのがうかがえる。上端は丸くおわっている。外面は体部下半と上半を異なる刷毛原体で、ていねいに調整しており、タタキ目はみいだせなかった。底部外面は磨耗していて、調整手法の判別は困難であったが、わずかに残る痕跡から、刷毛數帯を単位として、放射状に刷毛調整しているのが認められる。内面は、底部から頸部にかけて窓削りしている。口縁部は、内面を刷毛調整後、内外面とともにヨコナデしている。また肩部にも、軽くヨコナデしたあとがうかがえる。煤が全面に付着している。甕(15)は、球形の体部に、内寄ぎみに外反する口縁部を有する。端部は面をもち、わずかに内面が肥厚する。体部外面の調整は、上半と下半の刷毛原体を違えずに調整しているのがみとめられ、また肩部にヨコハケをほどこすとともに、刺突文をめぐらしていることも(14)と異なる点として指摘できる。さらに、底部外面の調整は、周辺の刷毛目の方向からみて、放射状にはどこしたものではなく、底部を覆うように縦横に刷毛調整したと考えられる。煤は底部を除いてほぼ全面に付着している。

以上7号井戸出土の甕形土器の形態・手法についてみたわけであるが、これらが同一井戸の中から、層位を異にして、出土したことを確認しておきたい。そこで、これらの甕を庄内式の範囲に含ませるのか、布留式のなかに含めて考えるのかが問題となる。このことは、庄内式と布留式の接点を求める意味でも、看過できない。この2点の甕を含めて、接点に位置すると考えられる甕形土器の特徴としては、口縁部が内寄ぎみに外反したり、端部がわずかに肥厚することや、尖底から丸底への移行がうかがえ、また手法的には肩部のヨコナデやヨコハケがある。しかし、これらを個々にみた場合、どちらの型式に帰属させるのか、決しがたいと



挿図第14 東一1地区井戸7出土の庄内式甕F(左)と布留式甕A(右)

ころがある。たとえば、尖底ぎみの丸底も存在すれば、丸底ぎみの尖底も存在するというよう に、きわめて主観的である。口縁部の肥厚形態についても、定型化したものかどうかみきわめ がたいところがあり、観察者の立場によってまちまちの結果が導きだされる。また、肩部のヨコナデなども、井戸 2 出土の斐 F<sub>2</sub> (25) のように明らかに庄内式併行期の範疇に入るものにも 認められるから、決定的な要素とはなりえない。そこで、いまひとつのめやすとして、底部外 面の調整手法に注目したい。庄内式變形土器も布留式變形土器も、底部内面に指押痕（指頭痕 ・指間節痕）が、しばしば観察される。おそらく土器を内側から手で支えて、外面の刷毛調整 をおこなったのであろうが、両型式には決定的な違いが認められる。すなわち、庄内式では底部を中心にして放射状にほどこすのに対し、布留式では、底部を覆うように縦横にほどこしている。このことは、底部の形態だけでは、一概に決められないが、調整手法の違いを重視して分類するならば、両者の間に明確に一線を画しうることになる。そこで、前者を庄内式の、後者を布留式の底部調整手法と規定したいと思う。というのは、この底部調整手法の違いは、土器製作 者の意識のなかに根ざしていると考えられるからである。庄内式變形土器は、基本的には北鳥 池式の製作技法をうけついだものであり、弥生式土器の流れのなかで位置づけられるべきもの かもしれない。いいかえれば、斐の球形化を促進した北鳥池式の製作技法は、庄内式において 発展的にうけつがれたと理解するのである。それは、庄内式變形土器製作者の意識のなかに、 煮沸機能の効率化をはかるという大前提があり、そのことが、變形土器の製作技術を飛躍的に 進歩させたのである。その結界として、北鳥池式の突出した平底を消失させ、尖底化をうなが すという形態の変化が生じ、また、内面窓削り技法を積極的にとりいれ、器壁を薄く仕上げる ことにつながるのである。

なかでも、底部の尖底化は重要な意味をもつ。ここで、いますこしそれについて考えてみたい。上田町式の古相と考えられる井戸 1 の斐 (14) でみられた尖底化の作業は、さきにもふれた。このタキ成形による尖底化作業は、内面の窓削りと相俟って、ある程度の効果は期待できただろう。ところが、上田町式の新相以降になると、体部下半に刷毛目をしていねいにほどこすようになる。井戸 1 の斐 (15) は、その典型ともいいくべきものである。特にここで注目しなければならないのは、体部全体を調整する刷毛目と、体部下半の刷毛目の原体を、違えている ことにある。このことは、ほかの變形土器 [土壤 1 (31)] にもみられ、この時期の變形土器 には普遍的にみられる。また、刷毛原体を区別しないまでも、体部下半の刷毛目は、相対的に ていねいにほどこすのが一般的である。この体部下半の刷毛目は、前述のように、基本的には 底部から上方へ整然とほどこされているのが認められ、底の方からみると、放射状を呈する場 合が少なくない。いずれにしても、井戸 2 出土の斐 (25) にみるような、この時期の刷毛調整 のていねいさは、井戸 1 出土の斐 (14) との形態差がほとんどないにもかかわらず、土器製

作者の意識のなかに、より尖底化（？）をめざしているのが読みとれる。

すなわち、庄内式變形土器製作のめざすものは、内面範削りにより器壁を薄く仕上げるとともに、平底を廃することによって、熱効率を高めることなのである。いわば、平底の発展的帰結としての尖底である。

上記のことを念頭において庄内式併行期の器種構成をみてみると、壺・鉢・高環・有孔鉢・變・手焙形土器などが認められ、第V様式のそれと基本的に変化していない。それも、さきに示した第V様式の編年基準に照らせば、第V様式後半に盛行した器種を、基本としている。たとえば、壺Q、鉢C、高環C（有段脚を有するもの）、有孔鉢B、變A<sub>2</sub>・變A<sub>3</sub>、手焙形土器などがあげられる。そして、第V様式の前半に盛行した器台Bや壺A・壺Nなどは、みることができない。また、庄内式併行期でも手焙形土器など特種な器種および變Fを除くと、一般的に底部の形態は、平底が主流であり、大きな変化はみられない。さらに、第V様式後半を特徴づける壺Qは、口縁部にしばしば備文や円形浮文がほどこされ、第V様式前半における壺Aと同様、飾られる壺としての位置をしめている。それは、庄内式併行期に入っても、一貫してみられるところである。こうしてみたとき、第V様式後半と庄内式併行期の間には、土器の構成・形態にさほど大きな変化を認めないのである。なかでも、飾られる壺において、決定的な変化が認められないのは、重要な意味が含まれていると考える。

それに対し、布留式變形土器にみられる底部外面の刷毛調整の変化は、たんに製作技法の変化だけではなく、土器製作者の意識の変化（共同体の変革）としてとらえるべきであろう。變形土器における煮沸機能の改善（熱効率の向上）は、庄内式において、平底の放棄という方向で達成された。それが布留式の段階では、すべての器種が丸底となり、弥生式土器の製作技法から脱却した姿がよみとれるのである。

以後、この布留式土器の形態・技法が、全国的に波及し、しかも齊一性をもって出現していく。このことは、製作意識の変革が、たんに一小地域にとどまるものではなく、組織的な体制のもとにおこなわれた状況を思わしめる。

土師器の規定については、小形精製3種土器の成立をもつてするものや、全国的に齊一性をもって出現する時点の土器とするもの、あるいは古墳発生以後の土器とするものなど、さまざまな解釈がなされており、いまだ定見をみないので現状である。

最近酒井龍一氏が、土師器について、見解を述べている。<sup>39)</sup> すなわち、土器生産のあり方を問題にして、「統率化された土器製作の専業集団が製作した土器」と規定している。そして、庄内式變をそれにあてている。しかし、その場合なぜ、統率化された専業集団が、壺のみを製作したのかが問題である。

庄内式を構成する各器種の組成や、これらに先行する型式との比較検討が十分になされてい

ない現段階では、斐のみを取上げて、直截に「專業集團」を想定することは、やや早計な感じがしないでもない。しかし、庄内式に特徴的な斐Fが広汎な地域——東九州～北陸地方に及ぶ——に分布し、煮沸の用に供されていることは、土器の地域間交流について、これまでにみなかった現象である。また、庄内式の斐Fに技法上、後代の土師器の先駆的技法（体部全面におよぶ刷毛調整など）が認められることも加えるなら、そこにさまざま、想定をたててみたくなる。

河内における、庄内式の組成が、なお分明でないとしても、その型式的構成分子である斐Fによって、庄内式を成立せしめている、社会組織や、政治的動向を推測することはできないものであろうか。たとえば、この北摂の地では河内産の庄内式土器と、第V様式の伝統を保守する北摂在地の土器とが、併存する事実があり、和泉でも同様の状況が、指摘されている。とすれば、庄内式（斐形）土器の成立した河内では（或いは大和では）、どのような状況が生成しつつあったのであろう。土器の機能論とは別に社会的侧面として、庄内式が河内でどのようにして成立したのか、という問題は、なお謎に包まれている。しかし、斐を通じて推測しうることは、河内・大和以外の地域がなし得なかった変革を、その地域のみが可能にしたということである。だからこそ、このすぐれた斐が第V様式的性格を保守する近隣地域に、大量に流入したと考えられる。その場合、煮沸の具であったことに、注目するなら、斐そのものが、「すぐれた煮沸器」として交換の対象となり、これを生産する河内の製作者たちに、通有な、あるいは從来の土器生産とは異り、異常なまでに偏った煮沸具の量的生産とその技術的熟練とを生み出したにちがいない。

しかし、それが「統率化された專業集團」だったかどうかは、弥生時代の石器や木器、さらには金属器などの生産について、推測するに至難なことである。ただ、この期にいたって、本来、自家供給的な土器できえ、交換の対象になりはじめたことは、そこに後代の「布留式の齊性」への道が、開かれつつあったといるべきである。庄内式斐F自身の中にのみ、布留式へ漸次移行する変化を認めるのであるから、布留式の出現は、第V様式を保守する地域からではなく、庄内式斐Fを生んだ革新的地域からのみ、あらわれたと考えるのである。いずれにしても、河内における庄内式の実態が不明確なため、各地における庄内式併行期との相対的な関係を、これ以上に論ずるのは無理があり、一定の結論をひきだすのは、将来に期したい。また、余談ではあるが、現在用いられている庄内式という名称も再検討されなければならないと考えられる。というのは、田中氏の提唱した庄内式は、畿内第V様式と布留式土器の時間的間隙を埋めるものとして、設定されたのであるが、実際に検証された土器（斐）は、河内産のものであるために、その使用上、混乱を生じる可能性があるためである。将来的には、「庄内式」という名称を、生駒山山麓の地域に限って用いる型式名とし、その他の地域の、庄内式併

行型式は、在地の土器形式を基準として、設定していく作業が痛感される。そうすることによって、激動の庄内式期の実態は明確になれるものと考えられるからである。

- 注① 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号 昭和49年  
② 原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真「河内船橋遺跡出土遺物の研究」 大阪府文化財調査報告 第11輯 大阪府教育委員会 昭和37年  
③ ①の文献による。  
④ 「上牧遺跡発掘調査概要」 高槻市教育委員会 昭和48年  
⑤ 「豊中・古池遺跡」そのⅢ、豊中・古池遺跡調査会 昭和51年  
⑥ 堀江門也「鳴上郡街跡発掘調査概要」Ⅱ 大阪府教育委員会 昭和47年  
⑦ 昭和51年度 高槻市教育委員会調査  
⑧ 堀江門也「鳴上郡街跡発掘調査概要」Ⅲ 大阪府教育委員会 昭和48年  
⑨ 昭和49年度 高槻市教育委員会調査、目下整理中  
⑩ 橋本久和「安満遺跡発掘調査報告書」 高槻市教育委員会 昭和49年  
⑪ ⑤に同じ、酒井龍一「和泉における伝統的第V様式」に関する覚え書

## 第5節 包含層出土の土器

包含層からは、弥生式土器、庄内式土器、土師器、須恵器、瓦器、磁器などが出土している。ここでは、これらを括して、第Ⅱ様式土器から順をおって、一連番号を付し、図示したものについて、その概略を記すことにする。なお、各時期の土器の形式名は、それぞれの時期における形式分類にしたがった。

### 弥生時代中期の土器（第3・4図、図版第49b・50・51）

器種としては壺A、壺D、壺底部、甕A、甕底部などで、その大部分は、第Ⅱ様式に属する。壺Aは、口縁部に刻目を有するもの、（第3図、1・2）と無文のもの、（第4図、6・7）がある。中でも、（2）は、いったん端部に櫛描波状文をほどこしたのち、櫛描文をナデ消して、下端に刻目文を、めぐらしているのが観察できた。壺D（8）は、その大半が欠失しているものの、口縁部が斜めに傾いていて、その特色をよく示している。また、口縁部直下に、櫛描文をほどこすのは、この壺Bにしばしばみられるところである。

甕Aは、若干の口縁部片が出土している。（3・4）は、口径11cm内外の小形品で、器壁も相対的に薄くつくられている。（5）は、口径15cmを測る中形品であるが、口縁部は外方へ折り曲

たように屈曲し、端部は面をつくらず、薄く終っている。安満遺跡ではあまり類例をみないものである。また、(18)の壺は、口縁端部に一条の凹線を有するもので、その上端部は、丸く上方へ突出している。時期的には、中期後半に属する。底部は、壺・甕あわせて、10数点出土したが、数量的には、壺が甕を上回っている。底部外面にはしばしば木葉痕がみとめられた(第4図14・20・21)。なお、(11・17)は、それぞれ、A3・B1の各周溝墓の溝中から出土したものであるが、各々が小破片であることや、風化が進行していることなどから、後に溝内へ流入したものと考えられ、あえて供獻土器としなかった。また、包含層出土の第Ⅱ様式土器を総じてみたとき、壺片の検出例が、甕片の検出例をはるかに上回っており、通常の集落等の調査とは異った様相を呈している。それは、この調査区が、方形周溝墓が群在する墓域であったことによるものと考えられる。

#### 弥生時代後期の土器～布留式土器 (第18・24・25図、図版第35・43～46・57・58)

第V様式の土器は、壺1点(26)・鉢1点(27)・甕底部2点(28・29)があげられる。(26)はB<sub>2</sub>類に属するもので、あまり肩部が張らず、後半期のものと考えられる。タタキ整形後、縱方向の範磨きをほどこしている。(27)は器高7cmの小形品で、短く外反する口縁部を有するものでE類として分類される。終末期のものであろう。甕底部はいずれも、タタキ目を残すものである。(29)は、内面に5.5mm×3mmの稜痕を、外面に6mm×4mmの稜粒痕を残す。(28)は、底部外面に6mm×4mmの稜痕を残す。また、図示していないが、円形浮文や、櫛描文で飾った東海系の壺やその他が若干出土している(図版第58b)。

庄内式併行期の土器は、壺6点(30～35)・鉢5点(36～40)・高杯5点(41～45)・甕8点(23～25・47～49)、片口土器1点(46)などがあげられる。壺には、Q類やその他がある。同じ二重口縁を有する壺でも上縁部が外反するもの(30)、斜め上方へ内弯気味に立ち上るもの(34)、大きく上方へ立ち上るもの(32)など、多様である。とくに(32)は胎土に雲母を含むものの、その形態から瀬戸内系と考えられるものである。郡家川西遺跡や、兵庫県川島遺跡などでは、庄内式土器を伴出している。この種の壺は、上縁部が、内傾気味に立ち上り、しかも大形品であるところから、(32)は、これらよりやや後出的なものと考えられる。また口縁部内面及び、頸部外面に丹彩がほどこされていて、特異なものである。その他には、斜め上方に立ち上った頸部から大きく外反する口縁部を有するもの(31)、口縁端が上下に突出し、櫛描波状文をほどこしたもの(33)、やや胴の張った、球形に近い体部に、斜め上方へ直線的にひらく口縁部を有するもの(35)などがあげられる。(35)は、布留式以降にも用いられる形態である。

鉢は、小形品が多くみうけられる。扁球形の体部に短く外反する口縁部を有するもの(36・37)、直口口縁を有するもの(38)、台付鉢(39)などさまざまである。中でも、(38)は、内外

面をていねいな籠磨きをほどこしている。また、(40)は、やや大形品であるが、形態的には(38)に近い鉢とおもわれる。

高环は、环部1点、脚部片4点がある。(41)は、B類に属するもので、水平の环底部に、大きく外反する口縁部を有する。外面の屈曲部は突出している。脚部はいずれも小形品(42~45)である。(44)や(45)は、小形器台の可能性も考えられる。

甕には、A類ないし、その系統と考えられるもの(48・49)と、F類(23~25・47)とがある。前者は、いずれも、タタキ整形後中位下半に刷毛目をほどこしている。中には、内面を籠削りするものもある。後者は、口縁端部上方が、わずかに突出するF<sub>1</sub>類(24・25・47)と、突出しないF<sub>2</sub>類(23)があり、F<sub>1</sub>類はすべて金雲母を含んだ河内産のものである。なお、(25・47)は、口縁端部外面に1条の凹線がほどこされている。片口土器(46)は、長胴形の体部に、わずかに外反して立ち上る口縁部を有する。底部は、ヘラ状のもので削り出して、小さく不安定なものである。片口は、口縁の一部を指で外方に折り上げるように成形している。

布留式の土器としては、高环1点(50)と甕1点(51)がある。高环はB類に属するもので、环底部から、口縁部へならかに移行している。

甕は、形態的にはA類に属するものであるが、口縁端部に内面肥厚がみられず、丸くおわっているものがみられる。おそらくA類の終末形式として、考えられるもので、時期的には、船橋のOⅢ・OⅣ式に相当するものと思われる。

#### 須恵器 (第26図、図版第47・59a)

器種としては、蓋环10点、高环4点、蓋甕片若干があげられる。時期的には、5世紀末~8世紀頃までのものがある。いまのところ安満遺跡において、この時期の集落跡は検出されていない。しかし、北方にある安満山の山腹には、6世紀代の群集墳があり、その山麓には近世以降の安満の村がある。遺跡北辺の高みに古墳時代後期の集落の存在が想定される。なお、(61・66)が溝2の上層から、(64・67・70)が井戸5の上層からそれぞれ出土しているが、いずれも出品と考えられる。

#### 土師器 (第27図、図版第48・59a・b)

器種としては、皿・鉢・蓋・鍋等がある。皿は、口径10cm内外のもの(76~87)と、口径15cm内外のもの(88~92)に大別できる。さらに前者は、口縁部が外方へ屈曲し、先端が上方へ突出するもの(76)と、内寄気味に短くたちあがるもの(77~87)に分けられる。時期的には、平安時代~鎌倉時代にかけてのものと考えられる。なかでも(76)は、平安時代の中頃にある程度限定できるものである。鉢(93)は、大きく内寄する口縁部を有するもので、外面は尾に

より記号（？）がほどこされている。時期は不詳だが、形態的には、奈良時代のものに、近似している。把手付鉢（96）は、長手の胴部に短く外反する口縁部を有するもので、粘土紐による巻きあげ成形痕が、明瞭に看取できる。把手部分は不明であるが、欠損状況から、貼り付けたものと判る。これらの土師器は、いずれもクサリ織を含み、淡褐色の明るい色調を呈している。

#### 瓦器（第27図、図版第48・59b）

瓦器は、いずれも風化が相当すんでいて、観察に困難をきたした。器種としては、塊・皿がある。塊は、いずれも口径に対する腹径が低く、型式的に新相を呈している。さらに内面のラセン状暗文のあり方なども、相似した形状を示している。ただ高台断面が、矩形を呈するもの（102）と三角形を呈するものがあり、また口縁部内面に沈線をほどこしたものと、ほどこしないもの（98）などがあり個別的には、ばらつきがある。皿（103）は、口径9cmの小形品で、燈明皿としての形態を備えている。その他、磁器塊（104）の口縁部片が出土している。

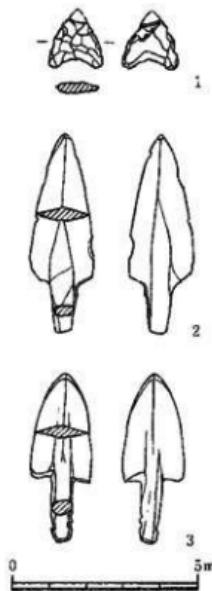
### 第6節 その他の遺物

石鎌（挿図第15-1）周溝墓A 5-2 土器群南端上層から検出されたもので、凹基無茎式に属する。先端をわずかに欠いていて、現存長13mm、最大幅14.3mm、厚さ3mm、重さ0.48gを測る。材質はサスカイトで、表面は若干風化している。

なお、安満遺跡から出土した磨製石鎌1点・銅鎌1点を参考資料として、あげておく。

磨製石鎌（挿図第15-2）は、京都大学浜津農場西北部の畠から表面採集されたもので、先端をわずかに欠くものの、ほぼ完形を呈する。現存長52.5mm、最大幅17.3mm、厚さ3.2mm、重さ3.62gを測る。鎌身は扁平で、両面とも、中央に鈍い棱線がはいる。基の長さは、13mmあり、鎌身との比率は、1:3である。材質は粘板岩である。

銅鎌（挿図第15-3）は、27-P地区の調査で検出されたものである。すでに、「高槻市史」第六巻において、紹介された資料であるが、今回は、その実測図をかかげておく。



挿図第15 石鎌・銅鎌

## 第Ⅶ章 まとめにかえて

### 集落の変遷と墓地のあり方

京大農場を中心とする遺跡中心部について依然不明な点が多いため、安満遺跡の集落の変遷については今後の課題として残っている。しかし、過去10年間におよぶ調査によってその実態は除々に解明されつつある。これまでに判明している集落の変遷をたどり、墓地のあり方についてまとめてみることにした。

小林行雄氏が「安満B類土器考」で九州との文化の関連を論じられて以来、安満遺跡は弥生時代前期に成立すると考えられるようになったが、これまでに出土している土器には第Ⅰ様式の中段階のものがみられ、三島地方では最も早く成立した弥生時代の遺跡であることを示している。<sup>①</sup>

さて、弥生時代前期の集落についてこれまで三島地方では、あまり知られていなかったが昭和43年に大阪府教育委員会が実施した24-A、E地区の調査によって弥生時代前期の集落を周っていたと考えられる2本の溝を検出した。外側の溝（A溝）は幅約3.5m・深さ1.2mを測る。内側の溝（B溝）は幅4m・深さ約1.2mを測る。A溝は長径150m・短径90mの長楕円形に、B溝は長径110m・短径70mの隅丸方形に復元できる。A溝で囲まれた面積は約10,000m<sup>2</sup>、B溝の場合は約6,000m<sup>2</sup>である。A溝とB溝が同時に存在したとは断定できないが、いずれにせよこの溝の内側、京大農場事務所付近には弥生時代前期の集落が存在したものと考えられる。このことは、昭和52年1月におこなわれた灌漑設備に伴う配管地中埋設工事の立合調査の際に、農場事務所北側から第Ⅰ様式土器を検出したことからも肯定できる。<sup>②</sup>一方、昭和42年の大阪府教育委員会の範囲確認調査の際に14-J-4-7地区に設けた試掘壙では第Ⅰ様式土器が検出される溝と包含層が確認されている。その後、この付近の調査は実施されていないため確証はないが、試掘壙の位置は集落を周る2本の溝から北へ約50m離れているので、この付近から東海道本線の路線下にもう一つ前期の集落があると推定される。

弥生時代前期の墓地については、これまでの調査では明らかでない。ただ、B溝の外縁部に墓壙1基を検出している。この墓壙はほぼ長方形を呈し、床面はほぼ平坦である。そこから内部に木棺を収めたものではないかと推定されている。前期に属する墓壙と推定されるものはこれのみであるが、もし、これを容認するなら、弥生時代に一般的に認られるように前期の段階から、溝の外縁部、つまり集落の外縁部に墓が設けられたことになる。この時期の墓地が集団で墓地を形成したものか、あるいは個々分散していたかは明らかでないが、最近茨木市東奈良

遺跡では前期の方形周溝墓群が発見され、すでに弥生時代前期には集落と墓地（墓域）とが区別されて営まれるようになっていたことが知られるにいたった。<sup>⑤</sup>

大阪府下では、前期末に普遍的に洪水に見舞われたらしいことは、東大阪市瓜生堂遺跡や八尾市龜井遺跡の調査で指摘されている。この現象は、安満遺跡においてもまた認められるところであり、安満においても前期の遺構面には厚く砂礫層が堆積している。この洪水によって厚く堆積した砂礫層を穿って構築した中期の遺構を検出しているから、弥生中期にも、集落は重層的に営まれたとしてよい。その範囲は前期の集落を踏襲しつつも、東西・南北に地域的に拡がるようになった。

しかも、前期末の洪水によって安満を離れた人々もいたものと考えられ、（天神山遺跡の初源が中期初頭であることから）この人々は、安満の西北にある天神山丘陵に移ったものと考えられる。この人々の離村は単に自然現象によるものと考えるより、中期の安満遺跡の拡張性を考慮するなら、人口の増加による分村の必要が大きな要因をなしていたと考えられる。

ともかく、安満遺跡の中期での拡張性については、これまでの調査結果により、次のようなことが知られる。

西は22地区の方形周溝墓が発見された地区からさらに西へ約100mの地点で、第Ⅲ様式期の溝状遺構が確認されている。東は京大農場東半部の果樹園北側一帯で第Ⅲ～Ⅳ様式の土器が発見される。遺跡中心部で、前期の集落を周る2本の溝が位置する上層には柱穴や溝・土壤が密に発見される。さらに最近の調査では、東海道本線をこえた旧西国街道付近（4-D地区）では主として第Ⅳ様式期の溝などの遺構が発見されている。<sup>⑥</sup>京大農場内については、前期とほぼ同様で、農場事務所付近に柱穴や溝などがみられるが、果樹園一帯では概して遺物包含層が薄く、砂層あるいは砂礫層が厚く堆積している。これまでの知見を総合したところでは、京大農場東半部にはいづれの時期の集落も確認されていない。このように、第Ⅲ様式から第Ⅳ様式までの時間的な幅はあるが、中期には、安満遺跡は前期より数倍の拡張性をもつようになる。この集落内部で、各集団毎に居住の区別等があったかどうかは遺構の上では確認できない。しかし、墓地のあり方については、かなり豊富な資料を得るようになっている。現在までに第Ⅲ様式期から第Ⅳ様式期までの墓地が、3ないし4ヶ所にみられる。まず、第1に昭和47年に調査を実施した9地区の方形周溝墓群を主とする墓地、第2に昭和51年に調査を実施した18-A地区の方形周溝墓、第4に昭和45年に調査を実施した27-P地区的木棺墓がある。さらに13-M、15-F、24-E地区などで亞棺墓、あるいは土覆墓などが発見されているが、個々分散的であり、明確な墓地としては確認されていない。22地区的方形周溝墓、27-P地区的木棺墓も単独で発見されたものであるが、いずれも集落の外縁にあり、墓地と推定して誤りないと考える。

中期には、このように各所に墓地が営まれる。天神山遺跡では集落の南端に一基の方形周溝墓が確認されている。嶋上郡街跡である郡家川西遺跡では、弥生時代中期には遺跡の北部・東部・西南部に方形周溝墓、土壙墓からなる墓地が営まれる。このように集落の外縁各所に墓地が営まれるということは、墓域を異にするような集団内部の単位があって、それに対応して営まれるようになった時期の差をそこに含んでいるとしても、集落内の各集団毎に墓地の区別があったと考えられる。

この他、方形周溝墓以外の墓である壺棺墓（図版46a・b）は集落内にも設けられたかもしれないが、これまでに発見されている例をみると限り、集落の縁辺部に位置しているものが多い。これらの壺棺墓、あるいは土壙墓のみで墓地を形成する現象は、安満遺跡では24-A、E地区北側で局部的に認められているにすぎない。

これらの墓地のあり方についての特色はいづれも集落の外縁に位置することである。9地区、18-A地区、27-P地区的墓地の位置する京大農場東方および東南部は安満層状地の縁辺地であって、層状地というより氾濫平野という方が妥当である。この地区では中期集落の片鱗も認められず、集落は層状地上に位置し、墓地は居住しない地域に限定されている。

22地区の方形周溝墓は単独であるが、複数の墓を含む墓地を形成すると考えられている。前述した、この地区から西へ約100mの地点で確認されている溝状構造は方形周溝墓の一部とも推定されている。この22地区の方形周溝墓は第IV様式期のものであるが、京大農場事務所北側から國鉄東海道線にかけて、中期の遺構・遺物が多く発見されていることから、24地区を中心とする中期集落の墓地が集落西方に営まれたと考えられる。9地区、18A地区の方形周溝墓は、時期的に22地区の方形周溝墓より古い段階のものであるが、集落西部の集団とは別の東部の集団の墓地かと推定される。前述のように遺構の上では中期集落の単位分けはできないが、このように、安満遺跡には複数単位の墓地が存在している。このような現象は郡家川西遺跡でもみられる。<sup>(6)</sup>

つぎに後期の場合について検討してみると、最近の調査で北-8、9地区で溝や井戸などが発見されている。以前に竪穴式住居1棟が発見されているので、京大農場果樹園東北方に集落の一つ集団が存在するらしい。<sup>(7)</sup>

遺跡西部では、昭和42年の22地区的調査で溝や柱穴・井戸などが多く土器とともに発見されている。京大農場事務所北側の遺跡中央部では、昭和42年・43年の調査とも後期の遺構は確認されていない。また、遺物も中期の土器量に比して少ない傾向にある。これらのことから後期の段階では集落は東西に分かれていたことが推定される。この時期の集落の一単位とみられる東方の遺構は安満層状地の東縁部で、より東方、南方の氾濫平野では依然遺構は認められない。この時期の墓地については現段階では不明である。

古墳時代になると遺跡東部では、弥生時代後期の遺構が位置する地域より拡がり、桧尾川右岸の氾濫平野にも井戸や土壙、また氾濫平野の灌漑用と考えられる溝もみられる。

前代より氾濫平野により近く、また、氾濫平野に集落の一部が拡がったと考えられるが、E-1・2地区の中世集落跡の調査時に検出した例や、9地区の方形周溝墓群の隣に3基の竪穴式住居を検出したことから、弥生時代後期同様扇状地の縁辺部が居住に選ばれている。墓としては、この地区的E-1-K地区から数基の土塚墓を検出している。

遺跡西部でも、弥生時代後期とほぼ同じ地域に遺構がみられる。このように、弥生時代後期から古墳時代にかけて、安満遺跡は東と西の集団に分離したことが推定される。

奈良時代以後の集落については最近の調査で桧尾川右岸の氾濫平野に進出する一方、現在の山手町方面へも拡がっていることが知られるようになった。とくに、平安時代末期に至って、氾濫平野に進出する集落が、安満だけに限られたものではなく、天川、中寺、宮田、上牧など同時期の遺跡が確認されており、古代から中世への変革期を考古学の面から追求できる可能性は一層高まりつつある。

注① 前期の遺跡としては三島地方では茨木市東奈良遺跡、同耳原遺跡がある。また、高槻市柱本遺跡でも前期の土器破片が検出されている。

② 昭和52年1月17日から2月3日まで立合い調査を実施した。配管工事は幅40~50cm・深さ約90cmを掘さくした。配管された地区は農場事務所北側、果樹園、および事務所西側で、農場中心部に細長いトレーンを設けた格好になった。事務所北側では部分的に円形ピットや溝状遺構が検出されたが、果樹園では桧尾川右岸特有の砂礫まじりの地山が顯著にみられ、遺構は認められなかった。

### ③ 説明会資料

④ 4-D地区で昭和52年2月22日から3月9日まで調査を実施した。第IV様式土器が多量に検出される幅2m・深さ0.3mの溝と竪棺、土壙墓が検出された。溝は48年2月に調査を実施した5-A・E地区で検出された溝のつづきで延長100m以上になる。

⑤ 田代克己氏の御教示による。

⑥ 堀江門也「嶋上郡衝跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 昭和48年  
「昭和49年度高槻市文化財年報」 高槻市教育委員会 昭和50年

⑦ 「高槻市安満弥生遺跡発掘調査概報」 人阪府教育委員会 昭和45年 9-A、E地区について  
昭和50年9月11日から11月5日まで調査を実施した。半月形の長さ15m以上の溝と井戸が検出されている。「昭和50年度高槻市文化財年報」 高槻市教育委員会 昭和51年

⑧ 「安満遺跡発掘調査報告書」 高槻市教育委員会 昭和49年

⑨ 高槻市教育委員会が宅地造成工事に先立って昭和48年1月29日から2月10日まで調査を実施した。

高垣町274番地他で調査面積は200m<sup>2</sup>である。すでに造成済みであったため約1.8mの盛土を除去して調査を行なった結果、竪穴式住居跡3棟と土壙1基を検出した。

**竪穴式住居跡**　調査地区の西壁にそって3棟が検出された。いづれも住居跡の半分程度しか調査ができなかった。住居跡内部から土師器破片を検出し古墳時代前期と考えられる。住居址1は3基のうちでもっとも北側で検出されたもので、深さ20cmを測る楕円方形の竪穴式住居である。中央部より南側を住居址2によって掘さくされているので規模は不明である。住居址2は住居址1より新しい時期の住居で一辺3.6m・深さ15cmを測る方形住居跡である。周溝内側に20cm程の柱穴を検出した。住居址3はもっとも南に位置し、住居址の東北壁を検出した。東北隅の壁ぎわで柱穴を検出した。

**土壙墓**　弥生時代の土壙墓を1基検出した。土壙104は建物1によって西側を削られているが東西方向に主輪をおき幅60cm・深さ15cmを測る。内部から第Ⅱ様式壺破片を検出した。(昭和47・48年度高槻市文化財年報所収)

# 土 器 觀 察 表

## 備考

器種	図版	法量
小 形 壺 A	1 - 16     図面番号 圖版番号	器 高 8.4 周 � 径 9.4 底 径 4.3
形式記号	1   土 器 番 号	単位は cm

表3 周溝墓出土の供獻土器観察表

## 周溝墓A1

器種	図版	法量	口部	体部	底部	備考
小形壺 A	1-16 1	器高 8.4 腹径 8.4 底径 4.2	・口縁部欠失・頸部は外 寄し斜め上方へたちあが る ○内外面とも調整不可	・頸部下半が張りだす・ 肩部に3条の櫛状直線文 を2帯ほどこす ○外面荒磨きか○内面ナ デ調整	・部厚く突出した 円盤状の平底	○灰褐色 ○良 砂粒多く含 む

## 周溝墓A3

壺 C	1-16 2	口 径 9.2 器 高 14.3 腹 径 9.0 底 径 5.4	・短かい頸部から口縁部 は大きく外反する・端部 は面をもつ  ○内外面ともヨコナデ	・中位がわずかにふくら む長胴形・頸部上半に3 条の櫛状文を5帯右回り にほどこす(第2帯のみ 波状文、他直線文)・内 面に接合痕 ○外面は縱方向の荒磨き ○内面はナデ調整	・円盤状の平底 ・中央がわずかに 凹む	○灰白色 ○良 砂粒多く含 む ・部下に黒斑 あり
壺 D	1-16 3	口 径 8.3	・すばまつた口縁部は斜 めに傾いている・端部は 薄くわわる・内面に接合 痕あり○外面ヨコナデ ○内面指揮			○淡褐色 ○良 小石粒を含 む ・部下に黒斑あり ・器壁薄い
壺 A	1-51 4	口 径 18.2	・外反して大きく開く ・端部は面をもつ・頸部は わざかにすばまる ○外面は軽くヨコナデ○ 内面は横方向の刷毛調整	・大半欠失・長胴形と思 われる  ○外面は縱方向の刷毛調 整○内面はナデ調整		○灰白色 ○良 ・5と同一個体と 思われる
	1-51 5	底 径 5.5			・平底・中央がわ ざかに凹む・底裏 に木葉痕あり	○灰白色 ○良 ・黒斑あり

## 周溝墓A4

壺 A	1-16 6	口 径 18.0	・外反して大きく開く ・端部は面をもつ・頸部は わざかにすばまる ○外面刷毛調整後ヨコナデ ○内面は横方向の刷毛調整	・大半欠失・長胴形と思 われる  ○外面は縱方向の刷毛調 整○内面はナデ調整		○淡褐色 ○良 小石粒を含 む ・外面に煤付着
	1-16 7	口 径 17.6 器 高 23.2 腹 径 16.5 底 径 5.8	・わざかにすばまる頸部か ら上縁部は水平近くまで大 きく外反・端部は面をもつ ○外側刷毛調整後ヨコナデ ○内面は横方向の刷毛調整	・長胴形・中位はわざか に凹む  ○外面は縱方向の刷毛調 整○内面はナデ調整	・平底・底裏に木 葉痕あり	○灰白色 ○良 小石粒を含 む ・底部内外面に黒 斑あり・煤の付着 は認められない

## 周溝墓A5

壺 A	1-17 8	口 径 20.7 器 高 40.4 腹 径 21.1 底 径 6.4	・斜め上方へたちあがる 頸部から水平方向へ大き く外反する口縁部にいた る・端部は面をもつ ○外面は刷毛調整後ヨコ ナデ○内面ナデ調整	・縦長の球形・頸部から 肩部に9帯の櫛状直線文 (第1・2帯6条、並下帯 2条、他は4条)を右回 りにほどこす ○外面縦方向の刷毛調整 後荒磨き○内面ナデ調整	・平底・中央がわ ざかに凹む  ○底裏はナデる	○淡灰褐色 ○良 小石粒を含 む ・口縁部・底部に 黒斑あり
--------	-----------	---	--	---	----------------------------------	--

## 周溝墓 A 5

番種	因版	法量	口頭部	体部	底部	備考
A	2-17	口径 19.3 腹径 19.8	・外反して大きく聞く ・端部は面をもつ。頭部はわざかにすぼまる ○外面とも刷毛調整後ヨコナデ	・大半欠失、長脚形 ○外面は縦方向の刷毛調整○内面はナデ調整		○灰白色 ○軟 ・内外面焼付着
	9					

## 周溝墓 A 5-2

表	17 11		・斜め上方に聞く頭部から口頭部は水平方向に外反・端部は面をもち下方へ延びて4条の横描波状文を施す○外面調整不明 ○内面刷毛調整後ナデる	・球状に近い。頭部に4条8帯の横描直線文。頭部下半～削除上半に4条11帯の横描波状文をほどこす ○外面とも調整不明		○淡褐色 ○軟 砂粒多く含む ・内外面とも風化著しい
A	10					

## 周溝墓 B 1

台付深鉢	2-17 11	口径 15.5 器高 15.6 脚内径 7.0	・口頭部は直口・端部は面をもつ ○内外面とも軽くヨコナデ	・倒錐形。7条の横描文帶を7帯(最下帯は波状文、他直線文)ほどこす ○外面は刷毛調整後軽くナデる○内面は左上りの刷毛調整	〈脚台部〉・斜め下方へひろがり下 端は面をもつ ○外面は端当たり強 ○下端部ヨコナデ ○脚台内面は削りとる	○淡褐色 ○良 ・横描文は右回りにはほどこす

## 周溝墓 B 2

表	2-17 12			・縫及の球形 ○外面風化のため調整不明 ○内面ナデ調整		○淡灰褐色 ○良 砂粒多く含む ・外面中位に焼付着
A						

## 周溝墓 B 3-2

表	2-18 13	腹径 24.8		・球形 ○外面刷毛調整後ナデ調整 ○内面ナデ調整	・平底、中央わざかに凹む。底裏に木葉痕	○灰白色 ○堅緻 ・体部上位に黒斑あり
A	2-18 14	口径 18.5 器高 25.0 腹径 16.5 底径 4.7	・斜め上方へ外反する ・端部は面をもつ ○外面ヨコナデ○内面横方向の刷毛調整	・長脚形 ○外面縦方向の刷毛調整 ○内面ナデ調整	・平底	○灰白色 ○窓 砂質 ・口縁部・肩部外 面焼付着・下半は赤く焼ける
B	2-18 15	口径 11.7 器高 11.3 腹径 10.7 底径 3.5	・頭曲して短く外反する ・端部は面をもつ ○外面ヨコナデ○内面横 方向の刷毛調整	・倒錐形 ○外面縦方向の刷毛調整 ○内面ナデ調整	・平底 ○内面ユビナデ調整	○暗褐色 ○良 砂質 ・体部下半に黒斑 あり・焼付着

## 周溝墓 B 4-2

表	3-18 16	口径 29.7 復元高 51.2 腹径 31.2 底径 9.0 (推定)	・すぼまつた頭部から口 縁部はラッパ状に聞く ・端部は面をもち下端に刻 目文・頭部に5条3帯の 横描文 ○外面不明○内面刷毛調整	・やや脇の張った球形 ・上半に近鉢状突起1あり ・体部上半に4条4帯の 横描直線文・波状文をほ どこす ○内面ナデ調整		○淡褐色 ○軟 砂質 ・口縁端部の刻目 文は指による・外 面風化激しい
A						

## 周溝基B 4-2

器種	図版	法量	口頭部	体部	底部	備考
B	3-19 17	口径 9.5 器高 19.7 腹径 13.5 底径 6.2	・上方にたちあがる頸部 から山線部は水平方向に 外反・端部は面をもち下 端に刻目文をめぐらす ・上面に1対の瘤状突起を 有す・頸部はややすぼま る ○内外面ともヨコナデ	・縦長の球形・頸部～胴 部中位に9条の櫛状文様 を6巻(第1・2巻波状文, 他直線文)ほどこす・下 方に径19mmの穿孔あり ○外面はていねいな泥磨 き○内面はナダ調整	・平底、中央わざ かに凹む・底裏に 木薙痕	○灰白色 ○良 ・体部中位に黒斑 あり
A	3-19 18	口径 15.7 器高 21.2 腹径 16.3 底径 5.2	・すぼまつた頸部から短 かく水平方向に外反す ・端部は面をもち上端に 刻目文をめぐらす ○外面刷毛調整後ヨコナ デ○内面横方向の刷毛調 整	・長削形	・平底、中央わざ かに凹む・底裏に 木薙痕	○灰褐色 ○良 ・口縁部・体部中 位に焼付着・内面 中位に炭化物付着 ・下半は赤く焼け る

表5 土塹3出土土器観察表

器種	図版	法量	口頭部	体部	底部	備考
A	18-36 204	口径 17.4 器高 28.0	・直立したのち大きく外 反する・端部は上方にわ ずかに突出し、下方は粘 土縫を貼付け、文様帶を ひろげる。4カ所にS字 状の粘土縫を貼付け、そ の間に5条の櫛状文様 をほどこす(1単位だ け)・頸部中位でわざか に肥厚する ○山線部は内外面ともヨ コナデ○頸部外面は刷毛 調整後ナダる・内面は横 方向の刷毛調整	・頸部中位のよく盛った ソロバン玉形・肩部に範 描文様をほどこす	・すこし突出した 平底	○灰白色 ○良 小石粒を多 く含む ・体部中位に黒斑 あり
E	18-36 205	口径 15.0 器高 24.7	・ほぼ上方にたちあがっ たのち外反する・端部に 1条の沈文をほどこす ○山線部は内外面ともヨ コナデ○頸部外面は刷毛 調整、内面はヨコナデ	・頸部中位がよく盛った やや扁平な球形・表面は 起伏あり ○外面は刷毛調整(上位・ 中位・下位で方向が異なる) 下端部はナダる○内面は 上半がナダ調整、下半が 刷毛調整	・突出した平底 ・中央部は凹む ○側面・内面とも 刷毛調整	○灰白色 ○良 小石粒を多 く含む ・肩部に帯状の黒 斑、体部下半にも 黒斑あり
B <sub>3</sub>	18-36 206	口径 13.2 器高 21.4	・頸部から徐々に外寄し 端部は薄くおわる ○内外面ともヨコナデ	・球形に近い・接合痕明 瞭 ○外面はタキ彫形、中 位の接合部の上下で傾斜 が異なる○内面は刷毛調 整(接合部下方から上は 右→左、下は横方向)	・窓で削り出した 感じのする平底	○灰白色 ○良 小石粒を多 く含む ・体部中位に焼付 着下位は赤く焼け る

表4 周溝墓A5-2土器群出土土器観察表

器種	固版	法 番	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
壺 A <sub>1</sub> (3)	5-20	口 径 15.9	・体部から上方にたちあがり、口縁部では水平近くまで大きく外反する ・端部には3条の擬似凹線の上に、円形浮文（内に竹管文）を貼付する（3個×6ヶ所） ○口縁部下曲は木調焼 ○外面は不明○内面は横方向の荒磨き			○褐色 ○良 ・器壁が厚い
	1	口 径 17.9	・体部から上方にたちあがり、口縁部では水平近くまで大きく外反する・端部を下方へひろげ、3条の沈線をほどこす・頭部にも1条の沈線をほどこす ○口縁部下面は未調整 ○外面は不明○内面は横方向の荒磨き			○灰褐色 ○堅紙若干の雲母を含む ・器壁が厚い
	2	口 径 17.9	・体部から上方にたちあがり、口縁部では水平近くまで大きく外反する・端部を下方へひろげ、3条の沈線をほどこす・頭部にも1条の沈線をほどこす ○口縁部下面は未調整 ○外面は不明○内面は横方向の荒磨き	○内面は刷毛調整？		
壺 A <sub>2</sub> (1)	5-20	口 径 13.1 器 高 20.0 腹 径 23.0	・頭部は上方にたちあがり口縁部では水平近くまで大きく外反する。下方へひろげた端部に、7条の擬似波状文と18個の円形浮文（内に竹管文）をめぐらす ○口縁部上面は横方向の荒磨き○端部および下曲はヨコナデ○頭部外面は縦方向、内面は横方向の荒磨き	・肩の張った扁平な形 ・最大腹径は中位にある ・肩部に5条の帶状齒線文と波状文をめぐらす。内面上半に接合痕明瞭 ○外面は縦方向の荒磨き ○内面上半はナデ調整、下半は刷毛調整	・中央が凹む	○灰褐色 ○良 砂質 ・底部周辺に塵灰 体の痕跡多数
	3	口 径 15.3 器 高 25.2 腹 径 24.7	・体部から上方にたちあがり、口縁部では水平近くまで大きく外反する。端部は上部に面をひろげてある。端部は2つの凹線をほどこし、円形浮文を貼付する（3個×4ヶ所） ○口縁部内面は縦方向の荒磨き、外面は横方向にナデる○上縁部は内外面ともヨコナデ○頭部は内外面とも横方向にナデる	・やや肩の張ったイチジク形を呈する。最大腹径は中位にある。内面に接合痕明瞭 ○外面はていねいな縦方向の荒磨き○内面はナデ調整	・わずかに凹む ○底を右回りに削り出した後、側面を横方向にナデる。底面中央は荒削り	○灰褐色 ○良
	4	口 径 13.0	・頭部は上方にたちあがり口縁部で外反する。端部は上下にわずかに突出する。端部および上面に刷毛全体による刻目文をほどこす ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整○内外面ともナデ調整			○淡褐色 ○良
壺 B <sub>1</sub> (5)	5-21	口 径 13.0				

器種の欄の( )内の数字は、個体数をあらわす。

器種	固版	法量	口頭部	体部	底部	備考
亜B <sub>1</sub>	5-21	口 径 13.1	・頸部は上方にたちあがり口縁部は外反する・端部は上下にわずかに突出する・端部に斜めをほどこす ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整○内外面ともナデ調整			○淡褐色 ○良い
	6					
亜B <sub>2</sub>	5-52	口 径 11.9	・頸部は上方にたちあがり口縁部は外反する・端部は頭をもち中央部がわずかに凹む ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整○内外面ともヨコナデ			○暗褐色 ○やや軟 * 口縁部外面に擦付着
	7					
蓋B <sub>3</sub>	5-20	口 径 12.3 高 20.0 腹 径 17.4	・頸部は上方にたちあがり口縁部で外反する・端部は上下にわずかに突出する・体部との境に接合痕 ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整○内外面ともナデ調整	・円錐形・最大腹径は中位にある ○外面はタタキ整形後、頸部から中位にかけて、ていねいな刷毛調整○内面はナデ調整	・安定した平底 ○裏面はヨコナデ	○褐色 ○良
	8					
蓋B <sub>4</sub> (9)	5-20	口 径 12.3 高 21.0 腹 径 19.7	・頸部は外寄りみにたちあがり口縁部は外反する・端部に細明脈を有する ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整○内外面ともヨコナデ	・球形に近い・最大腹径は中位にある・下半内外面とも接合痕顎部 ○外面上半は刷毛調整後、部分的に極方向の延解き○下半は延解き○内面はナデ調整	・平底 ○側面はナデる	○淡褐色 ○やや軟 砂粒含む * 黒斑あり
	9					
蓋B <sub>5</sub>	6-52	口 径 11.2	・頸部は外寄りみにたちあがり口縁部は外反する・端部中央はわずかに凹む ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整○内面はナデ調整			○淡褐色 ○良 * 口頭部外面は風化しており手法不明
	10					
蓋B <sub>6</sub>	6-52	口 径 12.4	・頸部は外寄りみにたちあがり口縁部は外反する・端部に細かい凹痕をほどこす ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整○外面は刷毛調整後ヨコナデの内面ナデ調整			○褐色 ○良
	11					
蓋B <sub>7</sub>	6-21	口 径 12.8	・頸部は外寄りみにたちあがり口縁部は外反する・端部に凹痕をほどこす ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整○内外面ともヨコナデ			○淡褐色 ○良 小石紋を含む
	12					

器種	図版	法量	口 頭 部	体 部	武 部	備 考
臺 B <sub>2</sub>	6-52 a 13	口 径 13.8	・頭部は外寄ぎみにたちあがり口縁部は外反する ・端部は面をもつ ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整			○灰褐色 ○良 ・口縁部内面に裂痕あり
	6-21 14	口 径 12.3	・頭部は外寄ぎみにたちあがり口縁部は外反する ○上縁部をつまむように強くヨコナデしたのち端部をナデ調整			○灰褐色 ○良
	6-21 15		・形態不明 ○頭部内外面ともナデ調整	・球形に近いと思われる ・下平欠失。肩部に距による記号文を縱に4本ほどこす ○外面は縦方向の刷毛調整○内面はナデ調整		○淡褐色 ○良
臺 B <sub>3</sub> (2)	6-21 16	口 径 14.6	・頭部から外寄して開く ○上端部を強くヨコナデ ○外面とも横方向のナデ調整	・肩の張った球形と思われる。肩部に刷毛原体による列点文をほどこす ○外面はタキシ整形後、刷毛調整○内面は横方向の刷毛調整後、強い縦方向の刷毛調整		○灰白色 ○良 小石粒を含む
	6-21 17	口 径 14.4	・頭部から外寄して開く ・端部に細い凹線をほどこす ○上端部を強くヨコナデ ○外面とも横方向のナデ調整	・肩の張った球形と思われる ○外面は縦方向の刷毛調整○内面は刷毛調整のなら、ナデ調整		○灰白色 ○良 小石粒を含む
臺 C (2)	6-52 a 18	口 径 12.3	・上方にたちあがったのち斜め上方に大きく外反する。端部は下方にわずかにふくらみ、面をもつ ○外面下半は縦方向の尾巻き			○淡褐色 ○良い ・外面とも風化が激しい
	6-52 a 19	口 径 11.8	・上方にたちあがったのち斜め上方に大きく外反する。端部は下方にわずかにふくらみ、面をもつ ○外面ともヨコナデ ○外面下半は縦方向の尾巻き			○灰白色 ○堅硬 砂粒を含む
臺 D (1)	6-21 20	口 径 14.1	・頭部は上方にたちあがり口縁部では大きく外反する。端部は下方にふくらみ、同形浮文を貼付する(数は不明)。頭部に刷毛原体による割穴列点文をめぐらす ○外面は縦方向の刷毛調整○内面はヨコナデ			○淡褐色 ○良

器種	固 版	法 量	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
壹 E (1)	6-21 21	口 径 12.2	*頭部は上方にたちあがり口縁部は屈曲して外反する。端部はわずかに面をもつ。頭部中位はわずかにふくらむ ○口縁部は内外面ともヨコナデ○頭部は内外面とも刷毛調整			○褐色 ○軟 砂質
壹 F (1)	6-56 ■ 22	口 径 12.2	*内傾して外寄ぎみにたちあがる頭部に、なめらかに外反する垂口状の口縁がつく。端部は面をもつ ○外面は刷毛調整後、口縁部をヨコナデ ○頭部下端は横方向にナデする ○内面はナデ調整			○灰褐色 ○良 *近江系
壹 G (1)	7-22 器 高 22.9 (推定) 23	口 径 11.9 腹 径 16.9 底 径 5.3	*頭部は外寄ぎみに徐々にたちあがり上縁部でやや外反する。端部は小さい面をもつ ○口縁部は内外面ともヨコナデ ○頭部は縦方向の刷毛調整	*側長の球形。上下部外面に距離の記号文 ○外面上位はタクティク整形後半ばまで刷毛調整○内面はナデ調整	*平底	○灰褐色 ○良
壹 H (1)	7-22 24	口 径 8.1	*内傾しながら餘々に外寄する。端部は薄くおわる ○口縁部は内外面ともナデする○頭部から体部にかけて縦方向の細い荒磨き	*下半部が張る。接合痕が明瞭。体部から口頭部へなめらかに移行する ○外面は縦方向の荒磨き ○内面はナデ調整		○灰褐色 ○良 砂質 *近江系か?・黒斑あり
壹 I (1)	7-22 25	口 径 11.0 腹 径 14.2	*斜め上方に外寄し、端部で外反する。頭部中位はわずかにふくらみ、頭をもつ ○内外面ともヨコナデ	*球形 ○内面は縦方向にナデする		○茶褐色 ○堅黒 砂質 *外面は風化が激しい
壹 J (1)	6-22 26	口 径 11.9 器 高 26.1 腹 径 20.9 底 径 7.5	*垂直にたちあがり、上縁部で外反する。端部は面をもつ ○端部はつまみだすようにヨコナデ○内外面ともヨコナデ	*卵形・肩部に把手の刺離痕あり ○外面は縦方向の刷毛調整後下半部を荒磨き(下→上)○内面は刷毛調整後、上方と下力だけナデ調整 ○把手は尾をあて貼付する		○淡褐色 ○良 *台付型の口縁と同手法・黒斑あり
壹 K (1)	6-22 27	口 径 8.4 器 高 18.1 腹 径 17.1 底 径 4.4	*外寄しながらたちあがる ○内外面ともヨコナデ	*上腹部の張った球形 ○外面は荒磨きか ○内面は刷毛調整、上半はナデする	*中央が凹んだ平底	○灰褐色 ○良 *体部外面は風化している

器種	固版	法量	口顎部	体部	底部	備考
臺L (1)	6-52 b 28	口径 11.5	・上端部に1条の沈線をほどこす	・彩彫不明・背部に2孔 1対の小孔を水平方向に穿つ ○外面は荒磨き○内面はナデ調整		○淡褐色 ○やや軟
臺M (1)	7-52 b 29	口径 9.6	・短かく上方にたちあがる・上端部は少し薄くなり、わずかに内弯する・端部は丸くおどめる ○外面は荒磨き○内面はナデ調整			○淡褐色 ○やや軟
臺N, (9)	7-23 30	器高 21.0 以上 幅・径 17.2	・わずかに外傾するが、ほぼ直線的にたちあがる ・上端部は欠失 ○外面は刷毛調整(下→上)○内面は上半が横方向の刷毛調整、下半はヨコナデ	・中位がやや張った球形 ○外面上半は刷毛調整(下→上)、下半はナデ調整 ○内面は頸部付近を横方向の刷毛調整、上半は未調整、下方はナデ調整		○淡褐色 ○良 砂質
	7-23 31	口径 11.9	・ほぼ直線的にのびる頭部から、なめらかに外反する上縁部にいたる・上縁部に3条の浅い凹線、頸部下端に6条の沈線をほどこす ○外面は縦方向の荒磨き ○内面は上半が刷毛調整後、上縁部のみヨコナデ、下半はナデ調整			○淡褐色 ○良 砂質
	7-52 b 32	口径 12.0	・上縁部でわずかに外反する・端部は面をもつ ・下半欠失 ○外面上縁部はヨコナデ			○茶褐色 ○砂質 霧母を含む ・風化している ・河内の土器
	7-52 b 33	口径 10.4	・箭状の頭部にわずかに外反する上縁部をもつ・端部は薄くおわる。下半は欠失 ○外面に刷毛目を認める			○淡茶褐色 ○鈍い ・風化している
	7-52 b 34	口径 11.0	・箭状の頭部にわずかに外反する上縁部をもつ・端部は薄くおわる。下半は欠失 ○手法不明			○褐色 ○軟 小石粒を含む ・風化が著しく、手法不明
	7-52 b 35		・わずかに外傾しているがほぼ直線的にたちあがる・上端部は欠失・上縁部下端に1条の沈線をほどこす ○外面は縦方向の荒磨き ○内面はナデ調整			○淡褐色 ○若干の砂粒を含む
臺N, (2)	7-23 36	口径 11.1	・わずかに外反して上方にたちあがる・端部は薄くおわる ○内外面ともヨコナデ	・大半欠失 ○外面はタクキ整形後、刷毛調整○内面はナデ調整		○淡灰褐色 ○良

番号	固版	法 番	口 類 部	体 部	底 部	備 考
壹 N <sub>2</sub>	7-23 37	腹 径 13.5	・ほぼ直立する。上縁部は欠失 ○外面は部分的に刷毛目がのこる○内面はヨコナデ	・ほぼ球形・内面に接合 張り隙 ○内面はナデ調整		○暗褐色 ○無い 砂粒を多く含む
壹 底部 B <sub>2</sub>	7-55 38	底 径 4.9		・形態不明 ○下方外側は底部まで縦方向の荒磨き○内面刷毛調整	・わずかに突出した平底。やや凸面を呈する	○灰褐色 ○良 ・黒斑あり
	7-55 39	底 径 3.4		・形態不明 ○下方外側は底部まで荒磨き○内面は刷毛調整後、ナデる	・中央部がわずかに凹んだ平底	○茶褐色 ○良
	7-55 40	底 径 5.1		・形態不明 ○下方外側は刷毛調整後、底部まで縦方向の荒磨き ○内面はナデ調整	・突出した平底 ・中央部がわずかに凹む	○灰白色 ○良 ・内面の剥離なし
	7-23 41	底 径 4.1		・形態不明 ○外側は縦方向の荒磨き ○内面はナデ調整	・中央部が凹んだ平底	○灰白色 ○良
	7-55 42	底 径 5.0		・球形に近いと思われる ○下方外側はタタキ整形後荒磨き○内面は刷毛調整(右→左)	・突出した平底 ・中央部がわずかに凹む ○側面はヨコナデ	○灰褐色 ○良 ・壹Bの底部
	7-55 43	底 径 4.2		・球形に近いと思われる ○下方外側はタタキ整形後ナデる○内面はナデ調整	・突出した平底 ・わずかに凸面を呈する ○側面はヨコナデ	○灰褐色 ○良 ・壹Bの底部か?
	7-55 44	底 径 5.0		・球形に近いと思われる ○下方外側はタタキ整形後縦方向の荒磨き○内面はナデ調整	・突出した平底 ・中央部がわずかに凹む ○側面はヨコナデ	○淡褐色 ○良 ・壹Bの底部
	7-23 45	底 径 5.8		・形態不明 ○外側は底部まで縦方向の荒磨き○内面は刷毛調整	・平底・底裏に細脈脈あり	○淡褐色 ○良 砂質
壹 P <sub>10</sub>	8-24 46	口 径 10.9 器 高 20.8 翼 径 17.5 底 径 9.0	・短く外反し、端部は面をもつ ○内外面ともヨコナデ ○頭部外側は刷毛調整	・下部の瘤球形・最大直径は中位にある ○外側は刷毛調整後といねいな荒磨き(上半部上→下、中位部左→右上、下半部下→上)○内面は粗い横方向の刷毛調整後、間隔を置いて縦方向に荒磨きをあてる○下部はナデ調整	[脚台部]・斜め下方に武藏的にのび、端部は上下に突出して面をつくる ○端部は強くナデる○外側は荒磨き(上→下)○内面上半は荒削り(左→右)下半は荒磨き(左→右)	○灰褐色 ○良 斧千の砂粒を含む ・中位に黒斑あり
	8-52 47	口 径 9.6 (推定) 腹 径 15.7	・短く外反する ○内外面ともヨコナデ	・下部の瘤球形 ○外側は刷毛調整後縦方向の荒磨き○内面は刷毛調整後部分的に縦方向ナデ調整		○暗灰色 ○良

器種	固版	法量	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
盜 P	8-52 b 48	口 徑 8.5 (推定) 底 徑 15.0	•短く外反する ○外面はナデ調整○内面 はヨコナデ	•下膨の瘤球形 ○外面手法不明○内面は 縦方向の指ナデ調整		○暗灰褐色 ○やや軟 紗質 •体部外面は黒化
	8-52 b 49			•上半欠失 ○外面は縦方向の荒磨き ○内面は刷毛調整後ナデる		○淡褐色 ○良
脚台 部	8-24 50	脚台高 5.5 底 徑 7.0			•上半は中実 下 半で外反し、端部 は丸くおさめる ○内外面ともナデ 調整	○暗茶褐色 ○良
	8-52 b 51	底 徑 9.2			•斜め下方に大き く外反し、端部に わずかに面をもつ •下端に1条の沈 線をほどこす ○外面は横方向の 荒磨き○内面はヨ コナデ	○灰褐色 ○良
	8-24 52	脚台高 3.5 底 徑 6.5		•欠失 ○外面はナデ調整○内面 は刷毛調整	•斜め下方に外反 し、端部には面をも つ○外面はナデ る○外面は縦方向 の刷毛調整○内面 は筋状のもので右 回りにナデたのち、 部分的に刷毛調整	○茶灰色 ○良 •本体との接合面 で粘土類の側離痕 あり
	8-52 b 53	底 徑 9.0			•斜め下方に外反 し、端部は面をも つ・下端部に1条 の細い凹線をほど こす ○外面はヨコナデ ○内面は横方向の 刷毛調整後ナデる	○灰白色 ○軟
	8-52 b 54	底 徑 9.0			•斜め下方に外反 し、端部は薄く尖る ○外面は刷毛調整 後、横方向の荒磨 き○内面は横方向 の荒磨き	○灰白色 ○良 砂質
	8-52 b 55	底 徑 4.9			•上半欠失・斜め 下方に大きく外反 し、端部下方に面 をもつ ○内外面ともヨコ ナデ	○茶褐色 ○良 •黒斑あり
苔 A, (1)	9-24 56	口 徑 26.6	•頭部から大きく外反し、 端部は面をもつ ○内外面ともていねいな 縦方向の荒磨き○端部は 横方向にナデするため下方 にわずかにたれさがる	•斜め上方にひろがり、 上半でたちあがる ○外面は刷毛調整のち、 上半を横方向の荒磨き、 下半は縦方向の荒磨き ○内面は縦方向の荒磨き		○灰褐色 ○良

器種	回数	法 番	口 線 部	体 部	底 部	備 考
錐 A <sub>2</sub> (2)	9-24	口 径 23.8	・頸部から大きく外反する・端部は先端に棘を有する ○内外面ともヨコナデ	・内寄しながらひろがる ○外面は縦方向の荒磨き 後口線部を調整○内面は不明		○灰褐色 ○良 ・体部内面は風化している
	57					
錐 B <sub>1</sub> (4)	8-24	口 径 16.0	・頸部から外反し端部はわずかに凸をもつ ○内外面ともヨコナデ	・内寄しながら上方へたちあがる ○外面はタタキ整形後ナデ調整○内面は刷毛調整後上平を横方向にナデる		○灰褐色 ○良 ・下平に凹窓あり
	58	腹 径 13.8				
錐 B <sub>1</sub> (4)	9-24	口 径 24.9	・頸部から内寄ぎみに外反し上線部では受口状にたちあがる・端部は凸をもつ ○外面は頸部付近を縦方向の刷毛調整、上線部・端部はヨコナデ○内面はヨコナデ	・ゆるやかに内寄しながらひろがり、上平でたちあがる ○外面上半は横方向の荒磨き、下半は縦方向の荒磨き○内面はナデ調整後、荒磨きか		○灰褐色 ○やや軟 小石粒を含む ・横方向の荒磨きは5~6mmの幅が1単位をなす・器壁は7~8mmと厚い
	59					
錐 B <sub>1</sub> (4)	9-53 ■ 60	口 径 30.0 (推定)	・頸部から内寄ぎみに外反し上線部では受口状にたちあがる・端部はわずかに棘を有する ○内外面ともヨコナデ○体部内面の刷毛調整後、口線部をとりつける	・ゆるやかに内寄しながらひろがり ○外面は縦方向の荒磨き、一部にタタキ目と見しき痕跡あり○内面は横方向の刷毛調整後、縦方向の荒磨き		○灰褐色 ○良 ・口線部の接合は高杯と同手法
錐 B <sub>1</sub> (4)	9-53 ■ 61		・頸部から内寄ぎみに外反し上線部では受口状にたちあがる・端部は欠失○外側手法不規○内面は横方向の荒磨き	・ゆるやかに内寄しながらひろがる ○内外面とも縦方向の荒磨き		○灰褐色 ○良
錐 B <sub>1</sub> (4)	9-53 ■ 62		・頸部から内寄ぎみに外反し上線部では受口状にたちあがる・端部は丸くおさめる ○内外面ともヨコナデ	・ゆるやかに内寄しながらひろがる ○内外面とも横方向の荒磨き		○暗灰色 ○良
錐 B <sub>1</sub> (1)	9-24	口 径 18.5 器 高 6.4 (推定)	・頸部から内寄ぎみに外反し上線部では受口状にたちあがる・端部外面に鋭い棘を有する ○内外面ともヨコナデ	・ゆるやかに内寄しながらひろがる ○外面は縦方向の荒磨き○内面手法不明		○淡褐色 ○やや軟 小石粒を含む ・体部内面は風化している
	63					
錐 C <sub>1</sub> (3)	8-53 ■ 64	口 径 16.2	・体部と口線部の区別がない・端部は丸くおさめる・接合痕明顯 ○内外面ともヨコナデ	・内寄しながら上方へたちあがる ○外面はナデ調整○内面は刷毛調整後、ナデる		○暗灰色 ○良
	8-53 ■ 65	口 径 11.6	・体部と口線部の区別がない・端部は内側にわずかに突出し凸をもつ・外面に接合痕明顯 ○内外面ともヨコナデ	・内寄しながら上方へたちあがる ○外面はナデ調整○内面は刷毛調整後、ナデる		

器種	固版	法量	口縁部	体部	底部	備考
鉢 C <sub>1</sub>	8-25 66	口 径 13.4 器 高 8.9 底 径 4.3	・部と口縁部の区別がない。端部はによく尖る ○外面はナデ調整か	・底部から口縁部まで内寄しながらひろがる ○外面はタタキ目をのこす ○内面はわざに刷毛目をのこす	・あげ底	○褐色 ○籠い 小石紋を含む ・内外面ともに風化が激しい
鉢 C <sub>2</sub> (1)	8-25 67	口 径 15.9 器 高 7.2 底 径 4.2	・部と口縁部の区別がなく、いわゆる塊状を呈する。端部は面をもつ ○内外面ともナデ調整 ○端部はヨコナデ	・やや内傾しながら上方へ大きく開き。まっすぐ 口縁部にとりつく ○外面はていねいなナデ調整○内面は刷毛調整後、はでる(左上→右下)	・あげ底 底・外面に指圧痕あり ○内面は刷毛目をのこす	○淡褐色 ○良
鉢 D (2)	8-25 68	口 径 13.7 器 高 10.0 (推定) 底 径 17.5	・受口状口縁・端部は丸くおさめる ○内外面ともナデ調整	・肩部中位の張った扁平な形・中位に1条の貼り付け突唇を有する。突唇の中央を強くナデて上下に綻をつくる。最大腹径は中位。突唇の部分にある ○外面はタタキ整形後ナデる○内面は刷毛調整後ナデる○3カ所に接合痕あり		○赤褐色 ○良
	8-25 69	口 径 21.9 器 高 15.1 底 径 22.2 底 径 4.9	・受口状口縁・外面に列点文をめぐらす ○内外面とも横方向にナデる	・肩部中位の張った扁平な形・最大腹径は中位よりやや上にある。上位には網捺直線文と列点文を交互にめぐらす(直線文上9条、下5条)。中程に突唇1条を左同位に貼付する(中央はナデで凹む)・列点文は刷毛目を横方向にナデたのちほどこす ○外面はていねいな刷毛調整○内面は下位から3段階に分けて刷毛調整		○淡灰褐色 ○良 砂粒を含む ・黒斑あり

器種	固版	法量	杯部	脚部	備考
高 杯 A <sub>1</sub>	9-53 b 70		【口縁部】・外寄しながらちあがり端部は丸くおさめる。上端部下方に細い凹線をはどこす ○内外面とも横方向の延磨き		○暗灰色 ○良 砂質
A <sub>2</sub>	9-53 b 71	口 径 30.0 (推定)	【口縁部】・外寄しながらちあがり上縁部では大きく外反する・端部下方に、逆のもので沈線をはどこす ○外面は圓磨き○内面手法不明 【底部】・口縁との境に細い突唇を有する手法不明		○灰褐色 ○良 砂粒を含む ・風化している
	9-53 b 72		【口縁部】・外反しながらちあがり端部は丸くおさめる。端部内外面に1条の沈線をはどこす ○内外面とも延磨き		○灰白色 ○良 砂質 ・風化している

器種	因版	法量	环部	脚部	備考
高 16 A.	9-53 b 73		〔口縁部〕・外反しながらちあがり端部は丸くおさめる。端部下方に1条の沈線をほどこす ○内外面とも縱方向の荒磨き		○灰白色 ○良
	9-53 b 74		〔口縁部〕・底部から大きく外反し、端部は丸くおさめる ○外面はヨコナデ(?)○内面は横力向の荒磨き		○黒灰色 ○良
	9-53 b 75		〔口縁部〕・外反しながらちあがり端部は面をもつ ○手法不明		○褐色 ○良 砂質 ・風化が激しい
LJ 径 35.0	9-53 b 76		〔口縁部〕・外寄しながらちあがり端部は丸くおさめる。端部に2条の浅い沈線をほどこす ○外面手法不明○内面は縱方向の荒磨き 〔底部〕・口縁部との境に1条の沈線をほどこす ○内面は縱方向の荒磨き○口縁部との境は横方向に窓をあてる		○灰褐色 ○良 砂質
	9-25 77	口 径 31.1	〔口縁部〕・外寄しながらちあがり上縁部では大きく外反する。端部は上方へわずかにふくらむ ○内外面とも縱方向の荒磨き後ナデるよう横方向の荒磨き○端部はヨコナデ 〔底部〕・内寄ぎみに斜め上方へのびる。接合部外面は突出する ○外面は縱方向の荒磨き(?)○内面は横方向の荒磨き		○灰褐色 ○良 砂粒を含む ・ていねいに仕上げる
	9-25 78	口 径 28.4	〔口縁部〕・外反してちあがる ○外面はヨコナデ後、横方向の荒磨き○内面は底底部荒磨き後、横方向の荒磨き 〔底部〕・内寄ぎみに斜め上方へのびる。接合部外面に1条の沈線と1条の突帯を有する ○内外面とも刷毛削除後、縱方向の荒磨き○接合部外面は荒磨き後、ヨコナデ○脚台との接合部は刷毛状のものでナデる	・外開きに下方へのび、下端近くでは外反する。4孔を穿つ。外面上方に4条、下方に3条の浅い沈線をほどこす ○外面は縱方向の荒磨き○内面は軽くナデる	○灰白色 ○軟
9-23 79	口 径 24.5 管 高 15.9 (推定) 底 径 14.6	〔口縁部〕・外反してちあがる ・端部は面をもつ ○外面手法不明○内面は横方向の荒磨き○端部はヨコナデ 〔底部〕・内寄ぎみに斜め上方へのびる。口縫部との境には稜を有する ○内外面とも縱方向の荒磨き○底部下方および脚部上端に剥離層があり、接合部に粘土紐をまきつけたものであろう	・外開きに下方へのび、下端近くでは外反する。端部は上方に稜をつくり。丸くおわる。柱状部は中空で、4孔を穿つ ○外面は縦方向の荒磨き○内面はナデる	○赤褐色 ○良 小石粒を含む ・脚部上方外面に横紋模あり	
	9-54 a 80	〔底部〕・大半欠失 ○底部中央に荒磨きを有する	・柱状部は斜め下方にのびる。中位に穿孔(孔数不明)・内側上方を棒状のもので突く ○外面は荒磨き○内面手法不明	○灰白色 ○やや軟 ・風化している	

番種	固版	法量	坏部	脚部	備考
高坏 A1	9-54 ■ 81		〔底部〕・大半欠失 ○底部中央に荒磨きを有する○脚部との境はヨコナデ	・柱状部は斜め下方にびる ○外面は縦方向の荒磨き ○内面はナデ調整、下方は削毛日をのこす	○暗灰色 ○良 ・連續成形技法
	9-26 82	底 径 15.9	〔底部〕・内寄ぎみに斜め上方へのびる ○外面は荒磨き（下→上）○内面下法不明	・外開きに下方へのび、下端近くでは外反する・4孔を穿つ ○外面は荒磨き（上→下）○内面 上部は棒状のものでかきとったの ら、ナデる○下半は横方向の削毛 調整後、下縁部をヨコナデ	○淡褐色 ○良 石膏の砂粒 と雲母を含む
	9-25 83	底 径 18.0		・外開きに下方へのび、下端近くでは外反する・4孔を穿つ・端部 に1条の凹線をはどこす ○外面は縦方向の細い荒磨き（幅 2mm）○下縁から端部にかけては ヨコナデ○内面は削毛調整後下半 のみナデる	○暗灰色 ○良 砂質
	9-25 84	底 径 18.2		・外開きに下方へのび、下端近くでは外反する・4孔を穿つ・端部 上方に削目文をめぐらす ○外面下縁から端部にかけてヨコ ナデ○内面はナデ調整	○暗灰色 ○良 小石粒を含む ○脚部外面は黒化 が激しい
	10-26 85	口 径 33.7	〔口縁部〕・わずかに上方へたちあ がったのち上縁部で大きく外反する ・端部は丸くおさめ上面に2条の浅 線をほどこす ○内外面ともヨコナデ後、縦方向の 荒磨き○端部はヨコナデ 〔底部〕・内寄しつづけ上方への びる口縁部との接合部外面は2条の 凹線と1条の突起、内面は1条の浅 い沈線を有す ○外面上半は斜め方向の荒磨き、下 半は縦方向の荒磨き ○内面は削毛調整後、斜め方向の荒 磨きをはどこしたのち、縦方向の荒 磨き		○淡褐色 ○良
	10-53 86		〔口縁部〕・わずかに上方へたちあ がったのち、上縁部で大きく外反す る ○外面は縦方向の荒磨き○内面は横 方向の荒磨き		○暗灰色 ○良
	10-26 87	口 径 22.5	〔口縁部〕・わずかに上方へたちあ がったのち、上縁部で大きく外反す る・端部は丸くおさめ、わずかに接 を有する ○内外面ともヨコナデ後、横方向の 荒磨き○端部はヨコナデ 〔底部〕・内寄しつづけ上方への びる・口縁部との境に接を有する ○外面上半は横方向の荒磨き、下半 は縦方向の荒磨き ○口縁との境はナデ調整○内面は荒 磨き（ド→上）		○灰褐色 ○良

器種	固 形	法 量	坏 部	脚 部	備 考
高 以 上 A,	10-25	口 径 24.5	【口縁部】・わずかに上方にたちあがったのち、上縁部で大きく外反する・端部はわざかに棱を有する ○外曲は範磨き○内面は横方向の範磨き		○灰白色 ○良 やや砂質
		88	【底部】・内弯しつづけめ上方へのびる ○底部内面を横方向の刷毛調整後、口縁部を接合する○外面は縦方向の範磨き○内面は開閉をおいて縦方向の範磨き		
10-26 53 b (推定)	器 高 14.5 底 径 16.0		【底部】・内弯しつづけめ上方へのびる・口縁部との境に突出部を有する ○内外面とも縦方向の範磨き	・端部は下方にのびる柱状部から角度をかえてひろがる・柱状部は中空で、3孔を穿つ ○外面は縦方向の範磨き○内面は横方向の刷毛調整後、上方をナデる	○淡褐色 ○良
		90	【口縁部】・わずかに上方にたちあがったのち、上縁部で大きく外反する・端部は丸くおさめる ○内外面ともナデ調整後、縦方向の範磨き○端部はヨコナデ 【底部】・内弯しつづけめ上方へのびる・口縁部との境に突出部を有する ○内外面とも縦方向の範磨き	・端部は下方にのびる柱状部から角度をかえてひろがる・端部は丸くおさめる・柱状部は中空、中央を棒状のもので突く・4孔を穿つ ○内面はナデ調整○杯部と脚部の接合部に粘土紐を廻しつけ刷毛調整後、範磨き（上→下）	○灰褐色 ○良
		91	【底部】・形態不明 ○内外面とも範磨き○脚部との境はヨコナデ	・端部は下方にのびる柱状部から角度をかえてひろがる・端部は丸くおさめる・柱状部は中空・4孔を穿つ ○外面は範磨き○内面は範状のものを回してかきとる、下半はナデ調整	○淡灰褐色 ○良い 砂粒を含む
10-26	底 径 14.7				
92		底 径 13.9		・端部は下方にのびる柱状部から角度をかえてひろがる・端部は上方に少し突出し、下端に棱を有する ○外面は範磨き（上→下）○柱状部内面は未調整、脚部内面は縦方向のナデ調整ののち、ヨコナデ	○灰褐色 ○良
10-93			【底部】・形態不明 ○底部中央に範磨きを有する	・端部は下方にのびる柱状部から角度をかえてひろがる ○外面は縦方向の範磨き○内面は範状のものを回してかきとる	○淡褐色 ○良
10-54 94			【底部】・形態不明 ○底部中央に範磨きを有する	・柱状部は斜め下方にのびる ○外面は縦方向の範磨き○内面はナデ調整、下方は刷毛目をのこす	○灰褐色 ○良
10-95			【底部】・形態不明 ○内外面とも縦方向の範磨き	・端部は下方にのびる柱状部から角度をかえてひろがる・柱状部は中空 ○外面はヨコナデ後、縦方向の範磨き○柱状部内面は範状のものを回してかきとる○内面はナデ調整	○灰褐色 ○良
10-54 96			【底部】・形態不明 ○底部中央に範磨きを有する	・柱状部は斜め下方にのびる・上方5条、下方に4条の浅い沈線をほどこす ○外面手法不明○内面はナデ調整	○暗灰色 ○良 砂粒を含む ・沈線はラセン状か

器種	因版	法量	杯部	脚部	備考
高 坏 A <sub>2</sub>	10-54 a 97			・柱状部は下方にのびる。上方に5条下方に4条の浅い沈線をほどこす ○外面は荒磨き○内面はナダ調整	○淡褐色 ○良
	10-54 a 98			・柱状部は下方にのびる。上方に5条下方に3条の浅い沈線をほどこす ○外函手法不明○内面はナダ調整	○淡茶褐色 ○やや軟
	10-26 99			・壺部は斜め下方へ大きくひろがる。壺部はわざかに棱を有する ・孔数不明 ○外面は細い縱方向の荒磨き○内面は刷毛調整後、軽くナダる	○灰褐色 ○良 やや砂質
	10-54 a 100	底径 16.0		・壺部は下方へ大きく外反する ・壺部上方に穿孔(孔数不明) ○外面は縱方向の荒磨き○内面はナダ調整○下縁部を強くヨコナダ	○淡褐色 ○良い
小 形 高 坏 (2)	10-53 b 101	口徑 15.0 (推定)	〔口縁部〕・斜め上方に外弯する ・端部は曲をもつ ○外面は横方向の荒磨き○内面手法不明○壺部はヨコナダ 〔底部〕・形態不明・口縁部との境に刻目文をめぐらす ○外面は荒磨き		○褐色 ○良
	10-53 b 102	口徑 15.0 (推定)	〔口縁部〕・斜め上方に内湾ぎみにたちあがり。上縁部で大きく外反する ・端部は直をもち、1条の浅い沈線をほどこす ○外函手法不明○内面は横方向の荒磨き		○灰褐色 ○良 やや砂質
器種	因版	法量	口縁部	脚部	基部
器台 A (4)	11-27 現存高 103	口 徑 19.1 10.6	・壺部から屈曲して大きく外反する。壺部に2条の凹線をほどこす ○壺部に粘土絆を貼付し直を形成。内外面荒磨き ○壺部との境は横方向の荒磨き	・下方が開いた筒状を呈する。上方に4孔。下方に4孔を穿つ ○外面は縱方向の荒磨き ○内面は縱方向のナダ調整	○灰褐色 ○良 若干の砂粒を含む ・台上面にわざかに磨耗痕あり
	11-27 104			・下方が開いた筒状を呈する。下方に5孔を穿つ ○外面は縱方向の脚毛調整下方は横方向にナダる ○内面は右回りの刷毛調整	○灰褐色 ○良
	11-27 105			・筒状、下方の径やや大 ○外面は縱方向の荒磨き ○内面は縱方向のナダ調整	○淡褐色 ○良 砂粒を含む
	11-27 106			・筒状、下方の径やや大 ・中位に外函から4孔を穿つ ○外面は縱方向の荒磨き ○内面はナダ調整、部分的に刷毛調整	○赤褐色 ○軟 砂質 ・胎上は輪状を呈する

器種	図版	法量	口縁部	脣部	唇部	備考
器台B	11-53 a 107	口 径 23.0	・脣部から大きく外反し 溝部はわずかに下にふくらむ ○手法不明			○淡褐色 ○良 ・風化している
	(5) 11-53 a 108	口 径 22.0	・脣部から大きく外反する ・端部は瓦原体による 1条の沈線と刻目文をはどこす ○上面は距離き○内面不明			○淡褐色 ○良 ・内面は風化が激しい
	11-27 109	口 径 22.9 器 高 17.8 底 径 18.2	・脣部から大きく外反する ・端部は瓦原体による 刻目文を4カ所にはどこす ○外面は刷毛調整のち、 ヨコナデ○内面は距離き	・上方の径がやや大きい 筒状を呈する。上半に2孔、下半に2孔を穿つ ○上半は内外両とも刷毛調整○下半は外面が刷毛調整、内面は横方向の刷毛調整	・脣部から大きく開き端部は面をもつ。端部は瓦原体による羽伏文の文様等2番をはどこす ○外面は刷毛調整○内面はヨコナデ	○淡褐色 ○良 砂粒を含む ・台上面は磨耗が少ない
器台C	11-27 110	現存高 14.4 底 径 17.7	・形態不明 ○外面は刷毛調整のち、 ヨコナデ○内面は距離き	・上方の径がやや大きい 筒状を呈する。上半に2孔、下半に2孔を穿つ ○上半は内外両とも刷毛調整○下半は外面が刷毛調整、内面は横方向の刷毛調整	・脣部から大きく開き端部は面をもつ。端部は瓦原体による羽伏文の文様等2番をはどこす ○外面は刷毛調整○内面はヨコナデ、部分的に刷毛調整	○淡褐色 ○良 砂粒を含む
	11-53 b 111				・脣部から大きく開き端部は面をもつ ○外面とも刷毛調整○端部はヨコナデ	○灰褐色 ○良 ・内面に轉廻あり
有孔鉢A	11-28 112	口 径 13.8 器 高 10.4 底 径 4.5	・口縁部は直口。端部は面をもつ下方にわずかに後を有する ○内外両とも刷毛調整のち、 端部は刷毛調整後、横方向にナデる	・底部から口縁部にかけて直線的にひろがる ○外面は刷毛調整（左→下）○内面は刷毛調整（右下→左上）	・平底 ○側面はヨコナデ○内面は削るようにナデる○側面から筒状のものを回してかきとり、穿孔する	○暗灰褐色 ○良 砂粒を含む
	11-28 113	底 径 4.2			・平底・5孔を穿つ ○側面はナデる○内面は刷毛調整○筒状のものをつきさし穿孔する	○暗灰色 ○良
	11-55 b 114	底 径 3.4			・平底 ○側面は縱方向に強くナデる○内面は横方向に強くナデる○中央に轉廻のもので穿孔する	○灰白色 ○良 ・黒斑あり
有孔鉢B	11-28 115	口 径 13.1 器 高 9.5 底 径 2.7	・内寄する。端部にわずかに面をもつ ○外面はタタキ目○内面は刷毛調整	・斜め上方にのびる ○外面はタタキ目。底付近は縱方向に叩く○内面は刷毛調整	・かなり丸みをもつ平底、不安定ながら立つ ○内側から回しとつて穿孔する○穿孔後、内外両ともナデる	○褐色 ○良 ・最壁厚 6mm・脚上部に軽度あり。底部外側に指紋痕あり

器種	図版	法量	口 線 部	体 部	底 部	備 考
有孔 鉢 B	11-28	底 径 2.3		・上半欠失 ○外面はタタキ目〇内面 はナデ調整	・小さく不安定な 平底 ○棒状のものを2 回つきとして穿孔 する〇外面はタタ キ整彌後、部分的 に粗く削る〇内面 はナデる	○灰白色 ○良 紗質
	116					
	11-28	底 径 3.0		・上半欠失 ○外面は底部まで輻方向 の刷毛調整〇内面はナデ 調整	・小さく不安定な 平底 ○内側から右回り に穿孔〇内面はナ デ調整	○灰褐色 ○良
	117					
	11-28	底 径 3.4		・内寄ぎみにたちあがる ・表面はわずかに凹凸が ある ○内外面ともナデ調整	・不安定な平底 ○内側から回しと って穿孔する〇外 面はナデ調整〇内 面は中心から放射 状にナデる	○褐色 ○良 ・器壁 5mm強・底 部に根脚あり
	118					
	11-28	器 高 13.0 (推定)		・内寄ぎみにたちあがる ○内外面ともナデる	・小さい平底 ○両側から認状の ものに回しとて 穿孔する〇外面は ナデる〇内面は危 状のもので削る	○淡褐色 ○良 紗質を多く 含む
	119	底 径 3.4				

器種	図版	法量	口 線 部	体 部	底 部	備 考
器 種 A: (7)	12-52 a 120	口 徑 12.0 (推定)	・斜め上方に短く外反す る・端部へ近づくほど厚 くなる・端部は面をもつ ○内外面ともヨコナデ			○茶灰色 ○良
	12-52 a 121	口 徑 15.2 (推定)	・斜め上方に短く外反す る・端部はわずかに下方 へ突出し、面をもつ ○内外面ともヨコナデ			○淡褐色 ○良
	12-52 a 122	口 徑 15.2 (推定)	・斜め上方に外弯する ・端部はわずかに下方へ 突出し面をもつ ○内外面ともヨコナデ			○褐色 ○良
	12-52 a 123	口 徑 12.0 (推定)	・斜め上方へたちあがる ・端部はわずかに外反し, 面をもつ ○内外面ともヨコナデ			○暗灰色 ○良 ・長頭蓋の口線部 とも考えられる
	12-52 a 124	口 徑 15.7 (推定)	・斜め上方に大きく外反 する・端部は下方へわざ かに突出し、面をもつ ○内外面ともヨコナデ			○灰褐色 ○良
	12-52 a 125	口 徑 13.8 (推定)	・斜め上方に外反する ・端部は下方へわざかに 突出し面をもつ ○内外面ともヨコナデ	・形態不明 ○外面はタタキ目〇内面 はナデ調整		○灰白色 ○良

筋種	固版	法 律	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
要 A <sub>1</sub>	12-	口 径 15.0 (推定)	・斜め上方に外反する ・端部は下方へわずかに突出し面をもつ ○内外面ともヨコナデ	・形態不明 ○外面はタタキ調整後、ナデる○内面は刷毛調整後、ナデる		○淡褐色 ○良
	126					
12-28	127	口 径 15.8	・短く外反し、端部はしっかりと突出した面をもつ ○内外面ともヨコナデ ○頭部外面は強くヨコナデし、わずかに凹む	・形態不明 ○外面はタタキ目○内面はナデ調整		○灰白色 ○良
12-29	128	口 径 14.2	・外弯する。端部はやや丸みをおびる ○内外面ともヨコナデ ○上縁部は強くナデる	・形態不明 ○外面はタタキ目○内面はナデる		○茶灰色 ○良
12-29	129	口 径 14.2	・頭部で縫をつくらずに外反する。上縁ほど薄くなり端部はわずかに面をもつ ○内外面ともヨコナデ○頭部は部分的に刷毛調整	・やや網の張った綫長の球形 ○外面はタタキ整形後、頭部から肩部にかけ刷毛調整		○赤褐色 ○軟
12-29	130	口 径 16.6 腹 径 20.6	・大きく外反する。端部は面をもち上下にするどい縫を有する ○内外面ともヨコナデ ○上縁部は強くヨコナデ	・網の張った綫長の球形 ○外面はタタキ調整後、刷毛調整○内面は上方をナデ調整後、刷毛調整(右→左)		○灰白色 ○良 ・下半に焼付着
12-29	131	口 径 15.4 腹 径 22.4	・やや上方に外反する ・端部下縫にするどい縫を有する ○内外面ともヨコナデ	・網の張った綫長の球形 ○外面はタタキ整形後、下半部を軽く昆削り調整(上→下)○内面は上半をヨコナデ、下半は強くナデる		○淡灰色 ○やや軟 小石粒を含む ・胸部中位に焼付着・下半部は赤く焼けている・上半に黒斑あり
12-52	132	口 径 20.0 (推定)	・斜め上方に外弯ぎみに外反する。端部は下方にわずかに突出し、面をもつ ○内外面ともヨコナデ			○茶褐色 ○良 霧母を含む ・河内産
12-29	133	口 径 19.3	・頭部から大きく外反する。端部に2条の沈線をほどこす ○内外面ともヨコナデ	・やや網の張る綫長の球形 ○外面はタタキ整形後、ていねいに刷毛調整○内面はナデる		○灰白色 ○良
12-29	134	口 径 12.7 腹 径 18.4 (推定)	・短く外反する。端部は面をつくる ○端部はつまむようにヨコナデ○内外面ともヨコナデ	・やや網の張った綫長の球形 ○外面はタタキ整形後、刷毛調整○内面はナデる		○灰白色 ○良
12-29	135	口 径 16.8	・短く外反する。上縁ほど薄くなり端部はわずかに面をもつ ○内外面ともヨコナデ ○頭部外面は刷毛調整後、ヨコナデ	・やや網のはった綫長の球形 ○外面はタタキ整形後、刷毛調整○内面は横方向の刷毛調整		○淡褐色 ○良

番号	回数	法量	口頭部	体部	底部	備考
A.	12-29	口 径 16.0	・頭部は上方にたちあがり口縁部は外寄する ○内外面ともヨコナデ	・綫長の球形 ○外面はタタキ整形後、粗い刷毛調整○内面は横方向にナデる		○灰褐色 ○軟やや砂質 ・下半に煤付着
	136	腹 径 21.1				
	13-30	口 径 15.9	・短く外反する・端部は面をもち、下方にわずかに突出する ○内外面ともヨコナデ	・綫長の副部 ○外面はタタキ整形○内面は上部が粗い刷毛調整、中位は強くナデる		○灰褐色 ○堅敏やや砂質 ・中位に煤付着 ・上部に斑塊あり
	137	腹 径 15.7				
	13-30	11 径 14.5	・短く外反する・端部は面をもつ・頭部に比して口縁部の筋膜は厚い ○内外面ともヨコナデ、下縁部はとくに強くヨコナデ	・綫長の副部 ○外面はタタキ整形○内面は上方がヨコナデ、中位は縱方向にナデ調整		○暗灰色 ○良 ・上部に斑塊あり ・体部成形後の11縁部の接合がよくわかる
	138	腹 径 16.5				
	13-30	口 径 16.9	・短く外反する・端部は上下にわずかに突出し、中央が凹む ○内外面ともヨコナデ	・綫長の球形 ○外面はタタキ整形後、刷毛調整○内面はナデる		○淡褐色 ○良 ・粘土絆の難日からみて巻き上げ手法
	139					
	13-30	口 径 15.6	・大きく外寄する・端部は面をもつ	・やや脇の張った綫長 ○外面はタタキ整形○内面は胸上部の刷毛調整(右→左)後ナデる(上半ヨコナデ、下半は下→上)		○淡褐色 ○良 ・上級部外側および胸部下半に煤付着
	140	腹 径 18.3	○内外面ともヨコナデ			
	13-31	口 径 17.9	・頭部内面にするとぞい縫をつくり外反する・端部はしっかりした面をもつ ○内外面ともヨコナデ ○頭部外縫は強くヨコナデし、わずかに凹む	・やや脇の張った綫長の球形 ○外面はタタキ整形による記号文 ○外面はタタキ整形後、上部を尾でナデる○内面は刷毛調整		○淡褐色 ○良 ・上部を除いて、ほぼ全面に煤付着
	141	腹 径 20.6				
	13-30	口 径 18.1	・短く外反する・端部は上方がたちあがりぎみ、下端はわずかに突出する ○内外面ともヨコナデ	・綫長の副部・接合部明瞭 ○外面はタタキ整形後、横方向の刷毛調整○内面はナデる		○淡茶灰色 ○やや軟砂質 ・中位に煤付着
	142	腹 径 17.1	○内外面ともヨコナデ			
	13-30	口 径 16.6	・斜め上方に外反する ・端部は面をもち、下方に突出	・ほぼ球形 ○外面は水平方向に近いタタキ整形の内面は削るようにナデる		○灰白色 ○良 ・中位に煤付着 ・新しい傾向を多くもつ
	143	腹 径 16.9	○内外面ともヨコナデ			
	13-30	口 径 13.7	・斜め上方に外反する ・端部は面をもち下方にわずかに突出する ○内外面とも頭部下方まで一気にヨコナデ	・綫長の副部・口径と腹径はほぼ等しい ○外面はタタキ整形後、刷毛調整、のちに上方をていねいにナデる○内面はナデ調整、上方に刷毛目に入る		○灰白色 ○良 ・下半に煤付着
	144	腹 径 14.1				
	13-31	口 径 23.6	・外反する・端部は面をもつ	・脇の張った綫長の球形		○褐色 ○良砂質 ・下半に煤付着 ・内外面とも風化が激しい
	145	腹 径 26.5	○内外面ともヨコナデ	○タタキ整形後、下半部を刷毛調整		

器種	図版	法量	口頭部	体部	底部	備考
蝶 A, III	14-52 a 146	口 径 12.2	・斜め上方に外反する ・上縁部はわずかに内弯し、端部は丸くおさめる ○内外面ともヨコナデ			○灰褐色 ○腹い
	14-52 a 147	口 径 17.3	・斜め上方に外反する ・端部は丸くおさめる ○内外面ともヨコナデ			○灰白色 ○具 砂粒を含む
	14-52 a 148	口 径 15.4	・斜め上方に外反する ・上縁部はわずかに内弯し、端部は丸くおさめる ○内外面ともヨコナデ ○内面の一部に刷毛目をのこす	・形態不明  ○外面はタタキ整形後、刷毛調整○内面はナデ調整		○灰褐色 ○良
14-31	149	口 径 15.6	・斜め上方に大きく外反する。端部は丸くおさめる ○内外面とも端部下方まで一気にヨコナデ	・やや脚が強る ○外面はタタキ整形後ナデる○部分的に刷毛目がのこる○内面は粗い刷毛調整		○灰白色 ○軟
14-31	150	口 径 17.6 器 高 26.3 腹 径 19.5 底 径 4.6	・斜め上方に外反する ・端部は丸くおさめる ○外面はヨコナデ後、頭部を刷毛調整○内面はヨコナデ	・縦長の球形 ○タタキ整形後、頭部を刷毛調整○中位下方の接合部はヨコナデ○内面はていねいなナデ調整	・突出ぎみの平底 ・底裏に木葉痕あり・中央が凹む	○灰褐色 ○堅穢 ・容器が薄い(中位で2.4mm)。頭部下半に傷付着
14-31	151	口 径 15.1 器 高 25.2 腹 径 19.9 底 径 4.6	・斜め上方に外弯する。中位がわずかにふくらむ ・端部は丸くおさめる ○体部をタタキ整形後、上方に粘土紐をまきつけ、接合部を刷毛調整し、最後に内外面ともヨコナデ	・頭上部はやや張る ○外面はタタキ整形(タタキが強く、のちにナデる?)○頭部下方の接合部はヨコナデ○内面上手は輻方向の粗いナデ調整、下半はていねいにナデる	・すこし突出した平底・中央部欠失	○灰褐色 ○良 ・胸部中位一下半に煤付苔・底部附近は火を受けて剥離・頭部に細痕あり
14-32	152 (推定)	口 径 16.0 器 高 27.7 腹 径 20.4 底 径 5.8	・斜め上方に大きく外反する。端部は丸くおさめる ○内外面ともヨコナデ	・刷上部はやや張る ○外面は頭部から刷毛調整	・すこし突出した平底	○灰褐色 ○軟 小心性を含む ・胸部中位に煤付苔・下半は赤く焼ける
14-32	153	口 径 15.3 器 高 22.7 腹 径 17.4 底 径 5.1	・短く外反する。端部は丸くおさめる ○内外面ともヨコナデ	・縦長の球形。中位上部は欠失 ○内面は横方向の刷毛調整	・突出した平底 ○側面・内面ともナデ調整	○灰褐色 ○良 ・器高は推定
15-32	a 154	口 径 13.6	・斜め上方に外反する ・端部は丸くおさめる ○内外面とも刷毛調整後、ヨコナデ			○淡褐色 ○良
15-32	155 (推定)	器 高 16.0 腹 径 12.2 底 径 3.8	・形態不明 ○頭部下端はヨコナデ	・縦長の球形。上端部に1条の沈線をほどこす ○外面タタキ整形後、粗い刷毛調整○内面上半ヨコナデ、下半刷毛調整(下→上)	・突出した平底 ○側面・内面ともナデる	○褐色 ○堅穢

器種	図版	法 番	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
斐 A: 15	15-32	口 径 11.4 脣 高 16.9 腹 径 12.5 底 径 4.4	・斜め上方に外反する ・端部は丸くおきめる ○上縫部から頭部にかけ て刷毛調整後、上縫部を ヨコナデの頭部内面はヨ コナデして面をつくる	・綫長の球形	・突出した平底 ・厚い ○外面はタタキ整形後、 長い刷毛調整○内面は刷 毛調整後、上半部を逆方 向に荒削り	○灰褐色 ○良 砂粒を含む ・底部に黒斑あり
	156				○底裏を叩く ○内面はナデる	
斐 B: 15	15-52 a	口 径 10.5	・斜め上方に外反する ・中位で下方にわずかに 肥厚する ○内外面ともヨコナデ			○灰褐色 ○良
	157					
斐 15	15-33 a	口 径 11.4	・短く外反する・端部は 面をもつ・中位で下方に わずかに肥厚する ○内外面ともヨコナデ	・やや脣が張った綫長		○灰褐色 ○良
	158	腹 径 12.2		○外面はタタキ整形後、 中位を横方向の刷毛調整 ○内面は刷毛調整（右→ 左）		・体部中位に埋付 着、下半は刺繍が 著しい
斐 15	15-52 a	口 径 16.9	・斜め上方に外反する ・中位で下方にわずかに 肥厚する ○外面はヨコナデ○内面 は刷毛調整後、ヨコナデ			○淡褐色 ○良
	159					
斐 15	15-33 a	口 径 15.5	・外反する・中位で下方 にわずかに肥厚する・端 部は中央がやや凹む ○内外面ともヨコナデ	・脣部上半が張る綫長の 球形		○灰褐色 ○堅穢
	160	腹 径 19.7		○外面はタタキ整形後、 刷毛調整○内面はナデ調整		・体部上方は風化、 下半に埋付着・体 部の形態は斐Eに 似る
斐 15	15-33 a	口 径 18.5 腹 径 20.0	・短く外反する・中位で 下方にわずかに肥厚する ・端部は面をもつ ○外面はヨコナデ○内面 は刷毛調整（右→左）	・脣部上半が張る・外面 はズソゴソした感をあた える		○灰褐色 ○良
	161			○外面はタタキ整形後、 刷毛調整（上方に着しい） ○内面上方は指ナデ、中 位は刷毛調整○接合面不 整合		・脣部中位に埋付 着
斐 15	15-33 a	口 径 16.8 腹 径 20.8	・外反する・中位で下方 にわずかに肥厚する・端 部は下方にわずかに突出 する ○内外面ともヨコナデ ○上縫部内面は強くナデ る	・脣部上半が張る綫長の 球形		○淡褐色 ○良
	162			○外面はタタキ整形後、 最大腹径のところを構方 向に刷毛調整、接合部を とのえる○内面は下半 部を刷毛調整後、上半を つくりつけナデ調整		・脣部下半に埋付 着
斐 15	15-33 a	口 径 14.7 腹 径 16.0	・短く外反する・中位で 下方に肥厚する・端部は 面をもつが、やや不整形 ○内外面ともヨコナデ	・綫長の球形 ○外面はタタキ整形後、 上方をナデる○内面はナ デ調整		○灰褐色 ○良
	163					・黒斑あり
斐 15	15-33 a	口 径 16.4 腹 径 17.9	・斜め上方にたちあがる ・上縫部に面をもつ ○内外面ともヨコナデ ○頭部にタタキ目をのこ す	・脣上部がやや張る ○タタキ整形後、刷毛調 整		○褐色 ○軟 ・47（豪）と殆 どよく似ている ・埋付着
	164					

岩種	固 族	法 量	口 断 部	体 部	底 部	備 考
斐 B. (2)	15-33	口 径 14.3	・短く外反し、上縁部ではわずかに内弯する。中位でわずかにふくらむ ○内外面ともヨコナデ	・網上半の張る縦長の球形 ○外面タキ整形後でいねいな刷毛調整○内面は刷毛調整(下→上)後、軽くナデる		○灰褐色 ○やや軟 ・体部中位が赤い ・墨斑あり
	165 (推定)	腹 径 19.8				
斐 C (1)	15-34	口 径 16.0	・短く外反し、上縁部ではわずかに内弯する。中位で内側にわずかにふくらみ、端部は外側に棱を有する ○内外面ともヨコナデ	・網上半の張る縦長の球形 ○外面タキ整形後、最大膨脹性のところを横方向の刷毛調整して接合部をとのえる○上方部はナデる○内面は下半部を刷毛調整後、上下をつくりつけナデ調整		○淡灰色 ○良 ・網部中位に墨付着
	166	腹 径 19.8				
斐 D (1)	16-34	口 径 15.5	・斜め上方に外弯ぎみにたちあがる。端部に凹をもつ ○外面は網部までづく刷毛調整○頭部は軽くヨコナデ○内面はヨコナデ	・形態不明 ○外面はタキ整形後、刷毛調整○内面は刷毛調整		○褐色 ○やや軟 ・外面と内面の刷毛層体は異なる
	167	腹 径 11.2				
斐 E (2)	16-34	口 径 12.3	・短く外反する。端部断面は矩形をなす	・底部から斜め上方に内弯しながらたちあがり、上方ではほぼ垂直となる ・接合痕がのこる ○外面は細かい刷毛調整後横方向の荒磨き○内面はナデ調整	・底裏が凹面を呈する平底	○茶褐色 ○良 墓母をわずかに含む ・網上半に墨付着、内面下半もスケたような状態・底部周辺は赤く焼ける
	168	底 径 4.2	○内外面ともヨコナデ ○体部との接合部は強くなでつける		○側面および底裏は荒削り○内面は部分的に削る	
斐 E (2)	16-56 a (推定)	口 径 13.5	・受口状口縁・頭部内面は縦線を有する ○内外面ともヨコナデ			○灰褐色 ○良
	169					
斐 E (2)	16-56 a (推定)	口 径 14.8	・受口状口縁・端部は丸くおきめる。たちあがり部に3条の浅い沈線をほどこす・頭部で器壁が薄くなる・頭部内面に接合痕明顯 ○内外面ともヨコナデ	・形態不明 ○外面の一部に刷毛目がのこる		○灰褐色 ○良
	170					
斐 E (2)	16-56 a 171	口 径 15.2	・受口状口縁・たちあがり外縁に1条の沈線をほどこす・たちあがり部も外反する ○内外面ともヨコナデ			○褐色 ○軟 小石粒を含む
斐 E (2)	16-56 a 172	口 径 16.7	・受口状口縁・たちあがり部はやや外反ぎみ ○たちあがり部は軽くを外側から貼り付け、ヨコナデ○内面はヨコナデ			○灰褐色 ○直い 砂質 ・外面に墨付着
斐 E (2)	16-34	口 径 17.7	・受口状口縁・端部はやや丸味をわびる。頭部内面にすると深い後縫を有する ○内外面ともヨコナデ	・下半欠失・いくぶん球形に近い ○外面はタキ整形後、刷毛調整○内面は刷毛調整(下→上)後、下半部をナデる		○淡茶褐色 ○良 ・外面に墨付着
	173	腹 径 22.2				

器種	因版	法 景	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
E	16-34 174	口 径 16.8 忍 高 28.4 腹 径 22.3 底 径 4.8	・受口状口縁・顎部から短く外反し、上半部でたちあがる・端部は面をもつ ○内外面ともヨコナデ	・艇長のイチジク形 ○外面はタタキ整形後、刷毛調整○内面は粗い刷毛調整後、上半部と下半部のみをナデる	・中央部の団んだ平底	○淡茶灰色 ○やや軟 ・体盤中位に擦付點、下半は赤く焼ける・肩部内面に指圧痕
	16-56 175	口 径 14.0 (推定)	・受口状口縁・たちあがり部はやや外反ぎみ・外反部上方は若干圓む ○内外面ともヨコナデ			○灰褐色 ○良 小石粒を含む
	16-56 176	口 径 17.7	・受口状口縁・たちあがり部はやや外反ぎみ・端部は外側にわずかに突出する・外面に櫛原体による列点文をめぐらす ○内外面ともヨコナデ			○灰白色 ○良 砂質 ・近江系
	16-34 177	口 径 17.3	・受口状口縁・たちあがり部との境に1条の沈線をほどこす・たちあがり部下端に刷毛原体による列点文をめぐらす・外反部器壁厚い ○内外面ともヨコナデ	・形態不明 ○外面は刷毛調整○内面はナデ調整		○淡灰褐色 ○堅鐵 ・外反部の器壁は1cmと厚い ・近江系
	16-34 178	口 径 17.1	・受口状口縁・端部は内傾して面をもつ・たちあがり部外面に櫛原体による列点文をめぐらす ○内外面ともヨコナデ	・大部分欠失・上部に9条の櫛引き直線文をほどこし、その下に刷毛引き列点文をめぐらす ○外面は刷毛調整○内面はヨコナデ		○淡灰褐色 ○良 ・近江系
	16-34 179	腹 径 20.0		・形態不明・上部に9条と7条の櫛引き直線文をほどこし、その下に刷毛引き列点文をめぐらす ○外面の一帯に刷毛目をのこす○内面はナデる		○灰白色 ○良 若干の石英粒を含む ・外面は風化著しい ・近江系
	16-34 180	口 径 16.4 腹 径 22.6	・受口状口縁・たちあがり部外面に刷毛原体による列点文をめぐらす ○外面はタタキ整形後、刷毛調整、上方部は口縁部をヨコナデ後、異なる刷毛原体でいいねいにはどこす○内面は刷毛調整(右→左)			○淡茶褐色 ○堅鐵 わざかに雲母粒を含む ・近江系
	17-56 181		・受口状口縁・たちあがり部外面に櫛原体による列点文をめぐらす ○内外面ともヨコナデ	・やや廣の張る胴長の球形と思われる・上方に9条下方に9条(?)の櫛引き直線文をほどこし、その間に櫛原体による列点文をめぐらす ○外面は刷毛調整後、軽くナデる。内面は縦方向のナデ調整		○灰褐色 ○堅鐵 ・近江系

器種	固 族	法 量	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
寶 E	17-56 a			・わずかに肩の張った蝶形と思われる。上方に櫛描き直線文(4条以上)と列点文をめぐらし、下方に櫛描き波状文をほどこす ○外面は縱方向の刷毛調整○内面は横方向に指ナデ		○灰白色 ○良 • 近江系
	182					
	17-56 a 183			・頭長の蝶形か ○外面ハケ調整○内面はナデ調整		○淡褐色 ○良 • 黒斑あり • 近江系
寶 慈 CP 02	17-56 a 184			・形態不明。上方に4条の櫛描き波状文をほどこす ○外面は縱方向の刷毛調整○内面は横方向の刷毛調整		○暗灰色 ○堅穢 • 煙付者 • 近江系
	17-56 a 185			・形態不明。肩部に8条の櫛描き直線文、列点文を2段にめぐらす ○外面は刷毛調整○内面はナデ調整		○灰白色 ○良 砂粒を多く含む • 近江系
	17-56 a 186			・形態不明。下方に5条(?)の櫛描き波状文をほどこす ○外面は縱方向の刷毛調整○内面はナデ調整		○灰白色 ○良 若干の砂粒を含む • 煙付者 • 近江系
寶 慈 CP 02	17-55 b 187	底 径 4.6		・形態不明 ○外面はタタキ整形○内面は刷毛調整	・わずかに突出した平底 ○側面ヨコナデ○底蓋を強く指ナデ	○暗褐色 ○良 • 黒斑あり
	17-55 b 188	底 径 5.4		・形態不明 ○外面はタタキ整形○内面は尾で調整	・突出した平底 ○側面はヨコナデ	○灰白色 ○良
	17-55 b 189	底 径 6.0		・形態不明 ○外面はタタキ整形○内面はナデ調整	・平底 ○側面は指ナデ ○底裏はナデ調整	○暗褐色 ○良
寶 慈 CP 02	17-55 b 190	底 径 4.3		・形態不明 ○外面はタタキ整形後ナデ調整○内面はナデ調整	・突出した平底 ○側面はヨコナデ ○底裏は荒削り	○灰白色 ○良
	17-55 b 191	底 径 7.6		・形態不明 ○外面手法不明○内面は棒状のものでナデる	・平底 ○側面はヨコナデ ○底裏は荒削り	○灰褐色 ○良 砂粒を含む • 外面は赤く焼け、剥離している
	17-55 b 192	底 径 5.9		・形態不明 ○下方外面タタキ整形○内面は刷毛調整後ナデる	・わずかに突出した平底 ○側面は粗い刷毛目がのこる	○暗灰色 ○良 • 煙付者

器種	固版	法景	口類部	体部	底部	備考
寶底部	17-55 b 193	底径 5.7		• 形態不明 ○下方外表面はタタキ整形後ナゲる(?)○内面はナゲ調整	• 突出した平底 • 中央部が凹む ○側面はヨコナゲ	○褐色 ○良
	17-35 194	底径 3.7		• 形態不明 ○内面は指ナゲ	• すこし突出した平底	○赤褐色 ○やや軟 • 風化が激しい
	17-35 195	底径 5.8		• 形態不明 ○外表面はタタキ整形○内面は刷毛調整(右→左)	• すこし突出した平底 ○側面は部分的に刷毛調整○内面はナゲ調整	○灰白色 ○良
	17-55 b 196	底径 5.2		• 形態不明 ○外表面はタタキ整形○内面は底部を逆調整後、刷毛調整	• 突出した平底 ○側面はヨコナゲ	○淡褐色 ○良
	17-197	底径 4.9		• 形態不明 ○外表面はタタキ整形○内面はナゲ調整	• すこし突出した平底 ○側面はヨコナゲ	○褐色 ○良 • 煤付着
	17-55 b 198	底径 5.4		• 形態不明 ○外表面は底部までタタキ整形○内面は刷毛調整	• 平底	○灰褐色 ○良
	17-55 b 199	底径 4.5		• 形態不明 ○外表面はタタキ整形○内面はナゲ調整	• 突出した平底	○褐色 ○良 • 黒斑あり・底裏に鉛粒痕(?)あり
	17-200	底径 4.3		• 形態不明 ○外表面はタタキ整形後、ていねいな刷毛調整○内面手法不明	• すこし突出した平底・中央部がわずかに凹む ○側面はナゲる ○内面は刷毛原体でかきとる	○黒褐色 ○良 • 体部内面の風化が激しい
	17-35 201	底径 5.0		• 形態不明 ○外表面はタタキ整形○内面は刷毛調整(右→左)	• 平底・底裏に爪痕がある ○内面は指ナゲ	○灰白色 ○やや軟 • 底部の風化が激しい
	17-35 202	底径 5.5		• 形態不明 ○外表面はタタキ整形後、粗い刷毛調整○内面は横方向の刷毛調整、下方は縦方向の刷毛調整	• すこし突出した平底・底裏は凹面を呈する ○側面・内面はナゲ調整○底裏は刷毛調整	○灰褐色 ○良 • 煤付着・31と似る
	17-35 203	底径 5.9		• 形態不明 ○外表面はタタキ整形後、部分的にナゲる○内面は刷毛調整	• 突出した平底 • 底裏に木瘤痕あり	○暗灰色 ○良・雲母を含む • 中位に煤付着 • 内面に炭化物が付着する

表 6 井戸 1 出土土器観察表

器種	図版	法量	口頭部	体部	底部	備考
壺 R	19-36 1	口 径 10.0 器 高 12.7 腹 徑 12.3 底 徑 5.0	・上方にたちあがり、上 縁で外反する。端部は丸 くおきめる。頸部内面に 接縫を有する。 ○外面はヨコナデの内面 は横方向の凹起き	・球形に近い。下位に おい接縫を有し、側曲部 あり。 ○外面はていねいな右下 りの凹起き。○内面は刷毛 調整後、ナデ調整	・平底	○灰黄色 ○良 砂粒を含む ・副部下位に黒斑 あり
	19-56 2 b	口 径 7.6 現存高 4.3 腹 徑 8.1	・11號部は頸部からあが り端部は丸くおきめる ○内外面ともヨコナデ	・大平欠失。球形 ○外面はナデ調整の内面 は凹起きのあとナデ調整		○灰白色 ○良 ・外面に煤付着
	19-36 3 T	口 径 14.0 腹 徑 22.5	・内湾ぎみにたちあがっ た後、水平方向へ外反す る。端部は上方へ突出し、 面をもつ。 ○頸部外側刷毛調整後、 口縫部内外面ともヨコナデ	・下平欠失。球形に近い ○外面は刷毛調整の内面 はナデ調整後、中位下平 を削り		○暗茶褐色 ○良 黒母の微粒 を含む ・外来系
鉢 C <sub>1</sub>	19-37 4	口 径 15.5 器 高 10.8 底 徑 4.0	・斜め上方へのび、端部 はうすくおわる ○外面はヨコナデの内面 は刷毛調整	・斜め上方へひろがる ○外面タキ成形〇内面 は刷毛調整後、ナデ調整	・不整形な丸底 ○粗く削りして 底部を整形する ○内面に刷毛目が のこる	○暗灰色 ○良 砂質 ・体部に黒斑あり
	19-37 5	口 径 14.3 器 高 9.7 底 徑 3.5	・斜め上方へのび、端部 はうすくおわる ○内外面とも刷毛調整	・斜め上方へひろがる ○外面タキ成形後、内 外面をていねいな刷毛調 整	・丸味をおびた平 底	○暗褐色 ○良 ・内面の剥離激し い・体部下位に黒 斑あり
鉢 C <sub>2</sub>	19-37 6	口 径 18.5 現存高 7.0	・斜め上方へ内湾ぎみに たちあがる。端部は面を 有し内側へわずかに突出 する。 ○内外面ともヨコナデ	・斜め上方へひろがる ○外面手法不明〇内面凹 起き		○灰褐色 ○良 ・外側の風化が激 しい
器種	図版	法量	環部	脚部	備考	
高环 A	19-36 7	現存高 8.9 底 徑 12.3	〔底部〕・大平欠失 ○内外面とも凹起き〇脚部との境は、 粘土接着つけ	・中実の柱状部は斜め下方へのび 麻部は大きく開く。脚部に外側か ら3孔を穿つ ○外面は縦方向の凹起き〇内面は 刷毛調整後、ナデ調整		○灰白色 ○良 砂質 ・脚部下端は風化 が激しい
	19-56 8 b	底 徑 3.0	・斜め上方へ外反する			○淡褐色 ○良 砂粒を多く 含む ・内外面とも風化 が激しい
壺 A	19-37 9	腹 徑 20.8	・斜め上方へ外反する ・頸部内面に接縫を有す る ○内外面ともヨコナデ	・脚部下平欠失。球形を 呈する。内面に接合痕あり ○外面タキ成形〇内面 ナデ調整、削りあり		○淡灰褐色 ○良 砂粒を含む ・体部中位に煤付 着
	19-56 10 b	口 径 15.1	・斜め上方にたちあがり、 端部はわざかに面をもつ。 頸部内面にいよいよ接縫あり ○外面調整不明〇内面は 刷毛調整後、ヨコナデ	・大平欠失。球形に近い と思われる		○灰褐色 ○良 砂粒を多く 含む ・外側風化・脚部 は薄い

器種	回数	法量	口頭部	体部	底部	備考
斐 A <sub>4</sub>	19-37	口 径 13.7 器 高 22.3 腹 径 15.4 底 径 4.0	・上方へたちあがったの ち上縁は外反する。端部 は丸くおわる。頭部内面 に接線を有する ○内外面ともヨコナデ	・縦長の球形	・小さな平底	○灰白色 ○良 小石粒含む ・頭部以外全面に炭化物 部内面炭化物付着、 外縁は赤く焼ける
	19-38	口 径 13.8 器 高 21.6 腹 径 15.2 底 径 2.4	・上方へたちあがったの ち短く外反する。端部は わずかに面をもつ。頭部 内面に接線を有する ○内外面ともヨコナデ	・縦長の球形。内面に接 合痕あり  ○外面は底面までタタキ 成形後、部分的に縦方向 の刷毛調整のあと、ナデ 調整	・小さな平底  ○底裏にタタキ目 を有する	○淡褐色 ○良 小心穀を含む ・体部外側中位に 窓、同内側中位以 下に炭化物付着 ・体部下半部周 辺は赤く焼ける
斐 F <sub>4</sub>	20-56 b	口 径 18.3	・斜め上方へ外反する。 端部はわずかに上方へ突 出し面をもつ。端面に1 条の沈線をほどこす。頭 部内面に鋸い接線を有する ○内外面ともヨコナデ			○茶褐色 ○良 砂質、雲母 片を含む ・洞内底
	20-38	口 径 18.1 器 高 25.9 腹 径 23.3 底 径 1.6	・斜め上方へ外反する。 端部は上方へわずかに突 出し面をもつ。頭部内面 に鋸い接線を有する ○外面はヨコナデ○内面 手法不明	・球形 ○外面は細かいタタキ成 形後、底部近くから上方 へ部分的に刷毛調整○内 面上半は横(左→右)方向、 下半は底部から上方への 逆削り	・尖底ぎみで、わ ずかに面をもつ  ○底部周辺のタタ キ目は不定方向	○暗茶褐色 ○良 砂質、雲母含 む ・口縁部、体部中 位、下平に煤付着 ・体部内面中位以 下に炭化物付着 ・洞内底
斐 15	20-38	口 径 19.3 器 高 27.0 腹 径 25.0	・斜め上方へ外反する。 端部は上方へわずかに突 出し面をもつ。頭部内面 に鋸い接線を有する ○内面刷毛調整後、内外 面ともヨコナデ	・球形 ○外面は細かいタタキ成 形後、縫に鋸い刷毛調整 (上→下)。さらに細かい 刷毛調整を底部から放射 状に上方へほどこす○内 面は上半が横(左→右) 方向、下半は底部から上 方への逆削り	・尖底・内面に指 押痕あり	○茶褐色 ○良 砂質、雲母 片を含む ・体部中位・下半 に煤付着、内面中 位以下に炭化物付 着 ・洞内底
	20-37	口 径 17.3 腹 径 18.5	・斜め上方へ外反する。 端部は上方へわずかに突 出し面をもつ。頭部内面 に鋸い接線を有する ○内面刷毛調整後、内外 面ともヨコナデ	・球形。下平欠失 ○外面は細かいタタキ成 形後、鋸い刷毛調整、の ちさらに中位に細かい刷 毛調整○内面上半は横方 向、中位は縦方向の逆削り		○淡茶褐色 ○良 小石粒を含 む ・体部中位に煤付 着 ・洞内底
斐 G	20-37	口 径 14.6 腹 径 18.4	・斜め上方へ外反する。 ・端部は上下に突出して 面をもち、2条の擬凹線 をほどこす。頭部内面に に鋸い接線を有する。頭 部内面に接合痕 ○内面刷毛調整後、内外 面ともヨコナデ	・やや肩の強った球形		○茶褐色 ○良 雲母片を含 む ・口縁部下方・副 部中位以下に煤付 着 ・洞内底
	20-56 b	底 径 3.9			・平底・底裏中央 はわずかに凹む ○側面はタタキ成 形○内面はナデ調 整	○灰白色 ○良 小石粒を含 む ・外面は煤付着 ・内面に炭化物付着

表7 井戸2出土土器観察表

器種	図版	法量	口頭部	体部	底部	備考
壺 Q	20-38 19	腹 径 20.9 底 径 5.5	・口縁部欠失・頸部は直立し、下端に貼付け凹帯を有する。体部との境間に指痕麻あり ○外面ヨコナデ後、凸唇に尾原体による刻目文をめぐらす○内面横方向の刷毛調整	・やや頸の張った球形 ○外面は中位を横方向の彫磨き後、右ドリの尾磨きを施めていねいにはほどこす○内面上半は横(右→左)方向、下半は左上りの刷毛調整	・平底	○暗灰色 ○良 ・体部中位・底部に黒斑あり ・器壁が厚い(3-6mm)
	20-57 ■ 20	底 径 4.5			・平底・内曲中央および底裏に凹みあり。底裏に木葉痕あり ○外面は尾磨き ○内面は刷毛調整後、ナデ開盤○クモの巣状模様有り。	○灰白色 ○良 ・黒斑あり ・内面に炭化物付着
高 壺	20-57 ■ 21		[口縁部]・欠失 (底部)・杯底部内面は水平で、口縁部は傾曲して斜め上方へのびる ・傾曲部外縁に縫を有する ○内外面とも尾磨き			○淡褐色 ○良
	20-39 22	脚部高 8.5 底 径 15.5	・环部欠失	・中空の柱状部は斜め下方へのび、脚部は屈曲して大きく開く・端部はうすくおわる・脚部に3孔を穿つ ○柱状部外縁は縱方向の彫磨きか ○柱状部内面は水平方向の捺状痕あり、上半は指ナデ○脚部は内面とも刷毛調整(外面で刷毛原体異なる)○脚部はヨコナデ		○淡茶褐色 ○良
	20-57 ■ 23			・柱状部は斜め下方へのび、脚部は屈曲してひろがる・脚部に3孔を穿つ・柱状部内面は凹む ○内外面手法不明		○淡茶褐色 ○良 ・内外面とも風化が激しい
甕 F <sub>1</sub>	21-39 24	口 径 14.7 腹 径 17.0	・斜め上方へ外反する ・頸部はわずかに上方へたらちあがり、底をもつ ○内面刷毛調整のあと、内外面ともヨコナデ	・下半欠失・ほぼ球形 ○外面は細かいタタキ成形後、中位を縦(下→上)方向の刷毛調整 ○内面は右上りの尾削り		○淡茶褐色 ○良　書母片を含む ・体部中位に媒付着・外來系
	21-39 25	口 径 15.2 器 高 16.8 腹 径 17.7	・頸から外反する・頸部はわずかに面をもち、1条の沈線を有する・頸部内面に鋸い稜縫を有する ○外面は体部の刷毛調整後、体部上方より一気にヨコナデ○内面は横方向の刷毛調整ヨコナデ	・やや頸の張った球形 ○外面はタタキ成形後、上半を縦(上→下)方向の刷毛調整のあと、中位を横(左→右)方向の刷毛調整、その後下半を底削りから上方へ放射状に刷毛調整○内面上半が縦(左→右)方向、下半縦(下→上)方向の尾削り	・尖底・内面に指痕え痕あり	○灰白色 ○良 ・口縁部外面・体部中位以下に媒付着

器種	図版	法量	口頭部	体部	底部	備考
甕 F <sub>2</sub>	21-39 26	口 径 15.2 器 高 16.0 腹 径 17.5	・斜め上方に短く外反する。端部は丸くおさめる ○外側の一部に刷毛調整がおよぶ○内外面ともヨコナデ	・球形 ○外側はタタキ成形後、上半を細かな刷毛調整、中位を横（左→右）方向の刷毛調整後。下半を底部から上方へ放射状に一気に刷毛調整○内面は上方が横（右→左）方向、下方が縦（下→上）方向の荒削り	・尖底・内面に指押え痕あり ○内面荒削り後、底部付近わずかにナデる	○灰白色 ○良 ・口縁部外側、体部中位以下に煤付有 ・底部内面に炭化物付有

表8 土塙1出土土器観察表

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
鉢 C	21-40 27	口 径 32.1 器 高 18.6 腹 径 32.5 底 径 4.9	・内面がみにたちあがり直口する。内外面に接合痕有 ○内外面ともヨコナデ	・斜め上方へひろがる ○外側タタキ成形後、縦方向の荒削き、部分的に刷毛目残る○内面は全面にわたり刷毛調整後、中位以下を横方向の荒削き	・平底・内面に凹みあり ○内面は縦方向の荒削き後、さらに横方向の荒削き	○灰白色 ○良 小石粒を含む ・内外面とも風化が激しい

器種	図版	法量	坏部	脚部	備考
高 环	21-39 28	脚部高 10.7 底 径 16.0	・坏部欠失	・中空の柱状部は、ややふくらみをもって下方へのび。脚部は彎曲して大きくひろがる。端部はうすくおわる。脚部に3孔を穿つ ○柱状部天端は粘土被壠○柱状部外側は縦方向の荒削き○内面はしばり目を残す○脚部外側は刷毛調整のあと荒削き○内面は刷毛調整のあとナデる	○灰白色 ○良 砂質

器種	図版	法量	口頭部	体部	底部	備考
甕 A <sub>3</sub>	21-40 29	口 径 17.9	・斜め上方に外寄する ・端部は外方に曲をもつ ・頭部内面に接有する ○内外面ともヨコナデ	・下部欠失 ○外側はタタキ成形後、軽くナデる○内面はナデ調整		○灰白色 ○良 小石粒を多く含む ・風化が激しい
甕 F <sub>1</sub>	21-40 30	口 径 13.5 腹 径 19.7	・斜め上方へ外反する ・端部はわずかに上方へ突出し曲をもつ・頭部内面に接有する ○内外面ともヨコナデ	・下部欠失。球形と思われる。外側に接合痕あり ○外側は細かいタタキ成形、部分的に荒ありがある○内面は刷毛調整後ナデる		○灰白色 ○良 砂粒を多く含む ・全面に煤付有
甕 F <sub>2</sub>	21-39 31	口 径 18.2 器 高 24.1 (推定) 腹 径 22.7	・斜め上方へ外反する ・端部は曲をもち、1条の沈縫をほどこす・頭部内面に鋸い棱線を有する ○外側はヨコナデ○内面は刷毛調整	・球形 ○外側はタタキ成形後、体部中位を縦方向に細かい刷毛調整、さらに体部下半を底部から上方へ放射状に刷毛調整のあと、底部周辺を横方向に刷毛調整○内面は上半を横（左→右）方向、下半を縦（下→上）方向の荒削り	・底部欠失・丸味をおびた尖底と思われる	○淡褐色 ○良 砂質體良 ○わずかに笠母片を含む ・体部中位以下に煤付有

表 9 井戸 3 出土土器観察表

器種	固版	法量	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
壺 A	22-40 1	口 径 24.8 高 度 10.7 腹 徑 12.9	・上方へたちあがった頭部から、いったん大きく水平方向へ外反し瓶口部を形成し、その後上方へ外反する口縁部をとりつける。瓶部は下方へわずかに突出する。壺部は丸くおさめる ○内外面ともヨコナダ後横方向の施解き			○淡茶褐色 ○良
壺 D	22-40 2	口 径 10.7 器 高 11.7 腹 徑 12.9	・斜め上方へ大きくなっている。瓶部は薄くおわる ○瓶部外面はわずかに凹む ○内外面刷毛調整後、内外ともヨコナダ	・脇の張った球形 ○外面は刷毛調整のあとナデる。内面は上手が横(右→左)方向、下手が左上りの施削り	・丸底	○淡茶褐色 ○良 壓織 砂粒を多く含む ・口縁部・体部中位以下外側に焼付着
壺 E	22-40 3	口 径 11.8 器 高 16.3 腹 徑 15.1	・斜め上方へ丸くなっている。上縁でわずかに外反する ○内外面ともヨコナダ	・球形 ○外面は刷毛調整後、口縁部から肩部にかけてヨコナダ。内面は浅い施削り	・丸底・内面に粘り焼付着。底裏に凹みあり ○外面は刷毛 2~3 帯を単位として縱横に刷毛調整	○淡茶褐色 ○良 砂粒を含む ・外周体部中位に横幅(6 mm × 3 mm) ・口縁部・体部中位外面に焼付着 ・外周風化する
器種	固版	法量	杯 部	脚 部		備 考
高杯 B	22-40 4-	口 径 15.1 杯部高 6.4	[口縁部]・壺状の体部から口縁部へ外反し、瓶部は薄くおわる ○内外面とも手法不明 [底部]・欠失	・脚部欠失		○灰白色 ○良 砂質 ・内外面とも風化が激しい
高杯脚部	22-40 5		・杯部欠失	・柱状部は斜め下方へび、瓶部は大きくなりがる。柱状部は中空で、内面にしばり目を有する。脚部欠失 ○柱状部外縁は施磨きか。内面擦部との境に指痕あり。内面は刷毛調整		○淡褐色 ○良 ・外周は風化している
器種	固版	法量	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
壺 A	22-41 6	口 径 13.9 器 高 21.3 腹 徑 19.0	・斜め上方へたちあがる ・壺部内面は肥厚し、上端は薄をもつ。瓶部外縁はわずかに凹む ○内外面ともヨコナダ	・球形 ○外面は細かい左下りの刷毛調整のあと、口縁部から肩部にかけてヨコナダ。内面は上手が横(左→右)方向、下手が左上りの浅い施削り	・丸底・内面に指痕あり ○外面は刷毛 2~3 帯を単位として底部を覆うように縱横に刷毛調整	○灰白色 ○良 ・口縁部・体部中位、下手外面に焼付着。体部下手内面に炭化物付着
壺 C	22-41 7	口 径 14.9 腹 徑 21.5	・斜め上方へたちあがる ・壺部内面は肥厚し、上端は薄をもつ。瓶部外縁はわずかに凹む ○内外面ともヨコナダ	・球形・下手欠失 ○外面は刷毛調整後ナデ調整、肩部はヨコハケ ○内面は左上りの施削り		○灰白色 ○良 ・体部中位外側に、同内面炭化物付着
	22-41 8	口 径 15.9 器 高 23.8 (推定) 腹 徑 21.0	・斜め上方へ外反する ・壺部は丸くおさめる ○外面はヨコナダ。内面は刷毛調整後、ナデる	・長脚形 ○外面は縦方向の刷毛調整。内面は左上りの施削り	・丸底か・内面に指痕あり ○外面は刷毛 2~3 帯を単位として底部を覆うように縦横に刷毛調整	○灰白色 ○良 ・口縁部・体部中位外面に焼付着

表10 井戸4出土土器観察表

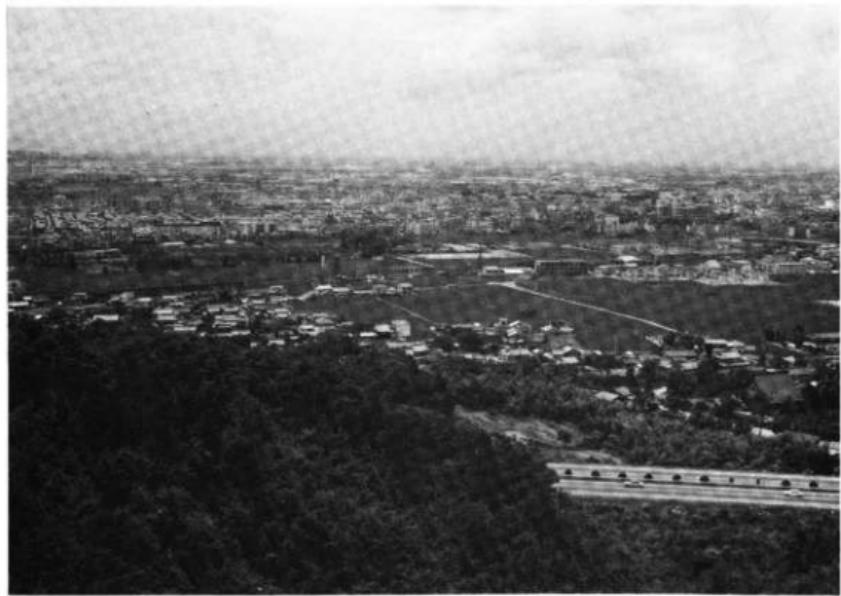
器種	図版	法量	口頭部	体部	底盤	備考
壺 A <sub>2</sub>	23-41 9	現存高 腹径	・口縁部欠失・頸部はほぼ垂直にたちあがる ○内外面ともヨコナデ	・腰の張った球形 ○外面は横方向の細かい尾突き○内面は上平をナデ調整、下平を尾ナデ	・尖りぎみの丸底	○淡茶褐色 ○良 ・体部下半に黒斑 ・口縁部は打欠かれる
	23-42 10	口徑 器高 腹径	・頭部で外寄して内寄ぎみにたちあがる ○内面および外面（口縁部～肩部）ヨコナデ	・肩の張った球形・肘部下辺に、にぼい縦線を有する ○外面は刷毛調整後、軽くナデる○内面は尾削り	・丸底	○灰白色 ○良 ・口縁部～底部に黒斑あり・中位以下端付着
小形丸底壺 D <sub>2</sub>	23-42 11	口徑 器高 腹径	・内寄ぎみにたちあがる ○内外面ともヨコナデ	・肩の張った球形 ○外面はナデ調整・内面は尾削り	・丸味をおびた平底	○灰褐色 ○良 ・体部小位に黒斑
	23-42 12	口徑 器高 腹径	・斜め上方へ内寄ぎみに外反する ○内外面ともヨコナデ	・球形 ○外面は刷毛調整のあとナデる○内面は指ナデ調整	・丸底	○灰白色 ○良 ・口縁部・肩部に黒斑
小形粗製土器	23-41 13	口徑 器高 腹径	・斜め上方へ内寄ぎみに外反する・頭部内外面に稜線あり ○内外面ともヨコナデ	・腰の張った球形 ○内外面刷毛調整後外面をナデる、内面下平を指ナデ調整	・径2.5cmの平坦面を有する	○灰白色 ○良 ・底部は12mmと厚い
	23-42 14	口徑 器高 腹径	・短く上方へたちあがる ・上縁は不整形 ○内外面ともヨコナデ	・腹部は上方へ内寄ぎみにたちあがる ○内外面ともナデ調整	・平坦面を有する ・底真に連続直線6条を刻する（径3.5cm）	○灰白色 ○良やや軟 ・中位以上に端付着
手づくね土器	23-42 15	口徑 器高 腹径	・短く上方へたちあがり ・上縁は不整形 ○内外面ともヨコナデ	・球形 ○外面は指ナデ調整 ○内面はナデ調整	・不整形な丸底	○灰白色 ○良 ・外面に指紋跡あり
	23-41 16	口徑 器高 腹径	・口縁部不整形 ○内外面ともナデ調整	・サカズキ形を呈する ○内外面ともヨコナデ	・不整形	○灰白色 ○良 ・口縁部外面に黒斑
壺 A <sub>1</sub>	23-41 17	口徑 器高 腹径	・口縁部は不整形 ○内外面ともナデ調整	・サカズキ形を呈する ○内外面ともヨコナデ	・不整形	○灰白色 ○良やや軟
	23-43 18	口徑 器高 腹径	・頭部で外寄し斜め上方に内寄ぎみにたちあがる ・端部内面は肥厚し、上端は平坦面をもつ ○内外面ともヨコナデ	・長手の球形 ○外面は全面を刷毛調整後、肩部をヨコハケ、のち口縁部から肩部上辺にかけてヨコナデ○内面は上位が右上がり、中位以下が左上りの箇削り	・丸底・内面に指押痕あり ○外面は底裏を覆うように一定方向に刷毛調整	○灰白色 ○良 ・体部中位に端付着・底部内面に炭化物付着
壺 A <sub>3</sub>	23-43 19	口徑 器高 腹径	・斜め上方へ外反する ・端部内面は肥厚し、上端は平坦面をもつ ○内外面ともヨコナデ	・長手の球形 ○外面は全面を刷毛調整後、肩部をヨコハケ、のち口縁部から肩部上辺にかけてヨコナデ○内面は上位が右上がり、中位以下が左上りの箇削り	・丸底・内面に指押痕付着 ○外面は底裏を覆うように一定方向に刷毛調整	○灰白色 ○良 ・体部中位外面に端付着・底部内面に炭化物付着
	23-42 20	口徑 器高 腹径	・頭部で外寄し斜め上方に内寄ぎみにたちあがる ・端部内面は肥厚し、上端は内傾する ○内外面ともヨコナデ	・長手の球形 ○外面は全面を刷毛調整後、肩部をヨコハケ、のち口縁部から肩部上辺にかけてヨコナデ○内面は右方向の尾削り後、ナデ調整	・丸底・内面に指押痕付着 ○外面は底裏を覆うように一定方向に刷毛調整	○淡灰褐色 ○良 砂質 ・体部中位以下端付着

# 図 版 · 図 面

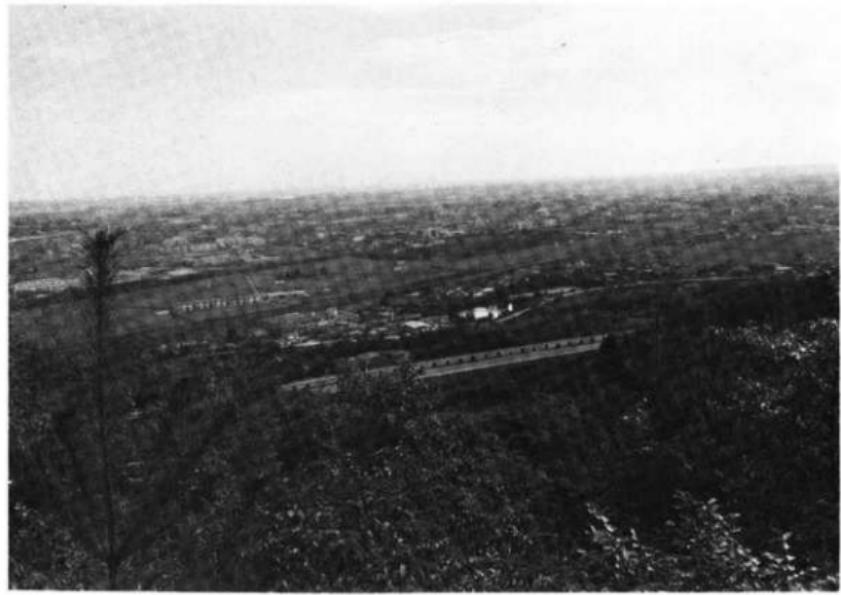




安満遺跡航空写真



a. 造跡遠景(北から、昭和44年撮影)



b. 造跡遠景(北東から、昭和44年撮影)



a. 遺跡近景(東・検尾川堤防から、昭和42年撮影)



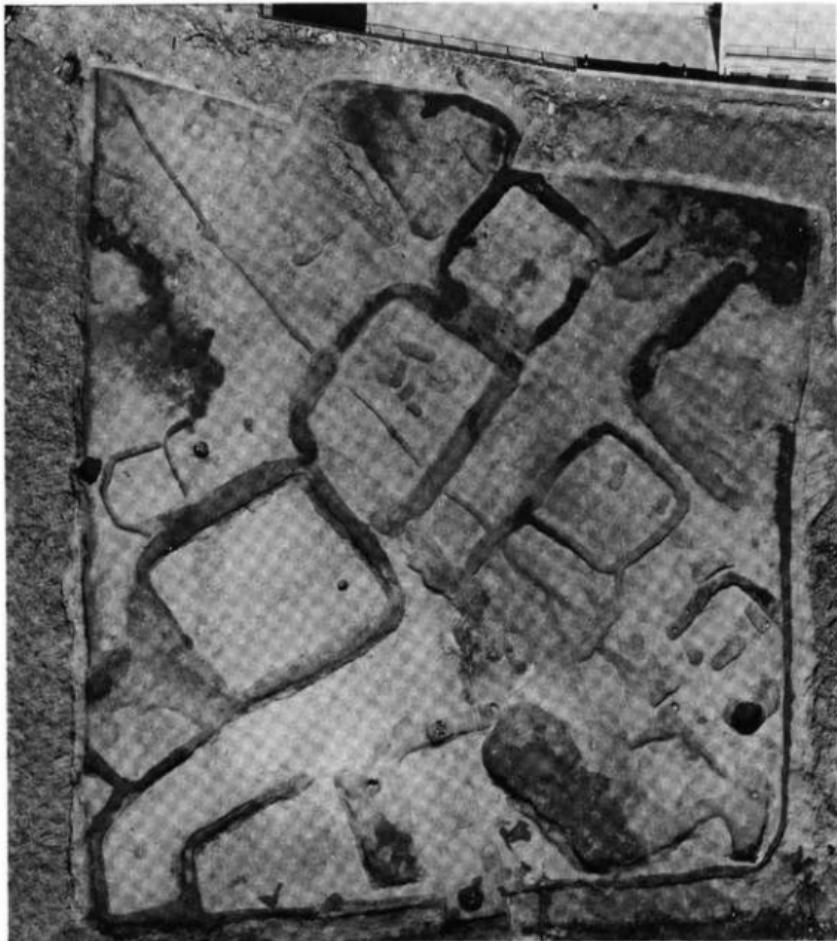
b. 遺跡近景(西から、昭和42年撮影)



a. 調査区近景(南・阪急京都線から、昭和48年撮影)



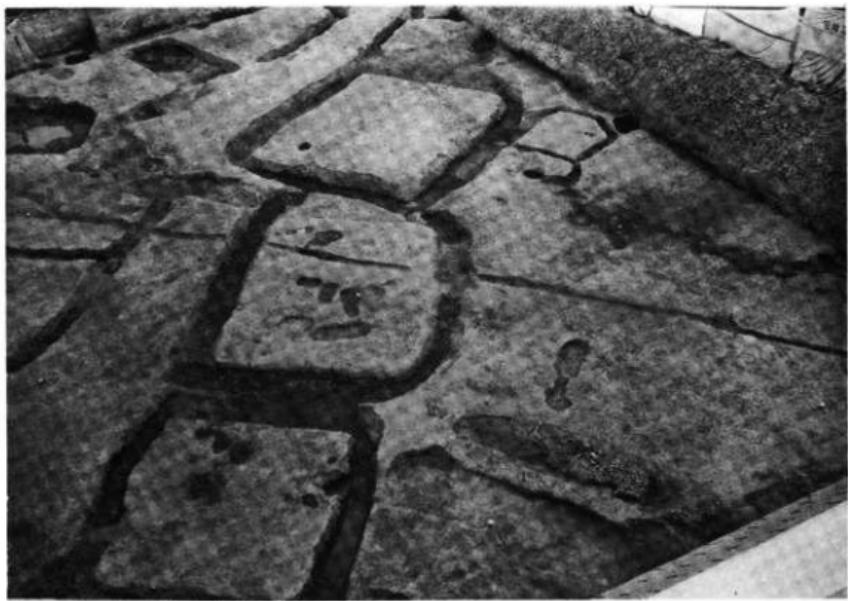
b. 調査区周辺



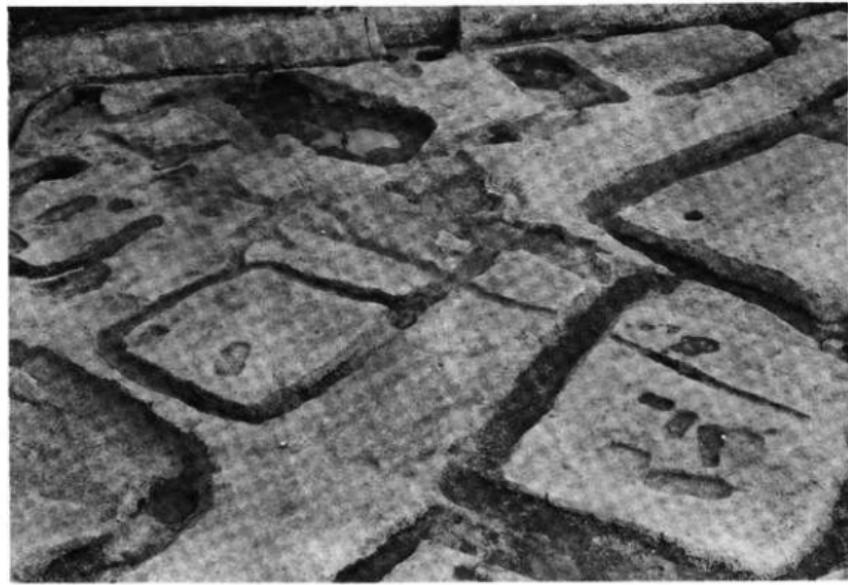
調査区全域



b. 調査位置



a. 方形周溝墓A群(北から)



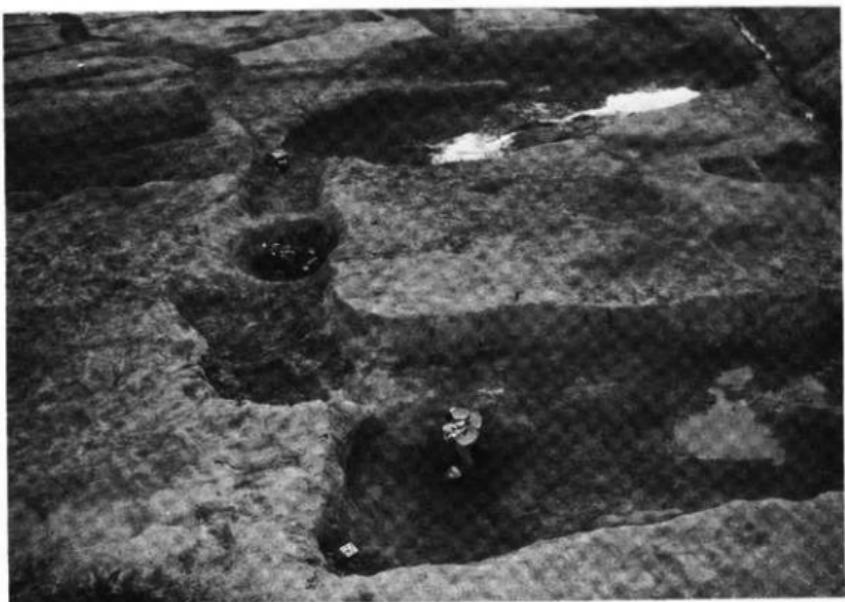
b. 方形周溝墓B群(北から)



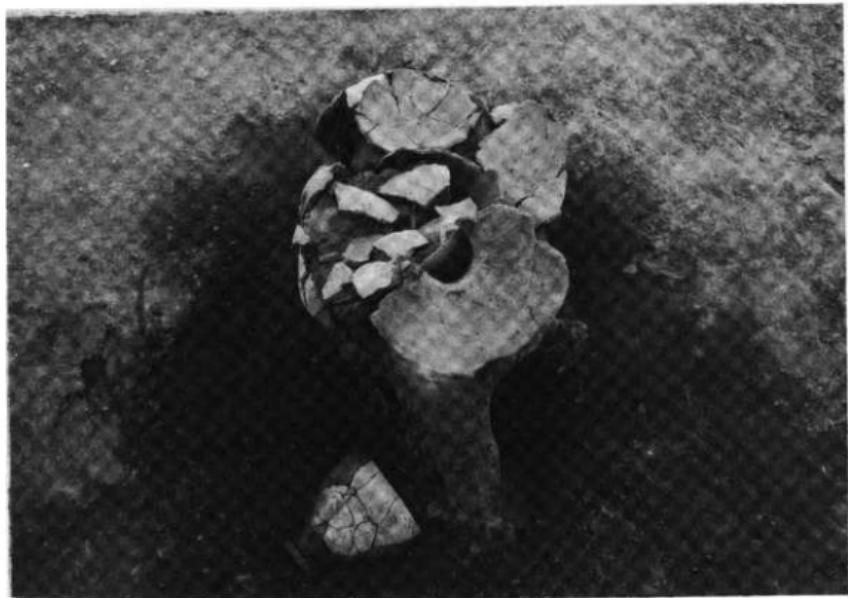
a. 方形周溝墓A 5 西北部供獻土器出土狀態(壺下半部)



b. 方形周溝墓A 5 北東部供獻土器出土狀態(壺上半部)



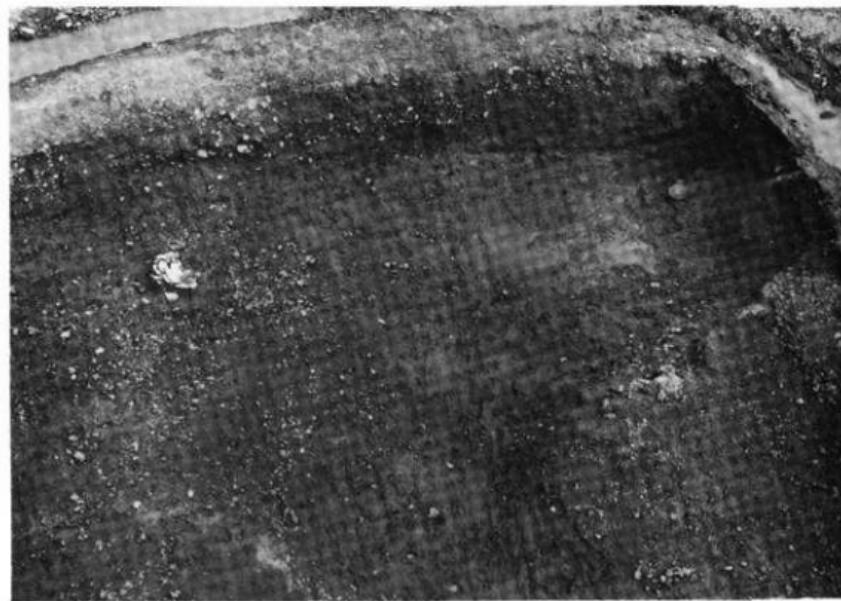
a. 方形周溝墓 B 1 東側周溝、方形周溝墓 B 2 (西から)



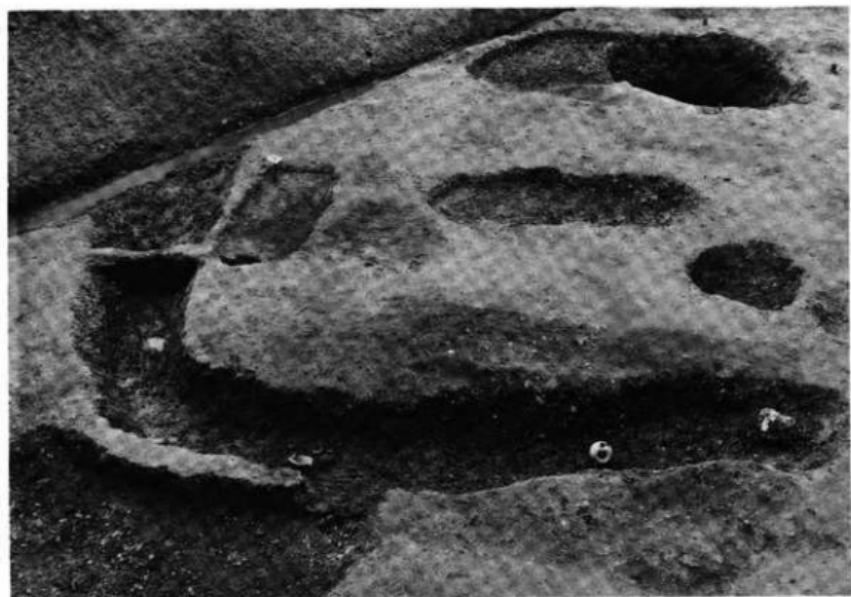
b. 方形周溝墓 B 1 東側周溝内土器出土状態(西から)



a. 方形周溝墓B2北側周溝内土器出土状態(北から)



b. 方形周溝墓B3-2(西から)



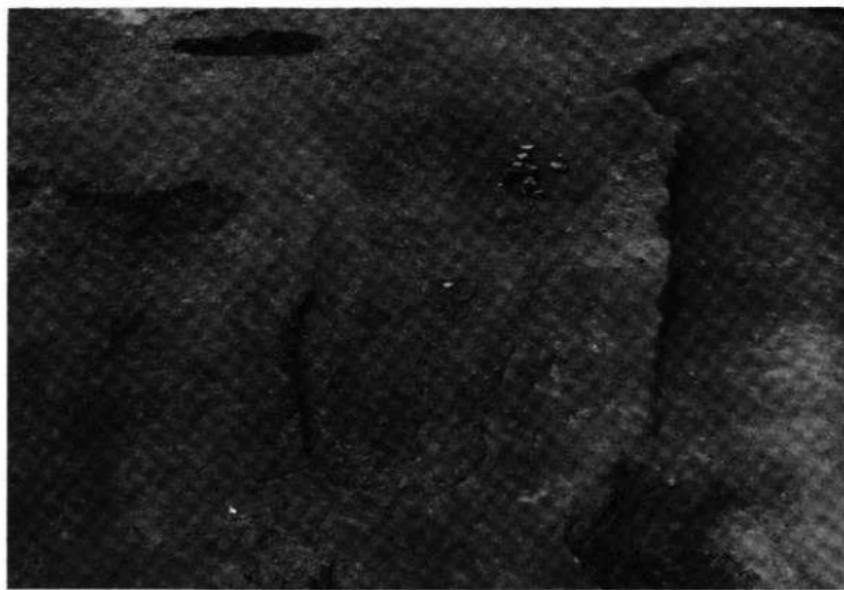
a. 方形周溝墓 B 4-2 (北から)



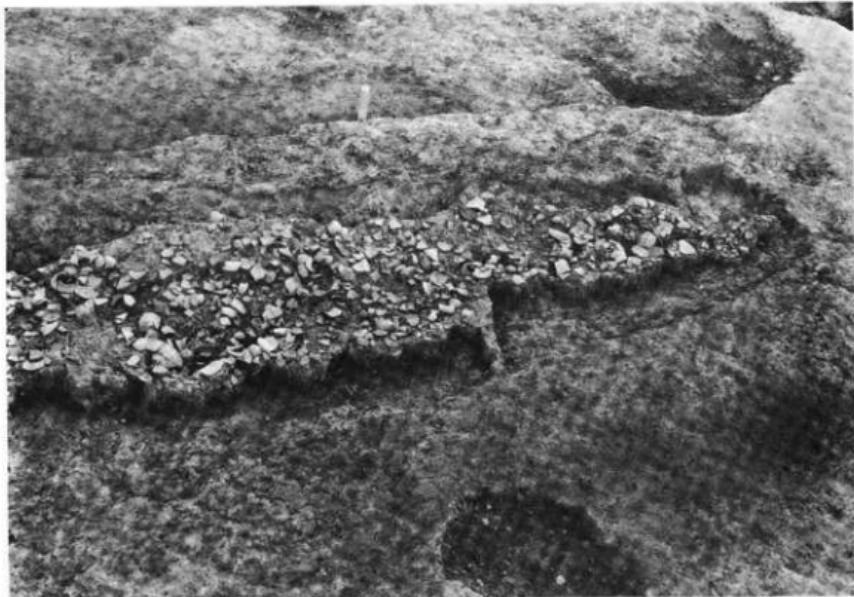
b. 方形周溝墓 B 4-2 東側周溝内土器出土状態(西から)



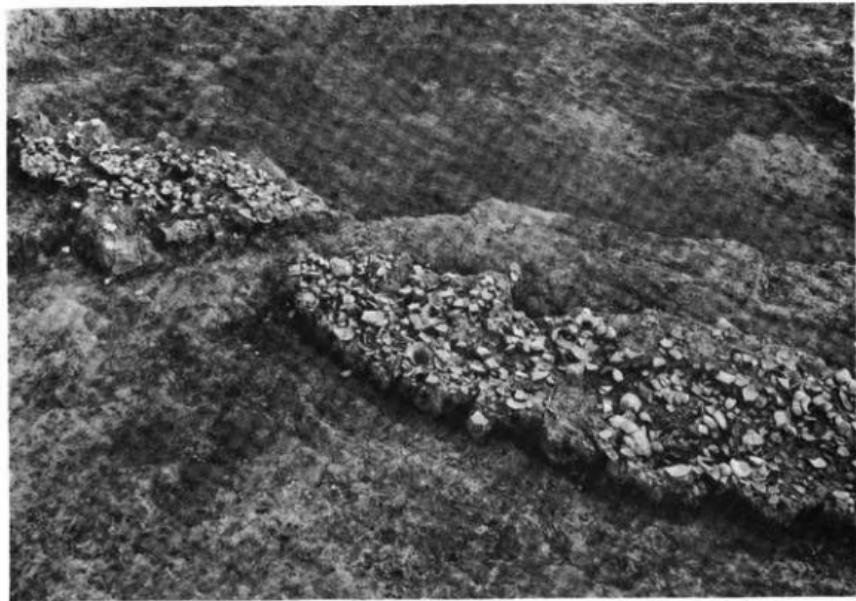
a. 方形周溝墓A 5 - 2 土器出土状態(南から)



b. 方形周溝墓A 5 - 2 土器群除去後(南から)



a. 方形周溝墓A 5-2土器群出土状態(南半分)



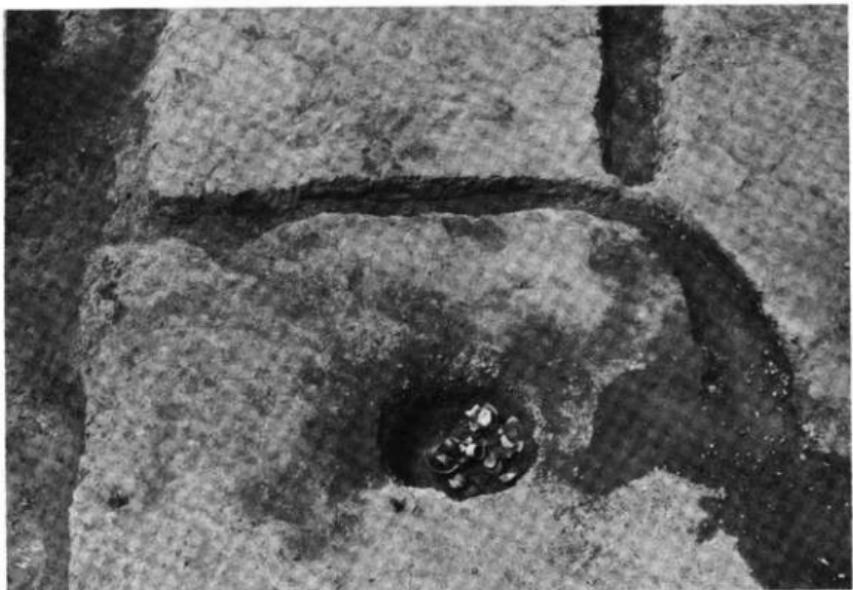
b. 方形周溝墓A 5-2土器群出土状態(北半分)



a. 井戸 1 (東から)



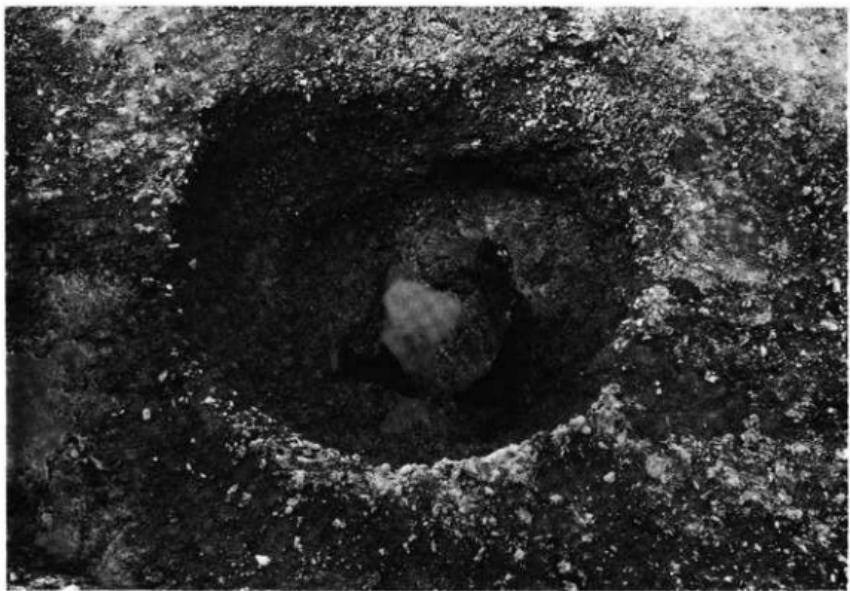
b. 井戸 2 (南から)



a. 方形周溝墓 A 3-3 と井戸 4 (東から)



b. 井戸 4 (北東から)



a. 井戸 5 (南から)



b. 土壌 1 土器出土状態



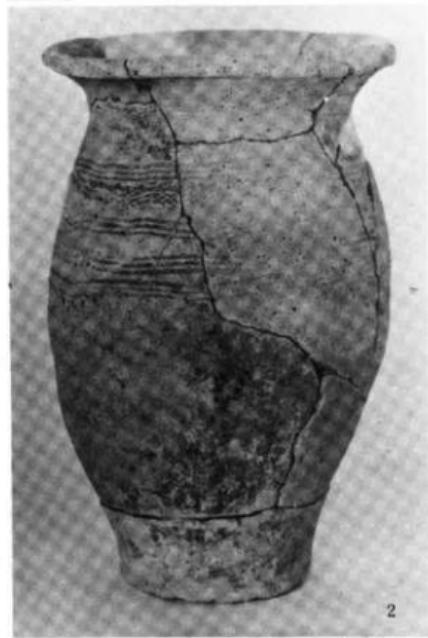
1



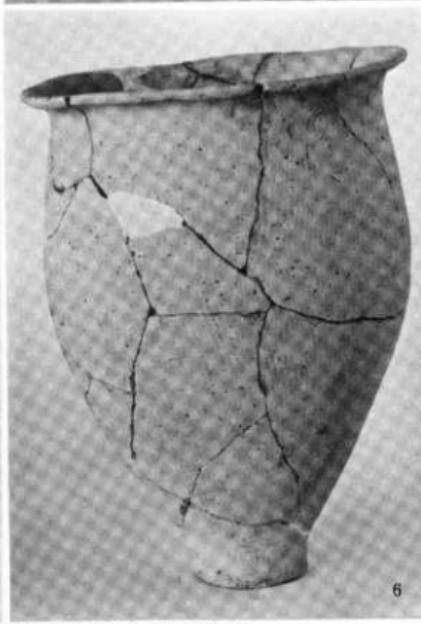
3



7

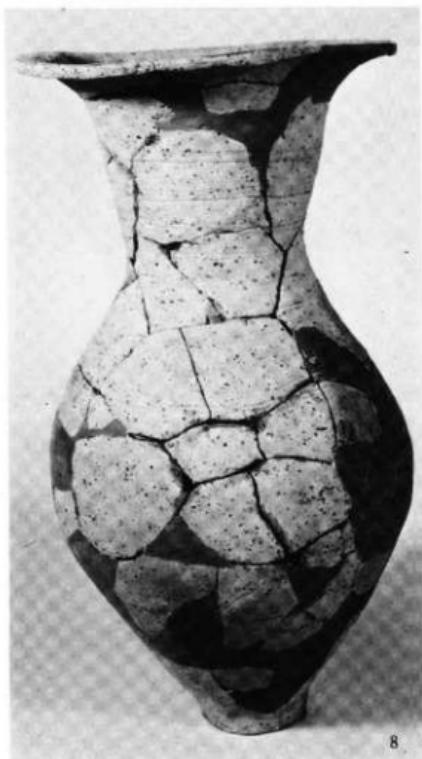


2



6

周清基 A 1. 小形壺 A (1) 周清基 A 3. 壺 C (2) · D (3) 周清基 A 4. 壺 A (6 · 7)



8



9



11



10

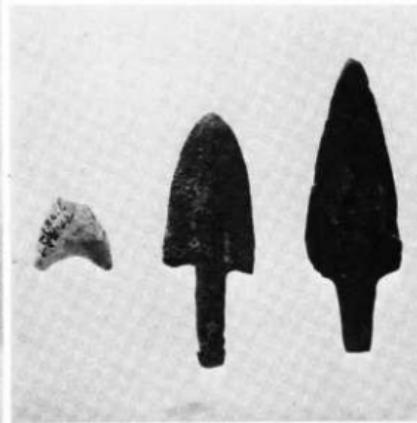
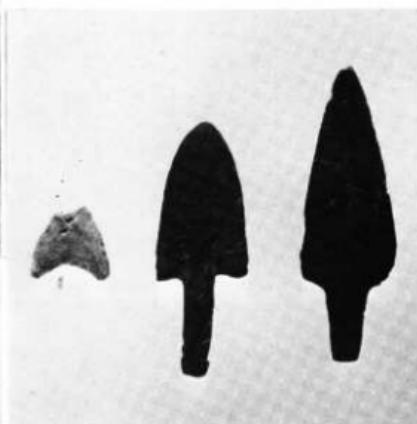
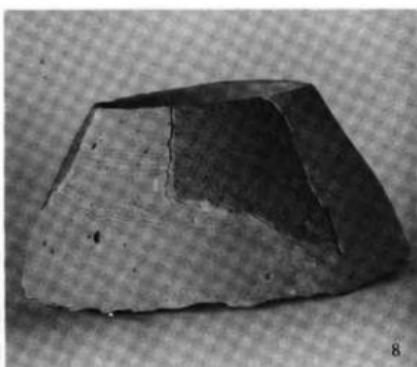
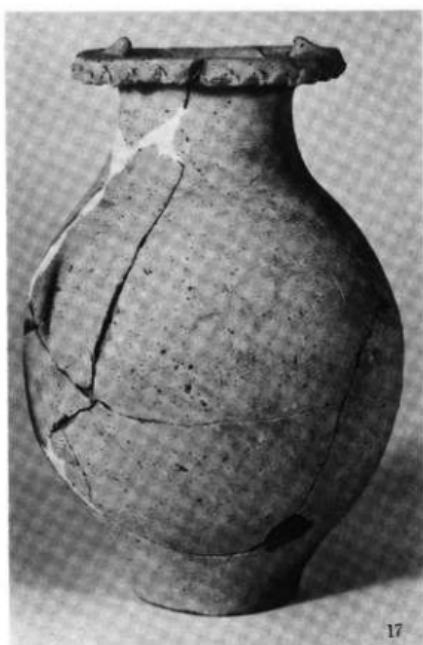


12

周溝墓A 5, 壺A(8)・甕A(9)　周溝墓A 5-2, 壺A(10)　周溝墓B 1, 台付深鉢(11)  
周溝墓B 2, 壺A(12)



周溝墓B 3 - 2, 壺A (13) · 壺A (14) · B (15) 周溝墓B 4 - 2, 壺A (16) 包含層, 壺底部 (17)



周溝墓 B 4 - 2, 壺 B (17)・甕 A (18) 包含層, 壺 D (8) 打製石鏃・銅鏃・磨製石鏃



1



2



3



4



8



9

周溝墓A5-2土器群，壹A<sub>1</sub>(1~3)·A<sub>2</sub>(4)·B<sub>1</sub>(8)·B<sub>2</sub>(9)



周清墓 A 5 - 2 土器群。壹 B<sub>1</sub> (5·6) · B<sub>2</sub> (12·14·15) · B<sub>3</sub> (16·17) · D (20) · E (21)